湖月抄

若むらさき

角総

細 巻ノ名以テ奇異ニ網ヲ号ス之 云には あげまきになかき契り
をむすびこめおなじ所によりもあはなん 網には あげまきは
ところあれはよりあはしと 細 あげまきは神事には総角
とかけり 童のかみ 結ふ事には角総と書り 是は糸にて
むすびたるなり 此巻の名は結ふ事を本用とし 花 あげまきは
よ二つあり 童をもいふ 髪をもいふ事にあげまきといふ
又車などにいふもありて かく結ぶをもあげまきといふ 此
あげまきは糸にてむすびたるよしなり 細 薫九三第の秋よりしま
でのまき 孟 此巻 薫九三第の秋より年をとれり 但
第といふ 終不用

あまた年みゝなれ給ひにし
細 此巻は紅葉の年
となれど八の宮薨し
給ふより始まりし
ことなり

かくてそのゆかりあるに
細 薫の志まだつゞく
孟 薫のまだまでは何に
ならは網でもそゝ

あまた年みゝなれ給ひにし川風も この（細 八宮）
秋はいとはしたなくものがなしくて 御（姫君心）
はてのこといそがせ給ふ おほかたのあるべ（一回忌）
かしきことゞもは 中納言殿 あざり（孟 薫也）
などぞつかうまつり給ひける こゝには法（孟 姫君達の喪服）
服のことなど 経のかざり こまかなる（花 経机の覆などのこと）
御あつかひを 人のきこゆるにしたがひ
ていとなみ給ふも いとものはかなくあはれ
なるに かゝるよその御うしろみなからまし（薫のこと）
かばと見えたり みづからもまうでゝ今（孟 服衣を脱ぎ捨て給ふ時）
はとぬぎすて給ふほどの御とぶらひあさ（姫君へ）
からずきこえ給ふ あざりもこゝにまいれり

まうがうのいとゝ
河名香糸 行香机ニ四角ニ
結垂総也 花さまなくの
香を紙よ包て五色の
糸よて結つけて仏よ
さゝぐるを 細 名香糸
まて結びあぐる性子
る事なんかし 河海抄不
為ふ孟同
かくてもへぬる 細 糸の縁ある
由也 別とうしとおよ
清ね旅なれども作
へぬる物ぞとありけり
孟八文よなされてうく
かくてもへぬると姫君達
の御心也と叶へり
さるを 細 糸をこなひ
明 花鳥ニ挍式とひろり
本勤之令 神祇令第六ニ
注 金水桶金総狂奉伴
勢神宮ニ 孟いとをと
くる物也 たとめニが
うちとのもとをうちと
かけしむ時かに糸ひきみ

名香のいとひきみだりて、か
くてもへぬるなどうちかたらひ給へ
なりけり。むすびあげたるたゝりのすだ
れのつまより几帳のほころびよりすきて
見えければ、そのことゝ心えて、我涙をば
玉にぬかなんとうちずじ給へる。伊勢
の御もかくこそありけめとをかしうきこゆる
るも、内の人はきゝしりがほにさしいらへ
給はむもつゝましくて、ものとはなしにと
か、つらゆきがこの世ながらの別をだに
心ぼそきすぢにひきかけゝんをなど、げに

古ごと 細 薫の糸とよりあはせ
ものをといふ哥の心也伊勢が哥に
孟七条の后うせ給ひし時伊勢かくよみける
伊勢のごと 細 ニハ御也 つらぬきとめよ
ものとハなしに 細 姫君のなげき給ふ事をいはず
つらゆきが哥之 古今よハものとハなしにとある
よ死別ならず
御願文つくり経仏供養
ぜらるべき
八宮周忌よ薫の願文作
よ 細 願文よハ
何の仏何の経何の巻
何の仏何軀 法事のこと
かくのごとき此の作り善
事文草本朝文粋等に
願文あまたありて見ゆ
へし
あげまきに 細 薫の君也を
おのれのいはんと思ふ事よ
あらはしてよみかけたり
あげまきのくりかへしよみ
香の糸とあげまきにむ
すびしかれどもと云て
すゑかけまきの結ひなる

ぞ人の心をのぶるたよりなりけるを思ひ出給
ふ。御願文つくり経仏供養ぜらるべきこゝろばへ
かきいで給へるすゞりのついでに、まらうと
よ、
あげまきにながきちぎりを結びこめ
おなじ所によりもあはなんとかきて見せ
たてまつり給へれば、例のとうるさけれど、
ぬきもあへずもろき涙の玉の緒に
ながきちぎりをいかゞむすばん

さくまりあかんとし 師 世界ハつくらひもめでたひ めぐりめぐりて一所へ
めぐりあはれぞうまり花のけまきやひろぐろりやさぐりてわかれたまりびわ
ひまなりかゝりあひハまろりや 催馬楽 今更ひろかゝりと八八人ゝろりせ世のさ
ぐりころと人のさぐりて行くろまそつてらし
わくるあくでど 細 むの給よ笑ひとむすぶべき身もそてもみしとえ 盃 めぐるもあへど とハ
そこまつらねんぎろやうもなきことし 師 前よりくてもへめぐるすどそうつ徊ど
おそてんなく一ト家のなれあひてハなかくしふへてきわたくしおかしめぐさぬ姫君のなれ
そこ此処てさまもえを命も久しくろまじなれどもちぎる契りといりでてハむもと
ぐるぐるとつくのへんどのりきさるこゝろのむれとるよとのひくけくらさまつり
あんどいたまと
細 月宗をとるさゝきさ
よろりけてわつとハ
何とかのとまよせん 盃 何
と命あってもあそれ
ハせんハわりもしうて 葦
の徊し 師 思ひて 条の縁
まとりつぐくるべし
うらしの世ぐんハ 細 葦乃
音分のうれへと云まぐへ
生でしわかしねさ面よう
めぐりれど白家のつとと
侍よ早縁しく 盃 葦の
紙くハとハ大君のあへそ
ゆりてもろりしくとひて
とあれじあはどハあまよとどうしめげよ
みずめ給ふけりうのほうへハりくそこり
大君のさかし
とるくりくなちてでかけりしげるろり
葦のし
すりくとええの結ゆうしで家のほこしを
ぞもめやりよまもし給ふともほんよりろ
細 白家のつとし
しらうしう紙かやうのうさまよもとうしもうくそ
なれど
さ面へるほ草上一めらく世の一そめ給ふのかけ

白家のもとをやくろうくえ草子比し
ろ のくとま 細 白家ねきの方にとくえさうけんもとつり
ゆくまよしろめりしろふハ じしぬしるまやどうう海ろうぶ海り
細 真実よありへおれまろ いとうくろんれ孰色とうすう海くもよう
さし 盃 白家のほんよもいつ きろめうらハあるまじげるろ紙なとどう
なるとどハ姉きのくさう
をくころ思ひ怪みらく いぞく白家といるひすへぞう
侍せうれもどいまをけ うあがわめしとりてまされすわら
君のつれするよまげし 姫君ののすとのみて
さまにあるも侍しらく んよれきまんでのがしまろくもぢくハ
しくとめくうぐ海まに 細 一方にうら縁をみらまで
えれども真実うしろめ ともすくぬをとうそしと紙くえくのとも
まさにくそてハうさまと葦 葦のこころのさとのまで
の大君よやさうらえ てるさせまんハがばりうしなくさのを
きゝあろうろよさうひてらくれしくふ
いとまくも 細 大君のほん んどとりくもおわしきくらんさ海など
とあとえ如何とえ 紙さはやりまうけ給ゑりふめしがれとい
さく堂し 細 大君の白 ろ君切く
く葦ろよろまもしえ之 ともめざちて世のてまへハさるへゐのとじ

孟嘗はもろこしの人なり
じんといへばてうに二疋あり
き国にて其孫がふもとに
せうと大君の相く
ゆきようゆへ信るわるよ
細くく世をさみれうる宗る
か信君よハ翁よと思ふ
へきこなく
何とのミちをそくれ
細ひろさまんをそれ客
ハの中にうれしもを
此のさまよむきちハ
白衣へきあひけのよゆ文ハ
業の大君をよ外のかく結
そうけるとこの其の朝道
いかしへもあよ　細ひろさ
この翁をもん古文ハ年の
つゐそうもの給なり
しとく
程ひろさ海よく
細合わらよひろきこころ
翁をも思ひ縁のと宗
しへろ京ん人しとく
此えんりこちてとぞ

のにてこそハかくまぞあやおさこしれ
さあしかうおさ信うして、へがそてなくわりて分し
作れ、それと思ひ、ひざらかこりて（大君の人々ののありさ国どうり）
わきさことしまゝつきまうこうらぞれば（あるう深き業のありさるぞうとハるとかあて）
ようろも中ぬるべしよのあらん人ハ是路
をことあまじき我何ぞ路をとくれ
そめよかりうるよ、この乃給めをもらハ
いかしへも云うまうけてもあしバかうら
ばるとも未のあしまじきよとうちせ（八字の中以云しちかりしとく）
くの給をとくことをそうりしけ我く
宗さ海ふくじつきさる方と思ふ事へく
ゆがしとそれぞれかうろうなん思ハおせ作れ

ゆえてハ君の命身のことく
どうちく孟よつきさる
うるぞと思ひ路て山里よ
住えそうして新作ふうや
ことうちて
をやまうくれ　孟ハうらこ
そことやまがくれの桜本ま
れらハ花よなさバかりえ
いろく桜木よハ　孟大君
のにはよりれしそわらめ
中君ぞ山ぞくれの桜本
よハ若ぞ尽しと思ふと
のよし
まだらうしう　孟りそわう
うえまかしきふく
けさやうよ地ぞるひ
細葉の心くはよとえう
うしのるりハけさやうよ
ハのあひさくさとるる
念しとく　孟けさやうに
ハあさやうよへさえしらら
ハ紋りしこてそよハいぞ
花やせられんとうそりの
思ふく

バともらくもこそてんかくろうてざらかれ
中君のるく　もとつしまでとりうる得どくりてこそやま
ぐれハへ戸ちろぞろしうろく給人の由らう
へをいうこくくろさまはすうをそてどこともり
まぐ人されどあめりかくをうねずおもし作れ
いけらるとかつきさよようあるんとうらるげ（何とぞつき世のありさ海ありあんとて）
ますそのおもぞれ結ろる給のけそうひ
いも家げ地、げあうるよ地とるびてもい（孟あさやかなる）
うぐらハさうしぐらう海をむしとことつり
ゐく、例のあら人ぬし出てぞそうてひ給（細葉の泪　孟　八字の信ひしるさのうちこゆりしくそてまう）
年活そして後の世ざ海のちろだ入ぞ
をくさ事りそめうしとどりのん明ぞけるよ

物がたりけよ　細 古文の
ほまへこの流るりとハ姫
君なきのるみえ　孟 八文の
葉よ此君達そうさま
うとやうに作品れる
ごとく
物がたりとるそてありあるひ
孟 八文の作せとられる
とハ大君の流れのつうさ
よまうひさうと葉の稲
し
いらよ物がたりとさうかる
のるるうやと
何と物がたりとさしう
このことをりしとう
この流れあそもあるよ
やくさうりさとこく
世の人もやうくいひなさと
やう　孟 大君の身ハ葉
いと世かもおみさうくとく

物がたりかうめりしはきのひかりひこのほ
ことのよどものよまのきそわてありしこ
世べくるんの絡ちざうりてしど物がたりとさ
てあり給しはありさ御どをもさはさが
ひそれはころをどんどものいう、おやみくよ
そのつうげるるへいうよ物がたりとさまつうか
君ことるるふやしらさうしさ　とさ
へるひてあむ、このぐしぶつてん給やう（葉の事つりくのあかく）
をあるん、いとおやえつさ事どもかく世中
とみころをさうむかるくろう終さうん（孟 宿執）（おれだまや大君へるこて久んとく）
さうかくやうりまでをぬめしあれよけん
世人をやうくいひなさとやうあるへうある

うち安めり　細 秘蝶よこ
ことをりしうひさ
あふしく
うらくよさうしとも物がたり
けけうる　細 りしこと
古いハ流れむけのなとまや
いく孟 君かじ不記り
白文へ中君ほるかとも中
世どもいふらうけあるの
いうとうさつよ流れいくう
と葉の年よのるへ
例のもうびさう年くう
抄此条の尤有き事とれ
かそいう酒ぐにもさいへう

よかすじうは、君のおほしもおもへきこゆ（八つの歳のときかく）
えうど秘もんへをよのつゐよふしうけてそこ
こしうはずやと物ひらくつさかうある
べきことよくもさやうなりてあめつく
やしあるまでの給づけて、さやのほことを（細 白めく）
をうらえ様ゆるようしろめくさうへある
じしうらひけ給さ御すゐぬやうらく
よきりにも物りぬしむけさうこるのさ
御あらん、秘いつまでくとうるすがる川くの
まん、へん例のもうびさう女房などほかなう（葉よ姫く）（お前 女たち）
こととよえん、よろうしらんといひまどく（今よ世のえ年るとを細そてさに御よいふく）
ことうぐりるとをすめるとこらことはあ

いつくらかてらは葉の紙
ありていでもれんもしけり乃
これくしれるくいひのすべ
さかりし
ことさんおしれ　弁ハ弁く
ききりしらんいすくてあり
のまつにそひとびらんむし
いうおもくものもよ何やう
やみと　三　増賀別世つよささ
よまり方のれんりけもしばおすて
まれんのひとへるのみど
あつまそてハたみしとく葉乃
うちひきみおろし
そのりけあさとみのりと
盃(増)賀人のもとにて立よう
本のりとハ教むつけすく
し　　三　ての仏ちそ
きさ敢とやしきらく
ちろきすらづるる人も
抄　別して甚くしきぞう
まりぬ人さへおもりくハ退敬
すりるなり

らん。ころのうちよりは、おしはかりうらく
きれいしぐもとことどりにいりく
人はきのはしのやうにおもはるゝよと
あやいうふもくよのつりよかやうや
なき、せすひより紙つれば、窮さよみえん待
らぬうてさうぬられたもどうしご
ろぞよみすよのいみじとみえりけあそこれりとの
てろ人をまゝしぶらりさいゝ紙捨ぞくれ
よろぞうハ消どくよつけくまうぐ
ちり世をしのかろきすらづるる人も世
くらぬりとそてもろあくろよみすて
いまは、おさずしもしちらとまりなさけよ

りびゆく、ちとしまし、しょしくらめたしてうで
里ありてなう月をらんれあらう海ハ
いとおしくもなし、ごいうられうらし
さよおも月しもよじう月里つれ、ぽまへ
かうみさめこなるさは弟どもをよそにいふよ
といふかもうふるびさまつらんとおる
うらよそしつも皆てん人へくらりてを
のこころざしもひどいふかひなうすることを
みなくらそいあらめいふなる人へらいしらう
て世をさへもくしりて、すべて松の葉を
もとそつしもうやまふじよ、いけう
弟の様をさきようりてこそハ仏のれいと

ありしやしくよりよつりて　抄
より作かへるれうるぬるさとり
をと蓮へ弁の紙りやき詞く
ふさいるうれうらつきまよ
細　わまりりよゆらうれ
うりさとハいりくとくく
抄　おかぞうくしくともいさるを
そしきき受飲みどものつくるま
みどハいりくと共ありしつの里
うりべし
世よみすびさうまつてんとある
づりよそうし里おるやうるれ
こあうさ法ゑよてうら
いうやうれ後へおいりけるて
もろうしうくぬるすとそれ
とゆうとやしそん人ハ物のし
ありぬ人へおるべきとらい
松のそをすゝきて
細とききてハ食之　何　其
荷為衣松葉為食
沙門隠士行世師　仏法修
行の世捨人と云と皆
弟命のまとてこさるよ
相名利とむさぼりて

仏のおしへとも紙にこゝを
こそくどこゝろすゝしとく
まうきけんにてもみこれ給ぬ
つゝき　師　婦人道のけんそき
あくやうよりせどもとく
女房ハ作者の身の中をもよ
うねんこの所とりみ
もとよりを業へ哀ぶ給りやよ
このむくとも　細　教訓よ
もより給へさうくへ業の
調よけんかへとこのいと
とあやふくよ抱つけ
ならくいつまめかしとさ
つう方のすゝめまやと
そう逸善さそたりはん
こゝもをしとひとり　孟　抄
もろ〳〵きまうぬとく

みれ方と　細　中君之く山
添く業の名く弱き世な
つるれんさうしよへ此中君
とをしゆうし給つるれんと
うり気わゆゑのけんよ中
君ハとさも物がしめさうと
女もむけすゝむしせん　好
の修うし
こやの此文などを給ゆうへ
おおうり中君とゝ見など
八から人へくそれをまうこと
しまうすとハ大君ことよひ
あわぬとく
こまでゝこ女がしうかう
女それがとよみえけれ
くうりけものもられ
くハあれどもとく
うづうちひすうつうは
女業の浮世よ色世なんよ
も此人ひく方の名制
いおうとく
わくさめれさハえそひるを
とまかくうん
孟　大君をさうしとまそ中君
へんうつまし死と業の
河之
そのつゑれならひるう　孟　無

しへとも、こゝろくまれてとかくこゝるひを
とすれなどやうのようしぬことに給世あしこ
らせ、つゝきこれこゝろかどこゝしこゝくれまめべきさ
ことわりも給めれど、こゝくひへくを抱し（おお　大君のけんつきさあとの業）
（へかり）給ふとて、すゞめの名とるんいうぞ人めうしう
ともかくひすしきんと思ひて給べう
めうゝうこ山かうつかうつゝてゝせ給め
あはれがしのこゝうしへくこゝすりあれ
つるけうひまはじうんだへそひきこ
せまひ今ハとまた海うゞ海よこ海うら
あまもそちよきてくかよひ給めよふの
れうこしまさやうよ女をもむけてきこえ

給そくとしうん女がもくへるめう。こや乃此（細　白文之）
かこるとゝ給めうえ、うゝくよまわくきこさ（細　業ゟ）
れうしとすうしと給めうとゝこてあれバ、お
それならば此ひとをしとさこてとまきまうよ（河　大君の此遺言とかうり）
しらい霧の世ようこうつうんうきうへさくこ
えうよそんの名あれバいつくこゝみもえ、ながを（孟　此見寄ハ女の）
らん女がじしなまくに給、さまぞそく。（細）
女がしうゝうがいとられしこきとをれど、
名のひくるんかうりさひとつうま。（細　大君よん此引せ）
うき給をまうめくきりのなりされバおう
をあてさはえそひす給をまじくるへの
つゝよなよひうるうちすらみとめしきこや、（助定之）

猶の方まそまろすくさ
只源氏すくうらむき
てや物語とかか世上
の風流かさこころもそ
へきしいこし

ささひの文　細　花ゐる秋ね
中文とあるめ原忠ハ明文
中文なり葉とく忠貴
のよしと孟日

しづかやうよ物語て。このこいてうさ海
よすしんさしむつひてどようくよさごめる
きよの物語と。へぞそすく當て。つく語
ほうてろのく海ゆへどりてるす語えん
るんたくしりしるどの。さやうよむつまうし
葉ま八女兄貴の文くらしさが奇きこと
き雅るろもるすくて。いとさうくざえくあん
世中のあふてしのあそれからむ。おりしうとも
られそうもとくるよつけさうゐる猪をを
雅まてうわえせん人もみかれてく
ぞろよこれそのこふろ身すれどいさゐすうよ
ふろざさうすく迚ゆらまようしとうろまくまうの
ゆゑ中なあく
こころもわさいの文みそて。るすれくえう。
さやうよみそて へうとゐるさきのまつゐるて

ふくしさそて　孟　こゝくし
さまそ忠ふうすをもうら
とけていふるおとくし
まりくらよまりくう
細　大君のなさし我思をいへ
より出ましへや幸の昆
とし

細纔之
くゝしく紙とてしみうへきみともあくかれ。三
細父之
父のとしおいやへねやとゝもさきひへさきみもあくぬ。
釈の礼義あれハ兄弟のやうまゐれ
れわりくしことなれどもあふうあれだにもや
訓かくしとえ
むくすれ当しさせぞりしその和氏女ハ。
むべていとうくつましう物そろう
荒てふうまろべきくんほそゝうり。
細好文の方え
うちざりのすさひまてもけうじうら
さうしてはべてきてばゆくありかぞえん
しつうさこうくうさかくまいて心
よさめうとくるのことへ折ふしのこともう
さくてふうあしうもいふせくとたまこと
ふしき
ゆう氣色もぞまるしなくぬこしも我なるか

さりとてもわしさ殊に八
中君と白菊へとゆう
うらひらきつりくとも
わしさやうのうすへりふま
しきく薫はよくらま
うせてへるしえうえねそ
とるすり
まうせてやんこのんぬ
三うらまるせてやえまへ
ぬまうせてえまへとも

いづれもそろしげうるは
おりさ殊ども　お薫も大
君もかずうさ海なり
ねうよ思ひのゆうて八何方
もえりさぬとえ弁尼
のん申し

わざやうるつを抱える
うら　お薫のさざうよへ
のくまりねども　でとのん
づれみくらうりげよ

細白の
らうぎりあすくさくおすし此よぎうすれ
のはてし終をさうくるをあしざ海よ八さ
うしじと　ますそてやへこ結をぬるど
いひぬまつり　おいゞ人ええざうぞくりうこう胸
そまるよ　わしうもゆしげるうはわりさ海
どいくをうらよさきをわしせなすうづやしく
さへど　いづらこをそぞうしげるうはわりさ海
どもとるすれど　おりひのまてゆはえきこく
どこうしひへとまりまそて抱てうりるみどの
どやうよ　ゆうし胸まうて　やもとくひくう
し給つ　わざやうるすくまぞくりのうくえうう
なりは親色　やうしくまりるすく如ゆけえ

うとめうると大君のむ
つりくまげしまづう
もざしよ對面しま之

細薫の居給庭へ来れる
みうくいをかてとそう
西向し　孟薫弥少を
見とともしうれと薫
のあやまし　それ八来れ
の形の見てんそりふと
てとしさせまうるえ

まづうりうそしうしけて　ゆすゝし給りん
ことあへいよくうりしきれど　大方よそしへ
わりゞくう　哀なりる人のはれかずれゞとよ
あうをりてるしげうそて　對面とふすみ
胸しけのおうずる中の戸とおけてこわ
しのえけざやうよううげさをて　さぞれ
よ屏風とそへてぞ越えすゝとふも打か
まるぶつ気しもれど　ちやまし　うく
ひるひなりとおうりまるどいさめて　うさ
わうしまうり流そこ抱るど　わざく泣すく
志うして気しせまつりはとものくて　ゆるし
ゆへつく志さうるなどして　いざさ世給

しらしくつゆもおしなべて
孟大君のしらとけんやう
よいてさき神りしるかりし
うあへしゝひまふ孫ふ
のめさゝとえてしるく
細葉のこ まそて 蓋綏之

大かさの世の中のすとも
孟 ちくも意給のもはうて
て葉のゆさるしえ
あられみてかうくも
三 葉の抱くかりし宋
ちもし

孟扇を之
てりらうめいさりくさまあめのいぎりて伏れ
ますへんげよくよくりてそうして君がめくと
物後やのし給ふちうくべうもおゝねくの
うちちうしげる君飛つきそて抱の給へ
万さ海のなすみめるしべこうるよ入るくおしく
篭屏風へりを中の海てうえ
てうしをえられしうく絹とをしるさるの
へうそぶかりをさえりがうろうそ細つる
すく忍つてもぐもとこうをそさのおすり
おこがましうをおうるると忍つけしな
細葉のゝよ忍ひなあうく
进どうれなくて大かさの世中れゝとゞも
義ふをかりしうをさ海く哭一寐助あく
くうしひやのし給ふ同ふほ人へぐちりうな
人君のゝうえ女房生近く作様宮ひゝ飛之

きしとりてれ給えさ
らうん 孟さふど婦人て
の男従してちうさ師と
てもそてえされまう
とおりふ敢とえ
まりうきこしぞ
三 人々へ給るんして
ちくさめうねえ
ゆうらまけ給ふ人え
孟 葉の我身をとこう
て山接ふうつ人と大君
のまで

どの給をきこつれどくさしをとりてえる
給へざしるんとおふべうめれいぞしとを
退てく
ありうえてしむぞさしあさぞさつゝこれ
みって私の性ともしむ史もうくぐる人
おゝ君のゝえ
なし物むつゝうて志のひく人めをど
細大君の御え
助ぐろつむぞこうちのさゝくうるやまし
おかつき
う終るをよしあらひて曉ぐさふらん
ひとそいり給るんとすうそしさるう
細葉の相
どうるけ作りつら人へおしていとしるが
しくれどうう哭しうけ給くうるなぐ
さめくこしそ給れうらもそてい世給る
ぐいとむ閉そうんとて扉風をやと

つくろふさまとしへのかたも
かいん　薫のおもひより
やうよ猶へつくろうてはれて
いうらゝるむゝ猶ゝしきず
のおもひて議めるさやう
まよりすをらびくの給
ひていつ給めてうらとらち
まうてやうくとての給ふ
大君の詞也
思ひしせんとしてう
孟議めとりうせんとて
もろわさをやくん大君の
詞よ議ゆうてはうれど
やりふらんとのおふよ薫也
ゐろうろうきうりつらう
作とうつくるりとん云
それと祈ってもまだ
はおもしとくとをもかゝら
うみゆうよろうしすくのおふ
詞の言也

とりあへて入給ぬ。いとむくつけうてなかり　大君の心也
うちうちにもさまつるよ。さやうにしてめやすかれ　細　大君の詞也
でいとさうなることゝもおもひすまれはべるべうて
ゆかしくはうときかゝやいかん。めづらか
なるわざなれどわかはめあつかふ身のうへのおほ　細　割しつきし妹人とのひ中し也　孟　薫の詞也
くおもしろければはぬ心をみえまうにかり
わかねば思ひしきんとぞんしかへつゞる
なりととごろわつくきよかりしなうより
はおもん私のはまへふかくちかごとりうて
給ゝんうくそなとらさせ給へれや　孟　はさは
かゝしと思ひそめて給ふれば人へかくしも
とりかり思ふまじかれどよろしきづくへか

人かくしもとも〳〵はゞ事りつりくらめれと　世の人もりやうにしもなく事ゝ中とへはみえまかりし
ちかくさ猶ゝう
細　薫よ孔の作給もうく
ようおりう　孟　大君のうゝう
うつも
三　薫の心也
ゐうりのしとそろ詞
ほいのうへ人へ入えさうり給ひあ
世秋しまんのどうかく
いまへでうしつれ給き
うぁん人へうるもあらま
しとくし我かうくでさ
でひうらん人もあらん
とおもひくうかく
ゐり
ゐうひうすくゆしと思ひてゐ
きうこ氣色のいとくを
しうれい　孟　そしてくさの
んのやうらうひさへおやくくう
なとへりうき次よ事れ
よく青年さとと次へを

ちれものかくゐりし給ぞやとそなみかくさ　細　愚癡なるよし　師　大君よりおぼえるすをとどり
ほうるうほけよれぐしのこゝれかりきるを。
うきやつもつゝまんじん人のはけそひそふや
うようわりかうしけそりうこゝろほそ　大君を思ふる詞也　細　薫の心也
うわさましされもとくるよもいさらん人へ
さるわざわろきじけるぞ我かくそ易　めるゝ
うるへをおしまろべさぞやくぞれおし
いるようかしきさすさすましとて
くさのうちのやそこゝひさへおやくしれ
かしまへでけんかりひなくうしと思ひてな　大君の心也　薫の心也
さ給はゝ氣色のいとくるしけれはべらくん

おかくされどゐかうまよ大
君のうしと思ひかう見を
そられいらかく見てさ
ら八文宣てゆかしのふ於
をあらんと葉の因拙之
くらはんの形をもひさく
細 太君の羽かり
て 盃 葉をゐかうにらうけ
あら人とい志くて別さる
をとゆめてくら服の色
をとんあらうしまふゐあさ
さるよ秋さゐかくれさらふ
くひるさも思ひ志て見そ
にあしさ九康ひらさるさ
と太君のらくさまかて
三 葉の涙ゐさうくおん
しも志くそてひみれか
つるを太君の振海しさ
まへて
のくくしを 紐 葉はて
あまりまりひかふも苦
とこ 三 葉のらく思へ八人
まかん事も为理でとも周

おくそとのづうしらんゆらひし絡あかうよ
きとうんと思ひくろ。こちらるさとやくたなり（細 葉の心のくらゐかさ海く）
をとんぐりしくてよ海ようくらしらんゆのく
絡かりはんのかどを思ふうしておや。しれ（細 太君の組）
まぐくさてしなれはよかと。ゆくも志う神の（細 絶念）
いろかじ。こゑあくしそしゑ絡こゝろあさくまよと
づつくのいふかひなすさも思志くうてん。
さ海ぐくうずくさむかさるくとこうしてそて（太君の男きことも君こと服の客を公史邦よ見服かうれかうを俺まかとて）
なおよぶりるすくやつれますつるすとぞめ乃
伊かげといとうしるすくらひしと思ます
ひのくりいとううしをゆがさかくやうこそ（ゆしき）
りしらうしさるよゆのしきとんうさあし。神

紐のいかとのさうけ
三 見よすり葉のこぞ
ありし
ゆらんしまれやかこころさ
しの志うしよてさはらりの
いさとくへく 細 服の結
とうしりくるすぐの絡べき
まやあくしもじそえ
まらいかまれさら 盃 志う 紙すれは
服の色の涙擦りをあり
おしさますし葉の紐
こいてそく八海ゐまるうえ
中りくまうはりもさこまえへん
ゐうくしのいふかひなさを
思ひ志くらてますし太君
の乃かふ形を葉のあまり
あかは弁へらくやまへ
ことましうらんりなる
うし おか 稽姫出まれのね
ゆかし肉かりおりくの思乃
さ母と葉の乃かふをきう
のわをゐまこめるうく今
まて宜かしらさ母を見て
あひかうゆよしみがもそし

のゑよのさうげさせ絡へしとともとうり（紐のうことさまえ刻んしのふん浅さしく）
すれど。うくらはんじすれぬうらころざ
しのまうしよいさばかりのいとをそくべく。
いあらじめうろうしとゆきそてやえ地がさうえ
さゐかくはかれりよさきまん。なよきすんとそ（盃 稽姫もて太君の涙笛さるよ系捉いつろと母紋て思ひそのまう之）
のもおく書こうしあり明の月かけ
よりうじめて。ありくの思ふの出び
ずく妙刻さ海をいて地伊く心ゆえ絡（細 太君の心え）
まるり仍しもをあかりけりれとうく酒（葉の心をもちひかて）
しうらりぬゞくすずうつれすくまめざ
ち絡けられと。ゆえ絡こし地伊かり。は
さつうたゐえうくさ兵様を絃のはうこりよ

こゝろのいとをたらりく
細 いとく八歳く先まあら
主 師 仏前なれたる
志たゝのしるやうま
くるやくよし云るせう
白きく

うつせみも 姜一周忌あたりて八宮大君
のことやりくれども
のくて姜のなひすつ

さしへだてたりそめ。よそひかし給へり。
名青 家
こゝろのいとかうぢしく白ひて忘
こゝろのいとまるやうまうれまつりけ給ふ。
細 姜の仏まんぢしなきとせり
人まうかれまほけぬを忘れて給
つるれんみなくまづうつしくあそめ乃
かんもらいくれおそろしまあやしきするとも
今さうしもまりふかいかれうかや
よおはくあう。あきめしまよふべそれ
ばうしなびてなりしん籍まこの作てらま
とさうかくとしまいしてく給るんるとく
きあくのどうまとなりし給。秋の夜乃け
をひいうらね。両てるよ。なのづく表ふ
かりうよせしゝて家の嵐をもかうさこの

ゆきてまうかうつるくて
姜大君まおつかんて蜆姜
と二人のまかせてうるを
うしと思へりけるく
師 前ま内まへたちま
るどのあひをきつれど
うしもうそてうされあえ
ざうんとなべうあれど
いとしそまりかくてくを
うしあそてさんこるわ
かうて法の法好くさの
人もまうしかろし人を
のうくかつひびてまる
入かくさかく
こいやの故まひつて由あるくか
きし出のま 三條う多く
てうら兩まあるしあつ
やの物乃まうもかべしと
心霧をるやし形あく
もうくかと会すれかく
あの姜まうきれ 細へ宮 急風

とふやそげよのそこくまつてふつねちうさ
まの法物後よ。げさうしいつくさあへるさ逸。
ゆくこそらつあかくめやもしいくてこゑら
星つかんでいうするりせうとかしなゑら
細 八宮へおた大君の事
てこゑつりぬ。こやの給しさ陶るもくれ
がしむうまげよるりく。八心の侍うようく
わなまし死てもとくさくくさけうまこそ
くしくすのくこうるすうそ。我のとゝまな
閑を
がれそよら。ちゑ給くうすく明ぐくるあり
まそら。法ともゝのんでゆきそて。こゝへでつせ。
姜のうく彈俗の由と哭き
るとくものいそゆり。よをも。ゞびのやどりの
そうつそかも忘きさうえ
あつやくるど。人の語うとゆかりしやられて。

吹断秋心緒瀧水流涙夜涙行 江相公 師 宇治の山里乃絵ふかくし
るとものゝ思ひ出り 細 征馬連嘶行人出 白氏文集

たゞしう思ひやられてひとりごしつゝ守城ぞうつ
じとおもしあはれて空のあはれなるを
孟 大君も兼ねて よろしくおもひよる絵女にもよそしぬかり出給
つるよ。ゆきとまるきれのらうさまれば堺
のつまどやうしくひっそしりそめりうて
まいさえんなるさ御うつらだにとよまよへ
すくてとくるやうよ月ども花とども出る
にかよりてあそびもうするさ世の末路を
きこてあつきてるん思ぐさ御りしこと
すうりきさ御しててうつひろてあへ
細 大君の心も孟 大君の心もよけあるて
やうくゆそらしさとるすべうそしかうにし
細 大君の御孟方

うは直面よハるすてことし
つしるみうして猶へるそてるじゃかしハかうにし
よんのくどそていさうはあるまじくうんとし
いへん給。おりくなりのゆきぞむしる者の立さ
夜の明くるを待ちをかり
まかの雁風らうとさる。夜ぞるぞわしさ
の様乃書うそうよひそくハまざよ守
細 明果てハあたなく
ぐさらぬ人いとおりおうえ例しだよ
細 夢の例之
めでしう。こともありがたよ網露もえ兮
あさ 石 うけ
給まじ。又人へいゝとしそうの空泣べき。例
実事あらしとハ女も人ハ知らぬとて
れい
のやうよなさなまりてうさせまても。只
やうあくさもるなれど 文学の
世よふびうひそうてしめくいまより娘こと
とも忘れとし
孟 実ハ知るとも知らずまでも
うぐやうよ志れさせまてよ。世ハよろしうめ
助字之
さきんハあくしと如かとやぞうりあるなら

とあつりおきの網露も
細 かうの例之 孟ことあり
かくハ表裏の分れなる
じ書の皆は網のやうよハ定
めやうしとし 師 大君の
うれすさとうこうとを
ちるし

あるに らうろんのかくる
くあるうらうすう 我実注

なからんの程をこそ哀とおぼしなくねこそ
うひなされとて、出給ひしの雲ゐのみかし。
（細 大弐の心也）あさましうこそいはんかたなくて、いまさら（細 大弐の御詞）
程へられたてこそ、いとゞ絶えぬまく
（孟 程ハ薫の心をおもひて）（孟今 細八中川大弐の…）にあかれんげさいかにまさりてたまはむとひ
まへりしそ、いとあはれにおぼしかれば、
（弄 薫の詞也）あやうしや、暁の別（細 中宮の心）やみのうしつねさ
とまてげにまさりひめいてをさとりけさ
ける人にははかりもいかにさよりあらん。
（細 薫の詞也）沢のまにまにとをしらず、京にうつしひきろ
山里のあはれをしるへく数うくまとり
ありわらひおきがけられ女房

（細 大弐の詞）あるの声も聞かぬ山とおもひしとよ
よろこひにはかねさまざまにこし
がちまくとうりなすてよくいうし
さくちうち出てかつまつれとまぞろうれ
どおぼうり思ひしそていとう〳〵かりはましべ、
月ころも今まくふのどうろすうまし（三 大弐の心也）や
あひかくうんことを猶さく覚て給、帰ぎぬ
ハ人のかりあつめんことのつゝましうてまうるな
ことうらかくれ侍にやくしよのりに人（父母うさ男の心也）
あすくて世をゐてて男の心さしをおうゝんど
なりくかうくねこしすかやうやとつさく

のかりくぞ哀しおぼし……今かりのうらハさされハ……
ひきれそこ……ハあのある……うちうかうんの……しこくね……
のかのかと思ひもうらん……今まりのうハ薫ま思て……
暁のうられや（細）……暁かきの別りには……
京おり……山里の……細 薫の詞……山里の……

明 後成恩寺 暁えりのの……
孟 大弐の事……三世の……河 花……
孟 大弐と薫のをうりて……弄 薫……
女房達

ひつくりつゞくひかる
みしえん
かゝりかゝるやうす
此女房年寄の媒して此
ひのおかる人の入るゝす
ともあらん世そりしとぞ
故実もさやうなる　八文字も
薫の姫君を迎へ給ふ
んおゝハゆかさんと云給
せられしを聞く大君
ハそうしてそひ給ふ事
ろりしれくて云ふして
んするれ給ハ　孟稚かるす
いかやうにまてきし果て
中君をさ人あるよす
うちとけ
人のうへはすして八
孟中君を薫へあるせ
て八我後ちを頼ませ
んとなり
此人のれさ海の　細　是も
さましたかくし

まことにひつくりひいつかはよろしかるべかりける
みのこしありぬべきさましてめりしと、ゆかりしめ
ぐくをゆは、此人のほけなびかる御心のぐくと（細 薫之）
おぼくハありまじく、故宮もさやうにおほ（八宮之）
ちうらぐ人あらんにおりくの御ゆかりをそ
めりしうさしかりしへるけしきてをぐ
しそん見れらりハさ海しきらもそうり
よありしげるおもふの君を人々すこ
くはおもしろくんしそられしかるめ。
人のよるしてハこゝろのいとらんかさ（孟大君の我身ハ頼からるゝにと）
里せうしろそてん、かりしのうへのもそ、
あしは又しもれりハこれ

ことハかくて色しまそく
薫のさ海の大かるこゝれ
私りしこよ我身ハ此あ
そ男んと大君のこと
おこの君乃ふつ給あく乃
ちるよふつ給
師おなる君とし方にて
おつる中君のさる之
おりしうるも
此そひかくせ　細　師君
のつまくと引るせむこと

はさ海乃、ふさわめなよろしきまするれ給
すらハかくこゝろれぬか年比の志し
よろしゆるふらとありぬべき給ふり
こしけみこくさ気色もあらい
ともらつくましきよ、わりしはかくてる
しもそくむと思ひつけく、給なるらから
ありおしたつるよ、宮給ひとるやまし
是ハおろの君乃みつるおくの方まこ（細 中君のこと）
ひかし給、例ならぞ人のさくめきし
気色をおやもしこの君ハ此わりし侍れ
まへるようておもしろれハかれしくそ
はそひかくせなり給よ、形もきされにかり

又姉君より引ぎせまへ
るとゝろく孟姉君より
中君のつまとのみさせ給
ふり醒覚

細 大君の名
あけまきとと
ありあゆまきの行し
ましきうしまひしとを
いかぐ中君の世話つきん
とゝし所 君の 薫のあけ
まきよ永き契をとよ
こほひしと大君さかれ
よぬきもめつとりるき
国のあぐくとりのしめ人ゑ
らひきひしとも実よ秘

里竜のまぎるべくもあらず。くゆり
うつらちされバ、殿おんかゝりてあ川っ
ひろんおめしさしれて、海ことおもう
とい(か)しかうて、ねぬるやうふらく物を
の絡ちらぞ。まらうとハ弁の如りしくび
いづくまでかく海っまうてひとさきれせう
そこ。もくちう呼しとさて出あひぬ。
総角とふうれよとりあうしゝもんかそ
ひろびろのへずそても。對面しつゝをや
此君とぬれそらんとつうじうとろう
かれハらかあしとそてるやそくてし給川。
んかく用くのらりうすしりわりゆ給ぬぎし

うき對面もせしや中君の姉君の
のうつり 細 借るものうつりあのひろりの ゆそ中君あやしくのりひ
こうくゝ 朱一品 一品のうゝ 孟 甥とハ中らくてとひふへ借るものすそ

細 書よハ金まそ
ぞうとこれハ系よりく
おさまかへ 孟 つゐのや
うに金まそうゝる
納まハおらしいくまそ
ひそひしもうろ名世ふまく
花日
三 大君のこゝんの事
よ出りえゆく出まふ心へ
し
ゆつくるとくてくぬぎ捨
御周忌るその子細之流

あらしもらすきこし給ぞつまれ又つうまろ
人もあるきよ。かりめし北川るやさうれと
きこし世中の君へそるゞしくそてまて。らバ
るゞいえてそ出まり待しねと。ともそ次
えまんバらくうぬめうきぎれは。おさっますて
りろそともむそひあすうし給。中納言殿より
れかさおれぞ。げきうりいとあやまうくらん
とそんづてこそ申し給。さもこぐろうう。
きりくちう好らすしつへぐつふやさ中の也。
れぶめくあどもそてふぬぎ捨まへつよ討て

とをのおどろかるゝハらく
よしてさなくなり
うとみひよ　細　軽服よ
なかし盃いろのことなる
つまるなし抄除服の後ハ吉
服をきるべし但ふ喪て
くおもなしのちうあるへ
抔忘らく怪服と着
わるまゝのおかるし
中の志ハ月よいたしたり
まて　仲　冬阴よ秋より
八さ南くふらもさなり
そとあれでけふを
そう

さうき時へ色なしれなすらん物と色へるへざら
しもひろやく色よけぬ月日の猿とおほ
ともかいさうしう色ひのおかなう渉れうさうとし
三 大志中志のさ南え
なすき志川くさまつる治さ南どとしいとしふら
しげなり月しろくろうすくりまそう
れもさくさうをみびゆくいとう南めうし
うそなすのさをいげよいとさりそて
うれしくしげなる南ひまさりまうう治て
しるもとを南しつくろやきをそぞなり
盃中志と大志
のえ治之
治よよのまれ忠志なくうらしそ絶ん
かをぞ
ごとそれいひとそれどそおすみさ南よっ
なひて人へよるし治とんよさりともら
葉をさて号う

此君とゝ世ハ近ゆくりしてハやすましふしくぞ　前の葉志のわくとめてさハえ渉りひうとをを
まじろしく大君とを要て中志よくろうまじきむとゑうられどさえをわりとをもとえ
抄近らりてまうくるる人
おり此中志ハさもおる治
しどさとふりしく治ひ
まそうし
つくふふくてあひし　抄　一夜の
時大志の夜のやつきと見
おいぞされしとつくを治
ひしるえ
なる月とさ川らなくて
細八月よおかしさる之九
月と八志川ひろらなく
てしく　三　志ハを正月
中　八服之ぞうバ九月よおえ
せんと葉の忌へども猶葉
なれバ先おかせしく
らあくまうりして
らちそことなふと地をし
不労のよふし
ゆふきまそ　細　おる雪
治まそ服君のゆくみや

うまらりそてハとちらどやおらんとくこの
妙君なし中志とうつきうふへ
りうられうそて。い南ハゆるこを中つなか
なそれて
人まうく。なやんよりつきさそくさや
盃
葉の物のひやりく守治へまつりあへく
え治さの人へハつくさそくて治しかぢの衣
をおくしまおまへつらん。なすぐ月をし志川ら
抄
葉の大志へのおなそ一夜のやさまえ
なくて文おかうくきり。例のやうよをそくて
大君の忌名え
んとく文は世うそこおうよらおやまり
しくぞのくうくら此がさるれどとく。どう
かおイ
うまらしもさひて。対面し治つぞ。
葉の詞え
ちひの治かよろうろうされころうれ。
人をいうよち待らんと。れ文りそて此あ

まつて
今ぞそてめさとを侍し
孟 眼を路て紀八文乃
うちやまに歌さうて
えさこてぬ文よ志ち
作られたる業の根の係
て弁とめてうさ焼

三 めつるのすこよ
三 世とつり紀石の行義之

そつれなきんと
三 業をとらひさなら
人とめて
三 業君も見をかうと
三 人との業とえらび
さなしんに弁ひそでは
ちうするめどうらつく河
しきんてのたましいちひ

まつり。今つとてぬぐさとて侍し程の心
まどひよ。中く志づくに侍そるん。世の例
ぬともあり。根まじひとく例の人めしてまろ
川よの事みよ志らぬ心用そさのある
ぐさあよ八此君よのたしうちを世にしうち
人ざうれバ思ひよりするひぬひて心よのつ○
乃すとうさら川ちひさずら給ひん比と
めざくさうなべきことよいひあそをそさ
ざられなんとえれさうひあそせけ
見昭君そのたましひいづらうら見
給そる心ともりわさて人めしな
つけ給ひつよらりしけらいかかめなれ

むしりうつりもかりそ
やく 弄 きもあとふとう
らとうらこといなりとえ
所えてこむりし女房な
どの噂りそてなみでのる
いなりしとえ
せめてうらそふかくハ
細 つうく根ゝ面つく中
君をさし出とへさと
し 孟 秘うらりよ中君
とをし出とん秘より
とうりしへそでも業
のみよて八浅くりそてな
それなことを中君ハ秘
よりうさけとみとえ
あめつみとえそれてし
細 業中ゑよ逢そめ
給つゝうすつしもうすくさ
ここちみへしとえ
ここよ初ことい 細 業の
心より中文よりしへ
御出くさまうしとえ
あるよ女へのへぬとうけひ
くえしきのよろたるれ

心りやあらん。むりし物語かとぶふりそてや
いとおかりうくしもあめつうちもそくまゑ
じさ八人のふるこそあめれとむひよ
見まりひてをあてうさみつくいこれさ
え紙なしいそん。よとりぶ御すらんふく
ぶまそてもゑそめてハおさこそうふは
りそてきすまりじきころなかうとまし
て用のふとこそ袖てハちすぐさこなんこそ
まいそくハいうぞくうハふとさうつとそ給うら
とう人のおらん。用いよさんわくしぬとらう
けひく気色のうなりうハうしへハ人乃
やらんこともあへなうかさうくきよや

孟蕙の中表どうけひく
なし。よのうらにハうらえへハ
人のゆうりん布を折り
ニーかすやうえ　細蕙の
紙揃を出まし給ふを
孟ハ大君よろし志のあり
つるまひさ起つ給ふとう
つ給ひつ多くしるさ
名を出ひろふつるとく
けしきてる志をせ多も
すハ　細中表の折ゆうん布
と出給へとく　孟大君の
ふるま中表と蕙へとふ
ですと氣色とも中表
へろせドさぬハつとも
やえんと大君の秩序を
つミテ出ひアリて中表の
いとおしそれハ方よろ
うくらひすつて
こころおそくゐともとに出
とゐと　女の迷え
アマて独住みそこうに住
果んと出へハ此ありくゐ
やくの納　細　おうすやくの
納とく師　姉君の中ノ
君を見れとゆるうやう
よをいくとのこまかえ

ひく布とのえやハ　細中
君の綱大君でろうろう
くてましませしるれ
に古家の乃給をきゝ
母りハとうり
えろくしくもあくぬ身の
うらゆきさハ　孟大君よ
里秩をとそおさるく

うどつくき給ふうんと出ありしかまふハ多がを。
なしさぶさまおつて世給つどハつきりやらん
んと身をつくそていとおしきれハ、ゆるがり
まうらうくうひて。昔のなれそともむけを（細大君中表へ下給ろ之箋　八文の宅）
世中をうくうろ何そうてるしもの（ひく布を出折うて）
とき中く人へまうへまうくしきん
つまみすとの給をさうしと出ちんとろまる（妙姫君迷い女のはゆひの妨らをしやうく）
のはおぐしふろくをとちひのはんとえど
まうしつとさまつてどうりからんと、いまつて
てさどうりの給しひとくしとするこうず
へどしと出ほれど、なおうくるどとこうん
あろうねと。けんてのおやあうくいごとくさ（女房をきのく）
物にみてむゆるこそ、いとわんゐそれ、ぼくす
さのくやうのりれとよぐしゅうんとまゐ
けくうし月日よそへてを、ほうしとを乃こ（中の）
まそおくしうごころぐるしうられし
き物よ出ゆゑゆうと、義づるよのつるり（孟中表とさして）
りくかすのそがう身のゐ係を、れも（蕙るがるよ夕せそくく山里に処ころろ）
どしもおすぐさむだうりこうすうりたまさ（身も並がでくませぐやうく）
ゆやとこうしのえ、ハいうよ物得すまうと（細中表のいうく）
ふうくそひと布をのこやハさそしままそ（孟うら中表の姻く）
てもへと浅こそ給けんちうくしく
をわうぬ身れうさろゆきさハうでそひろ
やうよこそ物得されさあうしろ、ふ得そ

侍れハ殺うしろめく死数もそひさうやうにハその佗せとられしと中君の御心
人月そとさ御すくさあなにハ
うち見まうりすきうや
とのまひし若つゝかう
よあひそられもと給夕
又多れ甘ろわりのあく
さあハ佗とせうし忠君
そらく

御ひらられ侍らそやと
つかさしまふ川 中君乃
こと月よ大君のいそん
ときみられも人ゝの薫
よ聞ひぬをひうとさう
あすよおまりに又へ御へ
うう事く忠ひとくれく
つひしる中そや忠あく
やそらすよへおしすと
なり実ハ大君の弁をきと
中君へうひとゝめまへと中
君の御りよ席してひ
さしまうく

おほ大君の給ひけ身のまゝ海も此りくしく應むも
きゝなすぐさあみはかう給夕よゝ甘まうよ
思しいらすらくさみうしやう海うしめしく
忠まゝれハけふとつとおしらてすとこ
れうれうそひかく忠さ抱よいひ忠ゞ
か見る子よ付て忠さゞれ侍ぞやとといひ
さし給つゝられもりよまうらとはらう給
いぞ姫君いとむつましと此月さて弁のきて
ほせうそこゝともぬあしつさへしうしき給
とこしよろうりしをつふくとさこて由
進てつくへもし給をすうらすげさく
いうよりそしるすきてへきさ身よらハひと御た

孟大君のうへ中君の御ゆくへみむすとと
細大君の趣
孟薫と
大
弁
薫の
細弁薫をとゝゐて
大君の詞也
細又そしも御るてと
大君の心也

男とん
細いるまもの佗ひとくあさ
れもとうさ物と男を心を
をせぬ世たうそう仲
よまう世釈迦よまうを
て紙男を祇るうよま
うちてひいさとひあさせ
あよよまりても御れもよ
つる人のあつ和ひとふ
よ聞く紙忠まざのと
かと人らへ甘ら忠もを
いふ御まきれく給てす
とうし
ろをするてあろうて出る
ろすを 孟 忠く弁まう
あろへくハ薫と縁よ
すしやさりやしとと
人めうもろぬらどもまて
物けハ人とて世ろを一説よ
忠ひそうる儀さしま給
うら深を人のいるまよ
つきんとも此わもんのな
ささ

うせまり人ハよもかくもさくへさくへ
あやそられまりてむくとといふまうさ
よつけて男をらよともぬよまれハさら
いのこときてこそハ人まうへるうとうさを
をくもてるれわうきうの人ハ弁つりう
さうしげよをのゞそくハとうてらうきや
まくよつうしげるうこゝ夜此し忠う
それどはそうしくさこことうハ人めし
うらぬらどもふらくすて一うきよりより
こそとゝことこのへハひさうこうしつ忠う
きうてあへるをいとうろうくうとは
うそどうせられ給をへ此ものゞうろよ

例
弁云と北の女房をとさ
まの道云のやうなよ奥ゆへきてよあうねで
孟ゝ近くよりてみさひきえるよよ
深切よすしむそ
孟不薯勸之

閨のなか乃浮そ　細　脈をぬ
ころくつゆの浮そとこそ
まくらんとゝし　孟姜の對
為には在嫁この浮衣をこそ
浮出あれと無るまじ年く

山すしの花　細　世中とう
しとひくもいづくに
かおそとばつくさん山ほし
の花　孟　我身をうくきん
きゆくのなきしと大恋の
らく

すまごとゝゝひゆめし路子よの恋
（縁の道のゆゑ）
そりらもぢらみはいまもとゝしゐりし（大恋ちり払とゝ）
母ほとりみりくすまともこそく入路たる
（大恋の世んりとりく出路てゝ）
ばおやそうもありりうみなしこかく
ざ海よむきそておりもて倒の色れ浮ぞと（其）
もなりくへしるみどこそのりしゆめしつく
（大恋のらく）
られさうころもさへうめうにあ姿とおき
（恋よおり世ん母子とゝ）
ありくげよ何のさゝらこ雨りハあらん
（無恙人のさうりなりつきさ年るみどさこ人恋まらをわ）
ほどもなくてうら浮ねのりひなるこ
（たまれてゝ）（孟は但君の奥か又りれハのゞれんやうなき）
山すしの花ぞのれんさるりりろ、ま
（恋之）
らうとハりくげをうよられうれみを
（氣従しおりゆよのらく）（し）
くらりれきせざて恋のびやうよい則あ
（大恋よ急そおしハりのゆのおとゝは）

そかりん、ゝくまもるく、りそてすして
（みかりうこくしくし）
とおそめ路りゝとるすれバ浮そろゆ
（大恋の月心なり浮とゝ）
ゐすし路をこえいつもくうくてもぐさ
んと母おりのまふとこのおいぐへのをろが
（一年之）
おくりゝとひてげをうよさくめさるみど
もさはいへどみつくらぬそあや花ひが
（花）
めうみや、いとおしくぞこゆら、ひめ恋始が
（大恋之）
しりかぢゝひて年が気れうよのまふど
（大恋の年子よの夕方向之）
しこ此を人よくぬれうろ、せとのこゝろ
路まうりしとこくてときつまとかりて
はまろいよのこゝりるすくゝのこゝろてゝく
あやにきまでうらとけよなる縁かひし
（まひの子よぬ）

さハくと　細　さハくとくは
年光くる人ハ年曲の
あうつきよささまなりて
おきくなひくわらゝし
らひたりとして孟日
所無うるすを夢子浮くし
まへよハ恋りさへ合は
て姫君のうしろこまし
あかよしこ曲さ良のそと
らよゆうき雨るきうや
老のひゆきまや姫君の源
きんつるひよハさむひて浮
さめりとおしげよこゐる迄
年比も人よく奴浮のよせ
葉八代の恋さ人よ仙そ
深切なるゝを八文の在世

みものゝひを叶へまさき
今も詠歎く思ひ
しらてく

くろきするなもさくこの注
ゆへなり　此宇治の山居も
大君ハなからへられど中
君のく埋れてさうりを
あられぬのありさまの哀なる
ところを中納言を示せてく
大君の志なりとく
身をはけゝろんの中ハ
兄弟なれハさらざる身と
ひと所のやうにおもふの
くらハさる中君よへ
ゆつりて薫の心さしを
ことゆつりて見捨ずん
ことなりとひとつ物よそ
小中君を薫の思ひまそ
八被なる色中君よこれ
ゆつりてともに薫乃
心さしを兄んなりて深く
思ふもへしめなく

又まうことさ海よいとうく
しらそお思ひの又は根ふ
くけ道ハ中君をそれへ
引合せまいらせて薫の
つらきんとし

えしもく世よまうさ
き事とともいへさつひ給
父母の心をつくして性慧
生の御縁をもらくらひ
まふるもやうけ句安

文の心おりてとし
よさしふさ海たちはくらさらんのまはしつかて。大君ハかくしつま物の
根給めうこそなりゐるれ。ひとり人へめづき
たとさひ給さら身なるのおまへんとてこ
てわらゆ同しさ身なりべくなれこと
ともるすようハりてもちれても思いまし。
されど昔より思ひられそめさらんよ
ていとくろしさ。とこの哀乃さうりを給ん　中君わく
んも口おしげよおなるをとくて此
れゆりのよ所をくのこともつゆをとまるよ
むりしとゆりひさてこ給ふろざしすべ
三 中君と大君と同する御あはせとく
ゆるすこともよ思ふすのえりし。後かなる
のりらそこまれゆづりてともすらんくち
るんもえべきさ紙やうよあうしげよゆ
細 薫ハ此井むこそやんしとも

えなきれうしもちかひとらうせしし。あげ
細 弁の君之
さ海をの給つくられバいとましと見んなり。
細 弁の君の相師内くまうに大君の思ふ気色を薫よ申せし也
さのこともハさらくも比気色ともな
細 薫ハかくうに
まいバいとくさらしさもれど。さは気色
ひあらさむまじき。思ひ文の御根か
さすまうめれどさまくきさ海よいて
細 弁の相師薫の御たちひもありくさ御事とも
ようさうこそてしんとるかくらさして給
ふそれをもひふやうなれことどもるり。
細 父母御存之
か心所すつかりまして。こそれ
よいしさは　ろ河らてこしづき安
えさせ給ひんよハ心もりく世よあつか
さきれうしとさとさしつどひ給ハざる

蓋ありしの詞はすのやうに
きりつくめくことゝす
たとえあらましさとく

其故
されバあるべき人の
孟の詞遺ても似合ら
人れらなどして文然
君じえあさの書あるべきよ
あり給ひてハとの詞ハま
しめあらしとし
此よのくさやうなきん人
孟八篇も蓋のまつり
あやしとわりせられさ

まうしく（細かうしけるきこゆるかたれどもとど）されども、うくいもしろきことなげ
（参御なり）なりなれ君さ海あせるきものなかりき
てさせ給ひんとうちあつめてくるすしう
のこみまたると、孟の詞ゆうろえありしき
けれどもいかにしくめでしきほとくせど
をよそそおりしましくれとるんかいく
物りひきて、ゆり、孟文の詞遺ご、まづいい
と物がしめきそこはこしりるれどそ
れハあるべきひとの物は、きせど、これかど
うしぬこしやおりしきさんと笑して
い海志の男しさせ給めりしまで此
（飛鳥寺の）

ことばよつくり出
孟子曰ク中君蓋子大君
を合せまつりせんとするハ
後よつくり出でくらん
やうなるべきとし
さりとて雲居をやハ
孟子やうよ伝ても雲

ひとところとうちやせくらむしきゆかり
ていりようれしうくましと、おりくの給
ひきし物と、母どくようけてある人よ
とくれ給ひたる人ハさちきもくろうも
心のあかよあたまじきさ海よきぬる
きびひとよしそ、お海く給めれとうれ
例のことるかれべきがことさりふ人も海
をまりしてうくずなることとちうしき
くり出まわりげる人の詞ある給よくるご
からありしさげよきて給ゐせある
らよめてそるれさをめでて、物がたし
やうよ、（大君の）ところなりひの母いふさとげ

霞隔さるゝ須磨姫も
かゝるとや弁阿闍梨わざむ
くもそ雲井のるね
抱かれとゝ以から君まそ
行の事をとけまふ
とそ雲霞をかゝてう絶
世の和みもやえとひの
うつる流く

うちめぐり
三 弁とゞめてまち
ひきなるぜんなるみ絶

あつかよおかしきけそ上
よひきてせなまり
孟あくつ和の字之 師説
末衣と中君よ大君のきせ
かえり薫の思ひつり給
てゝ中君よゆゝらん乃
からくるらんし

とそ雲霞とやいはずじまへてことわりく
よつぐれバいとよろしくかづきなく抱母 大君の心之
しそびれかしまつり中の君をあいなく 抱 大君のこ面をかねて中君の心之
いとかしきれ気色なりてまきり給く
まろたよ例のやうに姫母とのごまりぬ。
うちとめくいふりそなさんと思給
へど、ことさらめきそそうしこまり。うく
ろへまべきりのくく海さまにあずき流きて
まゐるすれバなすくらよおゝかしきれそ上凡 細 八月なれば也
ひきうせなりまて、ちきげなびあつき 姉妹因果よねあひて宇治の事そそく
箱なれバさそらしまろびのきそふしたのへ
つし、弁ハのあひつくさ海とおもらくとよ

いとく我らようよひて
孟 薫の我も出家の心さ
しあれハ今さらに大君の
ありしも我よ似合
ふらとし 三 大君の世を
いとふのおもきを薫も
道心ある人よそ深義
とも思てつきなき
とかくも出かくし

っかいなればいとうしきゝ我思さるゝ 薫の心へ
れ給しんひまりこらまつりしわくり
かく一よあきさ抱よおもりまゐるうやと
思すまゝいとく我らよりよひて姫母ゆれバ 抱 薫の詞之
さうしぶらふくても思てぞさしばりの
ごしなすでかもどいわつきしさしこそ
姫がしなるよそそいかなわと定ぎらんら
姫母とのごまりらんおもりよ思のびく
さぶくれとのすくハん思くへらひ、大川め 弁を用ふさるそ之
なじん思れかどもハ思ひりかふ霄おとし
しもづら姫どよ風の音おもくゞよう
ちかくよぞくなきさ海かうしとゝ

わりなくおもへども
抄 別れがたくはいねかへる
ーーされぬ也

なましひにしくらしとまぎらはしとよるまくへの
思ひ給へ侍るなりけり。えさらずつけ給へ（兼りんそ）
しとやく。やとしなりびくさつ。ゆかしき（抄 葉と兼りと）
じ（孟大と中とも）所によりしのこりなとぞうきこゆめ
うしとおもへとつねのこゝろすればわかく
まとゝ（人とおもへるも）いかでこゝろえん。涙（葉の人と中とをえ知れる）けるをひとつと
いとくしうこそとずりまへつらん
とぞまうよ。うらやましきうきこゝろ（大君也）侮え
ねべからでゆめまで。やとせう哀きものあ。
いとおそくひらくれ給ぬるかよ。何ごころ（細 中君也）
りなく給ひけりまつると。いとくおし（抄 大君の心中君のあるをおぼしやりて）

めりきにしとそれ
細 大君の心也 中君と大君
贈別ありし時さへつゝ
しきゝとはえひまし
とく

はかなうすさびじもつかれて
こゝもよくれなるやとゞめりへどもきこえ
させられば まうすくくいとまへ（見えの）
月のかゝるおほよ。はらゝすずろしてうとき（葉の事也）
れなれよ。木帳のうちさびしとひきあげ
くゐめらうと（大君の心也）いかうひとつおしくいるき
見え（中君の心とも）給へんとものひてかんしかおやちさう
べのつかよ。屛風とたちうちゐられ。む
つかしげなるよぬのひぬ。おくまゐにつと（大君の心）
おくじゅよ。つゝしとおもてまつるとまたそ
いかよめづらかにかがしくともへとなと
わぐらしきまよ色。まへてからくしさ
うちをみてて。藤（かう）とふるおとりものかな

今はとて　細 古宮の御事
く古宮の御いましめに世を
らもりしとと思給へるよ
うく思ふ給へ　孟 八宮の
山への御ゆひし事の事
と姫君のなく
ひとりかし　ある　細 大君
の御心にまかせ奉るとも
めさせしく
心ざしけりけやとうれしく
我人々の思ひて姫君
をひとりねさせんかな
しやと思ふなりし

しき給ひつゞけてまよはむとては山よ
のかり給し夕(ゆふ)の床あとゞもて今つゝ
らしてつゞしくゐしくるまで御わたし給ふ
中納言(薫のこと)殿ひそかにまうでつるをとこに
ゆるされて(中君を大君にあはせむとて兄付まつる)そ
やうくあかしとところ今そうし
うれしくらうけぢから気色(中君の)
いまくやと(中君のさゝめく)思ひあさましげになされ
まづひとつ給ひけるところをもてはづら(中君の世づかぬ給ひてえて薫のこと)
そらとこまれいとくあらくもあるらん(君の隠れなきをつくしゝ薫のこと)
あらくへしそゝられまくつゝうへの　孟六
めやすくおもふしわたされどいとよ(細 薫のこと 孟 中君へ)

しらつけよあさりくりと
色ならしさせまらし
師かもいれとてましう
しとく　こしひのすく中君よ
このひとつとへ給はくとも
て
うつらでかる君のくかまさ
くと給ひんぜれとこゝひ
この中君よゆづりまゝする
のひとつかぞなくとりと
のらゝしのまくまそしまぐ
しくちすへ
こなくさ給よあさん人ま仕
らんとし人のやうにやすと
もひさ給して　中君ま夫
君の兄すすれハ殊よ常
世のかれむしてとまひ乃
のうよみえ人もこし人
のやうにもふべきすうハ
とらとやりもひさ給て
とく思ひ給してしハ大君
のあるさのわさとさもひ
さ給もうへとく
さいのよくしきさ給よ

(細大君)その御とりえぬふさのれものしられど給御(と薫の思つく への志とふけをハロ外ちふこし)
いのかうんくちかしくそてこちつけに御
さりかりとを御はしなすこし世一かし(細 只今中君へ)
ハる紙をくぎそてつゐもあくをのれど(心をうらみどえ)
たじくまさ給よるすへんをへ侍りへこと
人のやうにかへやいと御はりひさ給しそて例
のかりしくれなうしきさ給よりかくへ八(弁ことく)
そおりし給川いかいへども八宮そしし川(孟 大君の薫に)
とぬりひく中の君ハいひ川とよりおかり(大君の乃がれて中君にゆづり)
まかしんあやしきわざくれとさどら(心をゆみとき心の)
あくりきりと色おりやうおもんあかどい(大君しきりと八宮と色を細かくしとの心と)
小夜ゝさ例のこと少なるに志とのかくこち

中君よいつも大かたはかくうきひきかへかうもあれハ例のくらことハ猶ものかなしうすかなるを
いとゞのかなしくてめぐくうらうかれは孟蓋の御命どこれハ猶もかなしう
しそのそくうれまかさしゝなかどいふ之三 蓋の君とるみゆそこそとく

あやうき袖を 知 世俗
の譲よ嫁もろこき時のぬ
れたし袖のたくとう（へるまえ）万葉
ガ二ノ八伊勢安麿嫁ニ大綱
云巨勢人女命あうか
こそしぬすよハらりかへら
袖をはくとらふうすぬ
樹ことよ 嗅女の嫁ど入
き時ふ追めれし悪魅
なとの鎮しく事とさ
せかうありとこと
孟大君の事をも人のいまた
弘因命枕云人の中さへ
袖とハあらくとらえある

しておぐくあくれはこの身ちきれけるこ
ちる絹をるしてはいとゆかく すれてハ空
まこん何かこれて世の人ハいふかう物そろ
何事そこれハうきと世俗よりふ謂ぞ
しき袖ぞつさくそまうりけしんとどん
うちすくまでおいとやうすけはりひろこそ
齒の遠ころ之句
女ありまさにあるまがくしおその物かうせ
又或老女の云謂く
ぬにそんさて人はとくをくくて物ひ出させ
絹めれだうわしとふをつきくちげは
好色風流なるもの似合しくも
もてなしくて絹人すてくおかしまもて
まりしなかくゝ物がすかりてはこて今もの
好色家とく

今とのかくしこと云まりもる
そとふ人ひとあへ 孟かとかひ
て連くに絹とて云ゝかい
きとけると人ふるも
ひとく云びきらとうくめう
師とひとそて絹そんと
ハさうよなとそしてとを
てかられていかのとまふ
らんとふるよ著へかる
謂く
あふ人のかしとめくぬ
細大君とはんいかさとかる
ねにえもるのとまるとそ
そら孟奥入うゞしとを
とひそてぬいりよ
つきあるよし人のうの秋の夜
ふれど師蓋の心く
のあゑ君なるがども中
君の方とんとまあまかり
そかうとなす明めらとそ
人やりくてぞありぬ
粉蓋のふまくるかそを
くてのいふまはあるゝ
か人をり君ぬと

ひとまかりかれ絹さんどいかのしく絹てんゞど
かくしひてとくらとけて物りふやうよ
ておしまさるんといふくねりてらび
きあいりさつるいくもろもありおもひ
としゝ古しをあかしぬ秋の夜まれど絹を
中君とも大君とも
すく明ぬかくらしそいつれとえくべくもふ
あかしぞ何めかしれはけ人ひとへ人やり
孟蓋の句之
すかそあかぬらしておもひ物僧ぞよ
細婦君の方へ紛蓋の中君といさかひての事かり
らかうくつくさん人の中さ海ことすなひ
三 その方といふかうし不及引歌
絹なよなかどのちを代数て出絹代数かう
おやとくて蓋のやうよ物僧ゆれどにお代つれ
なさく人の中はしきい海てさびとらそらん

かゝのまちひ　細　［illegible］よ
万にすゝ［illegible］しひく着［illegible］
どもむけも世中とう
うんかそうてきそうし
ち川ともそ恋く合う
いさうくしきみよ
なくどの［illegible］へ垂しとなる
ど［illegible］例おゝくしもう
やうのくゝのんがき合よ
てあうちうと出がりよう
まうすり盃おまかうゝう
ひたこおうとそ
人の中れきうくそ
花太夫の［illegible］のりの屏風よ
うれ仰うとをうくそて
しゝうんいてそうく　細　太夫

のうゝろよ．志のどあつく．御の出てかしこまる
是．弁まりて．いとおやそうく．中の三ハいつ
くよっおりしまそうんとうふと．いとうらづ
うしく．さうけぬれにくちうよ．いうすりうん
さるようしと．そひかしまつり．かゝの結
しこくと出がりしぞく．姫君をつれしと
そうそうし．結．明よけうひりのまつそうぞう
べのおうのさうりぐくとさひ出すそろ
うんこのいとうくおしさんれ．ば．うくそてあり
抱をいうれさ海をまずかりけゆうん
くりとあうられ．いまうらぬもらうゆ
うびもんべくくもあしぬ世よてそむろご

（傍注）三　中の三のうく／さのふ／太夫の志やうごとうらくまうて／菓子地／小太夫のうと／事して太夫のうく／細　太夫中志うし

舟しあうし　蟋蟀居壁．月令．蟋蟀居壁．暗．蛩無限愚．懸巣．塞．燕末．能帰　［illegible］
うまおきさんと出りかようやうすうら
うちゆうんひさへくもあしぬ　盃
太夫のうくし師女そうのかうゆ
らにはつゆくのことく

細　兄弟夫よ菓のうくうつうくしく
うや．うハ口あらしとく　盃嘗ら結ぶうてもうよすうさうよ　由
師　姫君のうく結ぶら中志をかゆうさげ

ゝゝうのつゝきハう結
のこり　三　菓子ゝとう
八連くく見列おうでを
のつゝく背さまうでしと志
ひしがき宮かもおろまず犯
とこまひ見定めくうとく
男もすけの人さ　奥入　為
う男をしとそとハしぎの
海よ男もすけつゝきうら
こゝそもれ　細　引寄よ垂及
さそてうく　細　花為右文
のかるすとうく兄も下
結ぶ但兄く只今太夫
の中君を携ゑくまひ

まつり．弁ハあなくさよ気りておさへ
しうりきうれにうろづよさ結ぶ　新しきこと
つていとおまりふうく．人よく
ことといとおしくも涌れおそう
このつくさ結ぶ結ぶうおうらし
まうげよさあすくさあつる結ぶと気さん
こゝまきげうしく．男もすげつくさん
もう．もそてうく　おしまさしとさ
うりうんさうぐうしさ結ぶ．さ申しゆうりて

（傍注）菓の方よて太夫の雑面志うらさと菓子よせ／今やそハまうゆうもとよのまう太夫のうく／細　菓の詞

かれまつふかく秘すとせし 孟 花鳥の説まろし 師 ゆゑもしとさき給ふは中君とよばれて心あ
君のうくれ給ふしく・姫君のつくさよ男とをそんと見れど中君はゞれそてぐく
かぜ大君の心をとむうくするれば色ゝよ心ざりしくて又ひとかとも猶うくと
をも大君のこゝめをやもらきりぞう
けくしくさ 細 いのうさ
よりしは兄弟なうらと
しらけくしくさ貌を
くも忍そうれさうとくし
師中君は年もまよあら
もそ大君はつれなきれはいろ
思ふも我心は思ひさうん
只うしくめしさうすのこゝろ
ぞまうさくて大君と根て
のこゝろ得く
うらくよわせれ給ふまし
くらん 師 うらくゆくとは
うるさとつくさとのうるえ
うきつくさゝつ忘ぐま
しさうて大君よりけて
そう細くも我よ志れ
さふまりしくとかいうそう
見まとの 孟 句く 細 葉よ
まいはなめられて姫君

そ文ひさしかりよ男とも見え給ひきつかず
かれぐ゛くもさすらいびりしくさゆくとを
こしじらさもつくしさもふきうぐくよ忘る
れ給ふじくらん文めるかなのうかりげなず
めし給めう我物すじくいはずうくとも思ふる
うぞまさよめ 給らんとこゝろえ
てつれいがこひしさもうまさもいぞて文
まりそへぐよえし苦しんともわらく
るんよりくおこりまりし男のくゆき人
めづよりし給ふかし見んじいまさし

給てよるそつの方にんのうし 師
やしうくゝ給え師く
つしけるくとは白文乃
姫文例て婦りもすく
大君くも宮しまよ給よ
同くは葉よりもうなく
白へとゆかもそうやくしく
おものうしあし花給よの
まへ細く
しきうるゝ 細 中君を
しそよ思給くいとくし
例しうゝ 細 中君は後朝
のみるうへしと大君よ
うこひさひまて

ゆりし桜を 師 此前は葉
のんは同し桜をとさと紅
よ分らる山姫よそ角
らぬきや深きさ又深れ
るきやうつさしと云べ
やくしく下の心は連桜乃
中よ中君とふて我よ

よるもいそぎ出給ひぬ
とをしくとさゝめきあへり。姫君をしいて
みつゝしそゞろ・とろうるこゝろこと
物し給ひとも・つれてながらしられ
べきものかなしきのさうしる我
よろしと思ひしゞ何ぐくも給よ此文
あり。例はいられしくもかはしく給もかへ
いあやし。秋のけしきもうつりけるにや
ときなれぐえいひとうく紅葉ふたる
もみぢえどもさそふあなたの山ひめを
それゞめでもさうちやさばかりくしく
つくづくとながむるこそ

ゆかりのふかいことに紙中も夫なふろう太夫へ除されたろう人へかうつゝぬう
我への除きこぞんの向うとしてもろくもおしのかれねハ姉君よ
流りしねんをえてはかしこさへかるへしおよもからつけよ流れりとりかけ
えなりしとふろ是も中君よふろろハ流されと太夫よ秘わくられんと
んかのはや　又一絃よ姉君の世ほりよのかれまつとうろって白ふよ流れもひ
くやのやうまいひろ絃すおよおりそうまて芸のしえとハ白ふと紙との中ろて
ハえかの流んそもやといろんとてまろそしそわりの山ひめよしまりいそれよ流れ
ハ流くきしとうやしし　字紙盃水仙細ふも公わりされと左方よかけてそろにハ師絃て施絃
ことをうとるすくりそうして
細太夫のふへ　師芸のきめを
根もやして何とるへし
て中君と出ひ絶えんよの
ふるやとふさつくとしふ
さつきそとまと切て帰
君るかし　ことりよて行人
まりんをとめそうろへし
ぎてまへと　細　好絹の文
まれえ中君の古まふなさ
ことうとく　盃　役絹の文
まれハ中君よ古すつとい
えんもえひとくさとくるよ
え古ふくとし太夫のふへ
山ひめの　字紙をそとよ中君

ぎそどとしつとまへなかどそことんうとらて
りそてすしてやとらんとらわりとそく絃
こと、ふきはぎそ。ことうしう絹しう流ろう
とえへばきてしまへてゆづつんをこうとそ
細太夫のふへ
絹がりてぎきそうよりさまよらて絹りひそぎ
れまよ
大夫
やまひ絶えのそむろところハ目かる文どもを
細　太夫とも　かうことと続

かりきあかへしとしひのづれすみふりや　細　かりかあ分しハ中君をあそりかつのつなる
からハ姉らるかへしされだ公方ハ太夫のふろハ中君をゆづりふきくふかりとへ盃かつ
ふよかやかきみらんとハ中君よゆづりされハかつるふることハよりらんとえ師　太夫
のあとのかりよハひひなまそ中君のよそての絶方かれハ此次の細かもしるな
しひよふさまへるとそり
ねえなんづなろまりしう
細　芸のふく太夫とぼつる
まうしくろかまりしきこと
師　あの花よこころもつき
もろづくにうられまま
じくなんとえひえまり
てんくれてなりんなも
ねつくなんなどの手ひつれとね
まうよ竹み男れる君とし
うけひらんねねよ太夫
盃　銭うけひらんよらびてうまへ
のとひらふひて中君を
くゆづりなまへ

りきまろがおうしくえしされだ。なら紙え
芸のふ
あんじも川まじく紙がわ。方ともて
細太夫ら文字よ中君を
ゆづりまへく
あじ。ゆづり絡そしさは。さびしくえししう
どうけひらねよえびてりすへしまへるなあ
中君よられなうらんもとく
まぞのうひもすくうくつれなうしんもいそれ
太夫なと
るじめの出かうへびさ　てやあらんと、く出ひ
しくなきけるさりのよ出ぞとられてびあく
細　家相より太夫はふやせてとし
つゐへなじもそわら。おいんの助とこらん　亜とその
拝んと出ひし世よりく太夫よりを除しも物くとと
かぐなくよりくよろころをそわかゆんでるよ

世中をいひ捨んの心にまかせ
うしとも　おか　世をいひ捨
ごとく奈すらまかづらふ
心をいへり

おうしあくり　細　婦君
時君をすぐこゝろすること
いひうしんでとし張話之
孟日師中君をさらによ
嫌せんの心をかへりそむ
つとし
さまゝしきいひめきこと返
奥入　琢江ら欄守し小舟
こゝとくらりめぐし人まや
いひまくらかん孟日師
人くをとく　師季前八一
人乃上ありとてく八同し
あくらの心よいへ
無心なきの此こと
細　薫の心よ中君をさし
白氏よめしつけて婦君
の随あむしくへ花
そくどくへしと無し

なをくらづりの世なるを。さもとてむのうろう
よこ河うしくもれいざりさりと。人のものく
いふしうしとおもしてよしするへきりもこと物乃
ましよおかすしあくらりよ人をもくこざめぐ
らんいとく人もらくへなすらふ。一上坂めきさ
さうへしかどしょうしいひあそし給
てまさまるの宮もおかしきろ給よ。無下つ
宮のれとごよまり給三条のさゝや位けよ
しなハ六条院すぞうかひゆへれがら
りくてハつねよまい給と。宮も地ちぐう
西足とし　おうれらうしなをゆきもてる
わかしれまんしきまるよ。ゆまへの前栽

六条院しそうろうの　薫と女三宮よ随ひて六条院よおかりせバ同院の内よ白氏の曹司
もありけれバ程ちかくて遠よまかるし　弄　白氏も内よも曹司あり。又二条院を黒之
又六条院内よもさもしありとそ白　細孟日
ちかくてハつねよ　おか　白氏ハ二条院よ里住をそおかしくさ六条院よもおかりき

ひつりとてく　細　薫の
擬し給よふかくさく
なきものはハ空めく願
ハうしまれでさとし　弄書日

りとのかりもりそぞつる君
眼前の中程家ぞよ君ゑ
まハあるへくうるぞのかりて
つる君まふるべし
るとうへよおぞものまりて
白の薫へ程上へおかりまへ
しものまねく此心やさき
ある

ひめよハ御もて。おかすしき花の姿をあけ草
のるびきざ南も。こよるるされてやまる
よをかく月の顔さへ見ようきさめるる
なこいせつるとさへく。地さおかしましらう。
風よつりそ吹くろ白ひのいとあくう
ちう所よ。めしそれと地ぞられて所多
とをすりぞられぬさ南よひきてくろひ
て出給。つとの所うもそまでつ君まへ
まへなら給へよるどりの給をぞかうらんよ
まりぬまて。世中の此處御心ちらし給。

ちひろやうのあれハ
琵中表と白表ふと白
へあふハわづか表よ流堂
せんとし
あらべきさ白なれど
御字流へおりもくさ敷
みじ井ろく葉の白表
へとまりて

しまうし 細白斉之要介
のみおもの極めでひろうき 葉の惆悵
外しえん所にそ葉の惆悵
も細中小も打ち表は
ろうハそくひろき卯之盃目
卯中もせぶり八人を添き
ぺでそく我地とのことをめ
なすくして
寄かうき 細 葉の後へくざ
しのかうさ人へすこしく
ハつる語まじきもく盃居ら
人ぞつろしハわんぬよ云
よろ人すそでハあひえ
じゃしく葉のまうくし
わざもし 盃一勝ましこここ
ゆゑく卯うくいひく白表
よねくまセよそどろうこ
あるゑしきり 細 秋の舟
よるまめきささろ無言
花あるりして花と
ひるここ
なるすとも 細 中表の何か
も丁稚をそうろうきさ
さとえしとく

細 字治のうへ
おまかりのゝしくとも。りのくつうでまハみおか
葉の媒の詠ならと白表の根ますめく
しぞくしろ川ようくこ語ともうすし
葉の人く大表をえうひ々ねらし
やう川くのくよざよりすひざきをそ
葉の人之 細 白表を中表よ定めんとの人之
さらくさとしおぞせるんとそひるからやうり
あれハ例よりハまあやうよあるくとさ白す
葉子地之
ぞより語おけぐれのみどもあやみくよろうり
きく
よそりて宅のけつひ白やくるるよ月ハ
きりよへぞそられて其の系くさとく
葉く
なすまめきさり。山里の家なるもの語お数語。
白表の如く
ゑこみびの語よるすしばとうそ語る
葉の熱同名のうすをとひ拗よ[illegible]
しうくしい語とます銭まつうつれハ
るまう一し
白 女うる旬さりう[illegible]代かきぐさつらを

葉
だうくや志め銭ハのらんとらひつれのゝ
三 大さのくさしまて[illegible]
きりかうきさ未しくの京れ女房所花人さそ
うきそろ人ぞくろ。るすべてやハるど。めくさ
白 細 葉のくく盃白表の外まえとし
おしやゆれハあるりしうのしとそてくハ
中表の[illegible]
そくろ立のね。年比うくのすへど。人の[illegible]
らんとうりしとく
語をいうるんとうそろめくく云しよ。
くさらるどもこ細とし語まじくぞそく
うるしんぞとをのちろをとうりもうやうを
やるどぞおやうくそうらうしとかまつと
盃中表を我ふと大表のちりて休と葉の人之
とはおしくはりのし語まづりめりとさへ
ぞうのひとおしくうらくよおさはりり
白ら文へ中表を媒せハ大表の[illegible]
語まへ語よるぶりやうるらんもあるまける

さりとてえせひかくくむまうす
細 葉のんそ婦志ふそのゝら
てえらしくし 孟 中将ヽど我よ
とおらハ大恙をそひ給よ
とのみなれハさるらうよハ
えせひおゝらむまし 細 說もえ
いうきの根をとも 細 中将
ともし白よ宜付ハ白のう
らくともあるし又中将よ
我つれなきとらよ根ともあ
るましくし 師 姫說と
白き扇のうくことをおりし
しく
例のうらかるすう 孟 花より
葉の白ハやさるて詞く 細 白
き扇の比公のうらく葉など
いへり
抄 やくこまたなりてく
細 行表ことのことをおやう
つもく葉の戸給え
さとやし 兩ろりやゝ
わうらんとし 抄 姉表ゝら
のんよ白き扇のんとさるやう

さやうなる者をぞさりとてさえくさえ志わく
さむなしく 抄 かゞゆれバすゞ川ゆづりゆへ
ていづくきの根ともかりしるなどしうよ志
うきよふるらうとも志り給くぞこそ 白の之
きばくとりなし給もかりしなれど例
のよろしうられんぶ国よ掴 白扇の末とけ
中将よ我も不せんるすん者しとし
んぐりうへくれなどおやりこよなりく
きうし給よしとおへうぶうろうよと国 細 白扇の細孟 字治へんの川とし
みつうらんおぼなかりつうるなどいとも
やうまの給へだのらうかどをおば 紐 葉の白し
やとうろるひきあへきにしハうるしむ
うん給えつうらりましくきさやづん

六六月のひんのまて
細 附正とらし云天正よま
いつ〻吾目し
一 しまらなり
三 字治へ白扇の葉の
とのびておそしなり
後引く

舟渡マヱなも 細 六字治
のさまし海のこるすさし舟
渡らまんきまあるざれ
ど白扇をばおさうる
おるハやどしがうしおそ
ほとりこるすこ〻す紙
家かどうねてやどしおさ
るし 抄 白き扇翻ないし
での附ハ舟わたりきまひ

よこそ給れやとそ おい 抄 字治への屋をうろさやうの まませへさうや
あどぶ海うるよ中へし志しを給共六日ひが
むのるそわくしさ日なりうれバ人志
まぐて心づうひしそいゆえしくとのび
おそなすらざさいのさよなどさうしめ
でへぶくる流ありさいとどしくせい
中のしまへぐいてよどうりしさ紙をらよ 葉の白き白の
抄 後物よ心さるすられやうし さらゞ翻を葉るさやうふうし
ありしらうしとなれバさりげなくと
りそあうなをようなすなん舟渡り 少字 うさ
あどくと承せそれバとらくもうされやうり
あどもうり給ぞどそのまくうりいとら
葉の御行ふの人の家るうへし
うきこきくうの人乃家よいと思ひて家 白

て久しき方の事どもの数し
自らの下に中納言し
きこしと。それもことく
しられて怖るゝ事
に薫の名の下にやど
しありあし義

細 大意
何事も言ひよ
を中君にゆづりてなや
ましとおぼす。孟 兄弟
の姫君達の薫の文かり
けると思ひしく言ひのふ
を中にも大君の心には薫
のさまのさひかも中君
へうちとひあひしすゝる
只さても心をかけすなんと
心やすく物おもとし
言ふことをさめり
細 薫の心を大君より
おまへに心とをうつまじ
きとおもひのへかまへく
中君はゆかしくより

とばかりしてぞまゐりたまへりぬ。(細 宰相ここと)
ぐやうぞまかるべき人をなだれど。殿ぬ(宰相の君の)
人たちもかくよそなくありけれども。下ろし(まの君とも / とのゐ人々)
ちいふをしとるなべし。例の中納言殿おさ(殿の人が薫を敬ひ申すとなり)
しまるとて。はじめつかうまつりしより
る海まつらしくきて。でうかの方
こんなかりつ垂てしづこと。ひめ君はれ
ばと。中君へおはしすとあやしうけ
まりとしとおぼしめしなからし始え。
めりしやるよある君をも捕りひきて
始をず。心をとれてあのしまふるやら(細 大意へ薫の中道)
やしなせりさこのこゆのしうらしひていらん

まそ薫をみちびき給
てるやし中君たうら
めしくおもひをも孟
ざりて薫にわかせ給
ふとて大君をうらむる
みかしらん 思東 大意ハ
薫とこそちら給べバ是
れよし。今さらに中君に
おもひうんも物しなれど
みづからハえやむまじけれど
中君へうちとびあまし
おりしさ海まハ 孟 薫の中
君のこゝろへおもひつらんと
ふくまのつゝまんひてこま
ことにハ何ごとを入そそ
まつらんとりまへ当也
いつらさみも物あしうふまそ
細 弁の細之 師 弁のなりや
薫の始ハ大君への志あり
しとこゝろひ中君へと乃
なりきを弁いつれてを
同しうすまことといひて
く薫の密事を大君よ
りきんとそあらしく

みへきうしよりしんてゝとんらうしうとうつや(細 中君)
とそれるかくぐらうきこゆきれよかりしま(まうり宰相の君への事之)
させさふて。弁めし出くつりしれこで(細 薫の何事 大君への事之)
一ことゝきこえさすべきことなん侍るとて
ゝそゝ何さ海とまりてしぬひてそゞ
しもれど。ひとゝやごりかくえやがまじ
う我。いまさばふりしてある海(もとより中君の方へおびさやせよのことのお之)
かはうちびきおひてんやるぞうしらう
くとこらひあへで。いづらさかとも物れど
しとよこそてとおもひて参りぬ。さなんと
きこゆれバ。されぞよおもひうつまなりと(細 大君の心之)
うれしくて。心ゆちおそよのつうさ給べき

あのゆりあつさ 細中表の
音入済へささなさらぬ方
と大表董より對面き瞭 曰 盃
今ひとえらひるんをおもう
董まよく對面しあひし
大表のひろへをいつきなよ
呂ひとくしさてさを含
るり行ぐをと董のこうし
いらこ歌より中表へうろう
あと呂体とするいあうじ
とそひとくしさてことう
とりふべきとまやと大表
のをそうつてかうよ
も對面しまひしみと
くみてつくでお秋もう
まし 三 いつくでのでさよ
濁らいへともらくしそう
わうのかどうりて中表
らんとの大表のふく

こちのはありぬ。ひさしれさうじをいと 細 董の白
らくさうて、對面おまりぬ、こうしらぢと
きすべきかぐまさひしさしぢうのゝ志う く地降て色ありていろんまあるのふく
んいおやるすきは、いさくゝあけさせら角へ。
いとりかをしんかの、こまんとゞうしてもつこ 漆子をとし 盃 大表の傾く
らくまし ぬべしとそあけ給ふ。今ぞ
うろひるんをよするうじをそいふべき
もや、ぎうよりへ側るしぬ對面あをあれ。 あくより董よ大表の對面しまかりもあれづく
人みていひてでららとふうさしるおどとひ
てゞろうりと出あつるよ、さうじのるあうう 細 漆子のそうく角く
済紐をとうんて、ひきうせていゝじうう、 董のく
れいじ、いうしそしもるとりうさうれるのあてゐ 細 大表のふく

きかいをしへつりまくに
三 白あ董のまくみをし
て中表のそうへいりあらく
弁のゑも笑ますでい董と
志ひてうりなきせらく
さきくしもろれよろう
細 白京のけふく盂董の
やさうよ思ひ入りるひしよみ
れてんさの石ひくしと白
の志ひあすく 晄
うちくだんも志くしさう
けらうくとされんも
白えの入かるのと董乃
そうりあへさと八内くを
ひと知さりなうとの恨

いれつうんとらやきゝむつうしなれど、ら
らへて出しくてんとゆかりてごと人と志ひ もうしろごむかうふく 晄 中表ぞもゆるのしる
ゆるき給ましさご給よりきめつらうし くと董よゆづりのかく 細 白文八表の
あつるこうろそへあるといと衰るう、さをかた
とへゆくしつりまくよ二歌のとぐらよりあ 段へのすくにくさあろく
て、扇とあすしらゑへバ弁もちりてこうら 白宗と八表つ凡董と志ひさうれく
びききうらさきくもあられよけり石のゑ 細 大表
あべかうしとゆかりつらり給めりども、姫
ざみいまり給をぞ、うらへいれてんと助が 白文の位のあ董まも志りのぞくさるく 中文のそうへし
しうかうしうもゆもかしくもでえして、 細 董のふく
ちらくよそろゝもあつくぎりけう 恨
垂 とうれんもつきさう扇あきさてらをべけ

むかしをこふる人の宛の
かれはさ[illegible]とて[illegible]
へ[illegible]つく　三　白文
のすとゐて[illegible]
せ[illegible]ぬを投ゐ恨み[illegible]
人[illegible]

かとおやり　玉
かぬらどのらく　細
くらしなり
こ[illegible]よめつらうちり
ちら[illegible]くらてのれも[illegible]
へおか人とさうてら[illegible]
くらとけ[illegible]
しおるづ[illegible]
とゐ[illegible]の恨みく
今はふかひするこをつ
ハ起もとく
お[illegible]
[illegible]

中へしるすさ
白文とか[illegible]
ことも白文の[illegible]中
[illegible]高世
ハせん[illegible]ね
くさくりつく　嘆
いと[illegible]
うみつぬ[illegible]
[illegible]白文を
はなくしなれハ[illegible]
と[illegible]
それぬ[illegible]玉
而ゐなれ[illegible]
[illegible]
つり[illegible]　細　高世んせん
方[illegible]
[illegible]
三　[illegible]
[illegible]

きば、こやの[illegible]ひつれハらん[illegible]
[illegible]も[illegible]
ぎれ[illegible]め[illegible]
ら[illegible]れなりぬらん中[illegible]よ[illegible]
[illegible]へ[illegible]今[illegible]
らぬしとのかもおやよんづさるうすらて
うちまろ[illegible]よめづら[illegible]けり[illegible]
の[illegible]とさてて[illegible]ひ[illegible]
もこしな[illegible]
づつよ[illegible]そ[illegible]
今は[illegible]ひすしと[illegible]

[illegible]
あんじ[illegible]
さる[illegible]
りのよ[illegible]れど[illegible]
[illegible]
ぬ身[illegible]
へちんよ[illegible]
こさめ[illegible]
くど[illegible]
いざ[illegible]
うむ[illegible]
[illegible]
[illegible]

此のうへまくせといふらん
うこへ 抄 富世あらくのうへ
なるしん何ともなく別なることに
あくね関のこ
実朝さゝとえくね隆
のあしくさハいて関のあ
よろうるうる 後撰 別

ゆゑやまてつくりなら
抄 かゝしく鶯はさせる
やうしとりて
くは若しりまつられてとる
いへうりなうとかは
叢のやう此末よそむきとよ
白文も何くらしいから
まあらんよりしくれ
かともあしさるしたる末
の叢とわがハめての後撰
ぞのゆうさま苑めぐく
もとえばものあすぐくれ
いまえつし此紙らどさる
かてや夜らんとくかう
くらしくまつ洞之
抄 叢のくものゝそへそ
とゝとくりいかうらす
て我らもまいてらう心
をあみすゞらいおがれんとのかせ
れらくよ恋ゆらふうするのそ
ひおうされハいきそ
大恋のうてにくらやをを
まんゆうしあへとのまよ
に若うる洞といふそう
ゆうしまいうもとおし
まる河佛世すよあさうよ
れにこう今さ大恋よりも
うへぞそられそくよ
うく中恋どもならうる
らあらしりうくあすよ恋
れとハのらく 抄 やうよ
さびくのあよかくあれか
るうちとまでうく讃く
しくてあれと叢のなさ

れどもらうらうしくおほかためて此のすさび
くまといふらん方ハめでたきぬなしくは
て、いろふかくもそひきらへほどゝもく綱
のこまりたうくらもてあそんとはいう
よりてすゑ給ぞしく叢のやくよあそばし
まうよのられ世のうへしよのいひなうんとあ
らば青物給なくまえことさくよ此てめさ
てつくりなさうりのくふひよくて八歳ねん
かめれどもあやしうまつるこるの御もの
いとまりそうしは大とそなり給ひるん
いとうくおもほつくおもうるうくなつく

らんばましものじゆりてゆゑゝしんかり
とうるまうきうしとやうやうしていとおや
ましき給らくやうらやまとまんゆうし給
いとつきづく徳も申へだ、さすがよ
かりぞハいとよくの給ふとこちら
くらうくく叢くてあがえハらう
あさがゆかしのさぞひるげきにはそ
まそてうくつしくたよう給れいひ
どふくゞしおしき抱よ恋りしうす
いまえてんうさすしいてぞ世よ給とくも
なん恋りしぬをそてさしべてぞそなす
きてうしさせひ、ひさうるよあうしらうも
細 叢のやく
抄 此ながら叢の事後
孟 叢の大恋よ對ての洞

まふ守り
ゆめくとるとして
おぼろにさとりうぞれさ
るよしいわたしくし　細
山鳥れんちしさく　山鳥ハ
ひとりくわたるえ　孟　只取
のふきるのかれをてりおのみ
がくしきをひとりもねる
ん花　あつるすハ山鳥
の目もあひどもあひらとく
こゝひあしつるの
らの所行　細　我ハ何め
さうあさかくあるゝと
よあらんぞ　例のと
いうり
いふさうさく　細　白文の詞
き内之　箋の一ハ清くて
あらく　孟　箋の非ええよ
けりひかそく　白文のをき
よ粉ひとれかるんへし　陽

さ世給ふとて。ゆかしきまうづれハ。ちらひ
つりて。さみすがらよいりとどろくて給ふ。ぬるよ。い
と義とおぼひて。ころらりのはげしひそう
ぐさめかねくおもし給ふ。ゆめくらし給ひて
てぶらもまがふろまゞ。いとくぐちうきるの
夢よめどさめて夜中のあらしよ山鳥の
うちしてあけしく給ひれいの所行け
そひよ漂の声ちかど山ふいざさるゝて
出まくきこ氣色をみまさうしらやまし
こいづるを給をとげよあやしきいさわら
箋　ちゝべし我やゝくりてまゝあへきちう
をゆりぬあけぐれの作らうあめ世よわり

うちよ　細　太系の前之中
系のうちとも　そひハ又わり
難きことも　竹くよと法
笠以抱とひく皆箋の心
まりのあまさごく　さぐり
の翁どもとさきりあって
く師人やりうちゐれハ
ゐうしのおりひと箋の志
そさゆんのうるとぞり
ひよこよおくへて
師箋の給く漂よの人
さそのおちしつらくいえ
とらくいりよこゝよるうと
ぞり
さるきつくらのぐくと給ゆ
こゝわどうのよんの
くく箋の根ぬしまわ
しゝよ白のかゝつとく

ちうぜし　細　箋のうく色ハ人のちうくときもろくしく
ぬぐれのたてまふくる方どいつり　師くをゆんとしそりへやうふもちきんこ丈え
たまれられりく　花　明られのうちよそられへゆしひゃうちうくのゆるまゝよく然常

きんやしのまへば
又　うさくよらくとくをちひやれへや
まうしぬるよまどくぐとほのうくの給
をいとあぬて　ちらされハいくよこてあるう
へぶつてそ給めれぞ。いとまうるうしそ
るどよろげよらしきつ。ほのぐくと給
り給よ人のこうり出給ふ。いとしやいく
よふつまひすしあへるよかひるとえん
やうれそてうげさうよハいひきくまさま
しまつり。わびんととえ。いとあやらくん
孟　箋しらいさもちうときんん　細　白のさきこ　細　白文のたへ

かの袖も見るさへいとし
お由良はれんじと泣れる
ト歎よくさここえうり
哀とみやつぶさん 細 君ゑまの
新手枕とかきさくそめらく
契とやへぶそんみくり
ちるしよ盃まさこハ生
とふん纏之枕とうりを
らく
しやうちる女車の
三 とのくの云かぬ見きな
らぬ納代車し 細 葉白云
とうろすぬ
ハ後ろのまいちろうとも
盃 葉の白へわと泊し
ちるんのどこうましさ
細 多多独強そぬし

さ酒くよ増りうまへ
中君のらく 盃大君の志
まぐとしいひて中君の眉
とも見合せまうやく

え゛くく増りひまどされどさうりとも
お葉のんと歎し
めしぶ酒あうにつきろあんやうしおく
白云く
さあさりくくき袖まといそご悔り給ふ
細白の泣らく 師来しかぬうらりて悔りられぶく
かの袖と悔りさはいともうけく思ひなされ
てんやをくもえめりうかざらんてものらぬ
ていしらしう後剣とやつぶそんと増ひ
なやさ給ふかりがざしへきはじめくる納の
細 六条院の扉く
かしまいつしつきぬらくよれ車うきて
あり給ふやらうろ女車のき酒しておう
三 葉と白とく縁ひありきの酒を見師
くみいり給よこれもいひまて゛とろう
ミやつく
三 葉のんし
ならぬ文泣のれうてうざしともんむ
おとし給あうへのおこうぬしき代ハいしねさ

かうろ姫君のみゑさく
くそうれんも増め給もずいいみいい別をしく
これお姉君者く
これ文をすろうへ山里よい縁をくらく
のくちろ志て酒をす。おもぶれさまうかざ
酒ぐよ増りしうまへかろ代文めふと出し
給ハざりけろまどこしとまうつくくお
ねぎ志をぞいうらてしあそめる一こゑはを
盃大君のらく
まくせぞ志つくぶらうしき酒をとも゛さは
ぐとはえあそうしめくく酒たえでこしとも
まよくくんぶうしくおうしく給ふく
もいうよ傍しつくうりかど泣らぬ見ことは
盃 きうしふへくへのらく
れど増母しふかれしうるべうりてきのり
細 姉君らく
人の増くもされバおや志うきわざうるよしとも

よのつねは　細 たちかへりき
なるをかくしハ言をさそふ
からぬしく
ありさまつけて見るかひし
八雲かしう　白文の御返ま
さをくの風流ハかり
まみえまひし時ハ見てける
ましを今中君へ道を言ひ
て後ハ末とげざるへき
かたじ抱をかしきまく
我さくしんくまく
細 きさく ハ大君のかたり
て世をすさ絶しさく
をとんぶろのかそすかみえ
かるのの見る歟　花 紫苑
色ハ表ハ薄色裏ハ萌黄
三 重なるハらしく此めて
かりてけ中へ入てかとらひて

あつりは。大君の中君のやうく ひとつもひさしくさてこせなかりた
まへど。中君のやうく さうらは抱きあかり給ひねいづこひ
さうく嫉ぬとれつひともびなり
孟 白文をぞく よのつねはよなひやもらん家かくこたの
さう京かりてきろうもかきられさしまつるすこ
つきるどの。こしさうてはえんろうく。をも、大君のやく へりこ
まつけくは給しハ。おかしうかたくしとう
あろめくう抱かとりしうて。我さうしんはよ
てきそくむもいてつてましてかハなめや
うはあるへきさやうとい。うしくをあてうく 孟中君へ後絶ありつて大君の身
大君そうせ分つく せさそまつ給ひ。あさせん家めのかそるか一り

細 此比の様くかみはしかりて
あつりまうかれんどえがき
ねハうしとをりてありて
中信ある縁く
つかせそともあるへは
三 是ハ是ひくるまねは
後若しかれバかやうにて
かせてあるくつまませ
て。衣色をのるく。今はせ
の後ハそれとよせ方捜え
人の所しりとちん人の為に
れかけ抱のるす。矢君の
あらぶうしと思ひあかく
その衣ものなのあるべし
三 薫をと白文の字治
へとそひまふく
まうく地わりて
そひとまてどさうりを
やまくへだく　細 薫をさ
わらてあせん　細 字治の
多くあてな給まろくし
御大君のんく中君を薫
へとうてみひしは白え

くひらりげはそうれハ川く まとてにころ
かたかへはるんとつくせ給ひ。ことく思ふこれ 發童毅
つひひみとあくぎて。是ハなまれまふらん
上事まそて　ゆうくへまうくとさうしけは人はなてしとこれも
細 縁をまへるく
さどと抱りくれだ。く人のさうしぐろうへお
白文ハ今真は言にさく
いぐ人のあわざるまうらと。抱てくるんそこ
細 文あすう衣く　孟 薫のるく
しめしけら。その衆をうのあるくさそへ海
まぜい 薫伺
へど。冷泉院はおすくせさみつる嫁ハさこと
お薫の世のるすふそゆぬさ母たちるハとうらうく
伺れつそとまうすみの。例のことよふかれ
白文のるく
すさ侮しけは娘りてすると しさ 抱が
きいらでをもん御いろうさうし事とそ
とろうまやくとこうしくりをそて流てつくひ

かまへ一ちくるとそてよそろ
そうかもちてえきるやうハ
よく

てるわれ　於中老ゑ盃
のてるひまなく
ここ川その
於紫あるもおかりくいう
これハ紅あるへし

かどうらわそぬもそこうしさ海あれしと。
さう旁よおりしくあすしてがうちそく
（白文の字結へおつ付しく）結そうぞそうくわろ中一こうら。いらしこ。とおハ
（細二つゐ）しまうこうれつゝも。うつ進しらこわざ。けまし
（皿中志く）ぞくいハおや志っさゞさうじとハ我ふもあ
ぬさ海ふくつくろ。れ甘らかのにこと流ぞ
（志と中志の根てあさすまく）（細ある〇志く）のつきくめうれバさうしびとをーうち　それさ
（細ある〇志の句）（中老のるうと大君のとふく）て。世中よひさしー　よもこし現くゆ〜わね
バ明菩のるゞめふとも。うで而くとのくさうん
（盃弁あるのるく）ふぐるしうと愛ゆる。よ洪人へでとるもうるへ
きさ海のくしくあそくみてきませいひさて
とさめれバ年へてくらうしとも　ゆはさうし

うくぞのてやハ九甘らん
とかりひるなんてもとあう
しうく
中君を蓋へてそひ服結
ひしらノのくるるへし
於芒ハうりうん中君をそや
とらひし　とく白玉のあす
ハそひうけぬるそえ
のれかくさゆるくうかう
そん　盃　帝世まそこそ
あてあてく大君の細く
志っくうしき海
細　君舟志っくぬうしや
さん　ぞくふうふくも盃
まへとく
みくしるおわしいうそ
細　帰あれて地やのるる
れだ罷こしてそうれと
ハいうり盃我てあねあれ
ハまやぐこるうれてよゆるよ
ふくあハ罷をぬきうんとえ

とく。とのしうりとも志うりしくへ（角てへ）
（ひとりく）ちくもあしぬらひとりいそそてうさぐ
のとやハことまりんとそひゐるやうまあう
しまうと。くでいまうくそひとあくぞをゆう（白玉うりハ）
（蓋のやうよハおもそ恥あふえ）（白文よあセやるる）しとうとじりよそゞれ地すふべくて流く
まそひうけ仰しさうしにられやげよん
ののかめのゞれゞくきさ〇穀あうり
（中志のんお志づまうのか附白玉のあれと）こそらきしられずうつ地げるゞそうあん
（とうをいさんとく）よ志くゞるうしさ海をとさうらしへふくし
（えん了）とみ地かしいうそつとりぞえあふと流ぐ
（三中志く）まあぞつくろひつてささってまへつだし。つへとあ
（中老のゑ弁く）結そる〇ど。さ一すくよりく地かしのまふかげるよ

おしかれとハ地から
お中君の心をきみのおし
かれとハ地かきじと紛綿
しきつく
そうしとをすくおもされ
細白女の心よ志あ結
つるとそう御此形を
ひもうけるを白女のお
ら世しに中君のおさ
れあひしさ滴きま白
女の心よるすべてあつ
むぞ地かせしよ此りてこ
よひもうしよのつる乃
さ白るゝ中君ハいよく
はんにはあそる〻
次志くとうしく
細君畢のゆく何ぞ君
のまん仰つ〻
紅すつ海をいふ
こしえ〻

うゑろめてくおしかれとをと地かりーさをてで
と人ようくよミぐろうしなことそひて〻わ（白女よ名つえ持つれすひあぜのとく）
つうかれなすらんかいつうじさ紙はらけよ忘ね
きうりきうらりうすく。おきされまくりしけん
ひざまろうへてるすうむぞおかうしうろしとまりぞ（お中君の引てろひまるろさ海く）
すらしよのつるよみかしひさへつるへはそちさ（白女のく）
しをはきろよさうへやさてくうんひさ滴ん（地とも见うちひまへ中しうれでく）
ざうん山道のゆうけさとむでゆいくきさ生そで
地がしてかわけようくりひくのめすべとど
おかれとなといいうよとを志ひ立さ清そすひ（細中君ハ何ともおひあくぬとく）
ちくきうしづく抱のひめ君とずらしよのつ

家よおうあき了由う人をを
るけ息　人よおうめう
ありく人ををひとなをく抱
ゆうくてあかし抱すれ此中
君そくさるうよ家よお
うあやしし人をそゐされ
山保さ飛そそくら
まうゆ人とをく抱上
くてようりつまく
地りめすゝく

ねのへげらくゆやせうしるじうひつ〻ん
のうゝぞ地すゐとをとこゑれさ滴へ君ん（大はさるえーしまく）
をのゆるけりしさとなのめするやわ
らん家よおりめさて由君ひとそるるけ（細 此宮信の文まこと）
まらく山かうさはあうろるれバ人よと
よく抱かうてぞるしひまつゝうらよ志ひ
うけぬる給のづまくもづりしくあ
よごとをよの人かく次おやまてゐるみう（中君のらうし早下志すう恋え）
びようんしとさろすさげいる人すそも（細中将之）
ぞひぞんをさすつてこまうかさらハ此君
めぞらくうくさうしどおうきのよ酒（盃中君）
ひをまきうきつる。三日よおく夕飯ハかう（盃みーとしむく）
ゐるすん来うとんつゞかさて由れハしさ（と白女との祝言まく）（女君のへく）

このとしごろや　細 前よ
ハこれハ此君志りしと云て
中君をおもひつゞけてよ
ハこのとしごろやとよむ云
て大君をおもひやる也

と衣ハさうやくのやと
孟 雜々の物百にも之着
の衣の類に衣ハつくへ[illegible]を 師[illegible]
よりの文の類に[illegible]
とハ此りん[illegible]に[illegible]
の[illegible]のえ[illegible]

かくいひやりたりければ
まゐらせ 三一衣のすとう
らくゝ[illegible]に[illegible]
[illegible]

ゆく人の此ぞの袖に
孟 ひとくの袖に出之古
代にハかやうに云し
師小袖衣などをこと
ゐるハ古代のかうめき[illegible]

ちよさうぐこいひのこゝよてそえと
此りて此前のもくきさせ給ひとこしぐく　孟 大君の名[illegible] 細 大君の事也
志ら川ハ此いふのに出てとこそ給ひも人
のゐるへとたぐひれて此りそくら
あつめて此にすら海ておもしけるり
このとしごろやのどうにかくさ此うし
人のもとめ衣をとらせけるとぞおり
なる中納言殿よりじん気のんとむのん　孟 着之　文の類之
しと文つくのらうも志すけるあ　細 第三の男之
なせよむすへうるてとえんと夜ハさう　同 雜役
やくりやとむしるへれどもある所れて
よるけよ侍ゞくりでらいゑやそう

らぐゞやもしられ侍らしこれのらよう
こよ此いつきさまでまうけの抱どもを　細 ちいさきとせざらん之　ここのれ此君よ衣大事ともせ
こまやかにめひるどもをせざらけゝなどく　あまつく
としまさるどもしてこそひ川あまさう　孟 衣裳をとられし櫃之
けでよられておいゞ人の許よ人ぞのれう　みえ重々よ入られりや
よとそしまうゞ文の此ぐさよきふうひろう　細 第三の男の此方よ在の云之
よ志さぐひていとゞ此ほくもえもらあつめ
給えざらりろうめやあらんでなうこらゐ　細 深くとわらしもせざらん之
あやるどもこしさ此はいれゝしてぞ此れらう
とおもひしさ二ゝぐらいとこそのことう　の事之　細 大君中宮之
さる代ひとくの此ぞの袖よこゞいのこと
るれど

すきずきしき事もさりけれど ...

さよ衣 細 花宴には中君(?)のすまひこゝもさだかならねど ... 盃 大君の御 ... かへりて ... 細 此段 ... 流 ... 盃引出物 ... 文段の ...

さよ衣きてなれきとはいはずともかご
とばかりはかけずしもあらじと文
えまつりたる(?) ... ゆかしげなきこれ
しもをかしういとこまやかにて紙の色
をいつくしうかゝれたるに御ふみども(?)
ひとつつゝみ(?)にてあけてみれば(?)おほくしく
をしへたまひけるにやとみ所も
まゐらせてさぶらふ(?)ともし
ましかばとまりけるにいかにおもふ
あやしかりけるに
あらぬ(?)ことをうちいでゝ ...
まうけのまゝに よみ(?)おぼしつゞけらるれば

盃 白き紙の ... 細 白き紙 ... 盃 母君の ...

三 葉は宮路のくにより ...

まゐりてそへまいらせ(?)給ふなるべし人
これとこそこゝろにくきことも思しけるを
こゝに中宮(?)をはじめ(?)ていと世中
よきにいそかるれなるやうにことにかしこ
いとあはれなることゞもおほく ...
しくてこゝろにいかなる ...
ありけることの ... よ
おほかたのことゞもいとらし
ともかくもきこえさせ ... ことさ
てうちまかせたるもなかりける
おりふしそのなまめかしう ...
との心まかせとおほせ(?)くらされ ...

もと。

細 薫の心
とくみえしけるを
よ白氏の物かしめてほし
のおもひどもちらんとそく
思ひろつらく 細 月比とえ
らく素因ありてもとらう
孟 此行因裏へ来りてはまた
よく私は退出ありてハまた
ろう人と薫の御心
いとん不 細 女房のさ
わらふ所巻盤ふとらす
く御らうその中宮の
仏 謙めと薫の心ならて
かうつへしとさめつらん
細 有心をうりて不忠
おもうへしとと 孟 かう
のるりと調ってそ勅るる
とうつのつきうや薫
の御かくおいる事ハ色も
まの心ふ事く

皇女宇治へおはせ給ふを無へ玉ふ物なし
ていとゝもくるしくかゝぬめつらしき。
うちつもこぼれてるんとおもしけしゝ物さ
しきりぬく物むかしをこゝすらんとおもか
薫心
しく。御こゝろへてうく事ゝろまつ物ことは
薫の詞也
さふらふ世給ふそしいとどこさうて給ふんい
とくろうぬことわやおほしめし
物 匂宮中宮の御心と薫の申給ふ
世給ちんとのいをん所のきこえくらけ給え
つまつれいへんきれをと物つらいしきこえあつく
のまへしよあいまうさうんさうやまたくらんと。
物 匂宮中宮より
月ののかうおもはへ給つると申しまそでいとま
細 自身の詞也
なよくてぞ物かしの給や物月くハ人のとらり
まさ八人の色ども日は思ひかへす
てうらんとし
かすくしまうへし。世とよくしらめ給ものとも
白氏の御男はさうしうるお氏の心のまへえ
かうくかり
白ゆう
かはかりなるはかなきつんとにかけても所ときた

おもくさし男の 細 御男の
かもしくしさをといひて
つゝひたまへ
物すりはさうれよてそ
三 りてさうくゝし物おもひ
はさハかれと八宮と宇治と
のまゝへ三日の夜なるに
おはせさらハ宇治よそりひ
歎きあるへし宇治へおはり
とら八中宮の御おはすへきを
物すり御さうかれとらへし
てこの山よ 山ふかき
つこの里よなるハあれとう
ちうりぞゆく事をおもひる。
御車なたちし所せさる人
多れと御なるみくもお
そうしまうむやめす給
らんとの心ぞいとく 物の事
えやさうり所すうくん
とハ但御なるそハ御ころ
ろうしきやうたへや給らん
とうで御詞也 細 宇治の
御すれをそうりるとぞそ
んよあくしいうく御の世のく

男のほどこそ。中々かゝるわざはしたりけれ
やどし給ひし男をいひあふとそ
それまてとるよいとそもしくさへおもひしけり。
細 薫の心也
いとあしうなすりまひろく。物すれさえんし
孟 御出ませてさきハおりゐる
まつよこそハ物うらもてるれ。こゝにひのつとま
れハ此男ようつかきんと薫の御詞也
はかなう御まもさせそし男ともいそつらまし
しわうるんし。こゝさの山よるハいそぎ給
へきいつりの さそこやさそうかならず
らんとゆかしまへいそつくれよくれて。かけは
白氏の心也
ろう取るれハ物かしうひく。おはるかく御給
ぬはとさとよい中くいうまふうじはらし
孟 薫のうさ
うそとそ。世あいふらふまさあひ出なん中

やしハ秋とつひ出しても文
秋とおそ経すれとかり
ころく業なる人のそる
ろすよ此歌あらとく
中文の作りさ　細 明ふなり
多くしハ多りなめく
あまりさくなうく
中文の多き道あるさ也く　孟 明ふの
しかせともとく　細 明ふ
中文ハすぐこともく也
しますとく

文のれとろよ気りあられバ文ハ出約無
なり。あさましくいとおしさ情なれ。
いろよ人ことすろしん。じんさうしめしていい
さあらくしぬぐひふひるることも堪がりしの縁
こそいろなきれとの結ひて。わもしさそろ
ちの挫しなびとくのひとまへど。ちる文ハいつよ
ノくもろくおりしきけらひなん痛さら結
なる。女一文もらくぞ地ちしまなべあるバ
すらんおりよら。かぐらうめぐくもりのちる
く。情と気をよつよせなすんと衣と地ぞゆ。
もひさる人の。出まよあじきころつるかん

いろもらんおりよ
細 女一文の作あそらを
くさふらひさくとく
お 蓋の心く法母中文よ忍
ひまらんさらし
すひさる人の名ふかりさん
おやしよちりやうろ挹
うしなきさへぶしのあろ
ろまよそてすいさる人ハあろ
此世のねるこの人のあさま
しくおかけるきわざ
もろくすると也

ものうしやうしなうれすくしひのきさすぐよけ
ど紙しびいりさろそらよりるそねあり
のこしなりんし。秋ころのやうよハぐく
あきさらろのこびひやハ文世よあべらめるぞ
れざるよる紙さござそめあるあてりハえこ
そなてくねとなる。なへりさなかく無限の
女房のくくちらぐ無いづれとなすくまろ
ひさうすくかやなくとりぐくよおりしき中
かくもおそてよるぐれてかくよとあるあれども
さしるく。えずれそめじのころつそぞ
さきくよりそなすしまうつりしさしるよえ
ちろぶふ人もあり。犬ろこなしるげよりそ
さけめきつるあろうるれバうりべしそんげろ

細中文の作方にあのらふ
女房達之 蓋よわろと
孟中文の女房の中よ 蓋
まらぐとうけあくまるも
あらくされをみて志てよ

されよる紙うしと
細 蓋の家文法ありさん
字治よハ公のしまるとく
孟 丈君つよ 蓋の心之

とひかゝり候
ものもあらしけるよ
ころをあらそひ
そらくあろ世中
え六帖 世の人乃心くはり
あらそれハ云ふをつらしう
きこへ行まし

さらてもおそもくてゐ
まれありさ候と云ひあり
き給 師人の心れさ候
くなうあとせを殺し
きて 孟云めうさき
世 とうりつの性りて 細こゝまひハ
ことく云けるよ
さうやくりやと云ます
其とあるのましこと
師白氏の詩心あるんす
をこしくひあろ
るすし

細 中臣の四方の人こゝくくそ云うわきうの内心を上下の心ゑのきさき
まりてもつめされバころくたる世中なり
それハこゝわりしけるすくろきつこのくてろ
りうてこゝろをおもる紙さ候でまおうくふも
あつれなとあるれと云てもなそ もつて
つゐるうき有る候と云あり候ふしこま 云ふう寺流の見え
ハ中納言殿のくらくしけるよりひるす給
てうつる紙衣心ろまでおゆしますきて侍
白の見 かこのあるとされバかとも心つれておそ
大君の心え孟おもくしきこと空つるまされハかえく
孟云ひ給て云つる白の詩なるれバとく
そうろよ衣中ちうりるりてあるまうしこさ
何のことひよいとをもる候め しくさゐ
まそ白ハかりしうろをいうじどろうくゐゆかゞ

くおもうし紀詩言侯と
中志とえうこの人ようせ
ハとき白氏のさいへそ
候ふらく

え給りんこくかしこともいさくらうしうろぶへき 三中云ふ
て云ふり給へくあろへしいをじくおかし
けい八法ノうりおくらえくあやうん 細中云ふく
くうひましうさ候ハおしてうくひあうしや 細白
と物語心 さたろうろすき人とおわくる給詩
の詩同十ノ七云ふろへく七言つり
めよしてらぬ今しうはわくむどもしくらすり
いでめてそ物かくらろまいらしらりと物が
さうれハ山里の老人(おひと)どもハおもてくらに
きみくけようちゐてつゝくわくてくゐき
詩ある候とるのめうすこ経の人乃こゝすり
給ハまとりバいうよくちかしうぼしぞふ 大君の意まくそ
やうかう詩もくそとこそくして姫君の詩

あさからぬ花のちぎりく
細 三ゐとこし 師衣ん
花とをしもそれゆれど
こえは山吹のさて
名あり衣とをいへし
其ありつつまれしと
こしひ君つるゆく 於 大君の
つゆゆきされるにも
みよ君はいのをさるると
比りうへなしてし
まれあしらやい 細 秋も
くと秋をくるとそれ
御にち君のかくくひ
なし
しりてはならくを仁まよ
まつ於女房衣くれば
かりつてちひてもうし
ちすらこわしきをも於
うそそうかみてし

なぞあやしくひがくらくまそるし給ひどど
きらちひそここも（細 雲まよわうつくしき女房達之）さらりきさらさ海どお
よわぐやるる花のゐめくぐよつれりしらぬ
とさしめひとつあわりつるずとらげくろ
ひさら姿だのつてゆうされさろもるさ代
うらこされきて姫君られもやうりくさり（大君の身上の歎念之）
とぬる身ぞりし猿どられバやとしくよぬも
てゆるをそのかあてはび人とも秋あしとやは
男ありふうるろではあてしをぞ海よひとさい
がえ代ひさうけて又どりさる海づくろ（つるひさる給へ）
とうしちてうらみ君ふかうげ男そて（大君の之）
はがじいしあれが給よはあしじめくどくし

あてらんこよのかえそやうよ
君のやせまりさ海く
は奥して於ひて給よ
らせありすとりくへさ
めるらくし面白きさき
海て
大君のゆかし 細 明君中将
の乃給し哉剣のくまあ
しくらりまでく 孟中将
の哉剣のさ面を中君よ
給まで

とう細しこ御ゆうはふのるしやわらん（孟差よ）
どうさるやくてこ出してかつきまつりくぐ
うけみすくんへよこえんとはよりくとこえ（大ぐしの大君の之）
らつてくいまでとせ二年あらくぜ如さろん
まさりおんぐるるげなる身のをき海を
しばてつきのをやりよりしはくわされ
かりとさうしあくも世中とさうげ給ふあ（孟白の九く）
つぐさりつられいとをのど給ゆしめく（宇治の出のかと海の之）
らとよる給らろやもさろおじさてとよ
こそくとりしむのさぐりて覚て給ろ
大君のゆかし給しき海るどくうりささてく
まそしあがしらぐつしあらんといふろよ（白の海之）

身をまかせたん
御身とあり今我身どハ
わらはが宿をかりて
さうらふ
こえまわるく　細 中君
のぞくうちまわるべ
きさ御よの縁つるく
宮の妻くしき御心
にそのまゝもと申すも
祇ハわりき御とらう
うき身ともなどうらみ
く宮の妻よりけあぶまし
きハ身ふをみやをゆへ
かくしや

らくぬかとて我が御なくもとろうきらんよ
くまぐくもまつん二あまじき我心の母とや
いかにと類(るい)てなげられ給ふんがふがつかりきに
二人身を捨てさぶらふよのゝて
ええと捨てたんつねよりくハええまずひものから。
きらくき御よてらくつかうしもすらんといい　盃 我へかうやまんと
とかく中わしまへとしらしまわるべく物わりう　中君のこと
らんハとまよそくしれ心のからもうきよ
やとふとそれてげりけま夜ヶ御ぐ
抱きげりしくてるんありけり明の程乃
予よつきどもしあけまですることよ
いざ名ひをくこますへハさりをくれかき御　白ふ
涙しのわられゆかりしてのくれいのまつ

法の手ノろうし見えられざし
盃 宮法の濃池の西向き
し 何世の中と何よさ
とん綱かけとあり
物母のわろのちゝ波

わのそとるひ
御宇治川のわつまし
さく

つひ母のうきとうゆめり御涙おんなハしき涙めをり
まきぞもとわりすけゐるのさ御かれしきかり
中ら二日へかりしく物がりゐさう山のくろ
ひかりやうくあやうか女君のれくてらうま
ほよろくしげかゝくぶきくいつき
もくうさん姫君をうなぎりて八切を寺　細 女一宮
べあれ申ひるしの我らさ御のいといつ　細 白眼の申ひす
くしきそりしう御やうかる宮ひるどう
らしけくきゆほりうまちくかうこてり
もどあの君るひかうりてゆでき宮法そ
しのびて抱わりそえて早くさらてなりとべ
きりされゆけどいふにわりまうき笑

[illegible]

のたまひとぞうけたまはりし年上人
まんだらなどかゝれまつりしといひしく
づしと宰相の君、男の酒のかくごなりたる
御酒めしくらべけるに、此世のことわり
ども酒にのめいだしまへば、よしなざらし
こくへ云ひまぜし、ふかくのめずれより
し。中納言のちごしさぶらひしも出だし給
れたるはうちまいらせいとゞしくもとめ
さうけしきのみえしよう、かゞりしげかり
しよ、しそをよ云ひし、いましてこよ
すくなうはつくりいまに出給れ[illegible]
じきはつくりしもしきしか[illegible]

え給ひけるを、心すゝみてこひとておはしましし
かくも、我君かくしらそしとみひとる給ひ
人々いつくはづくりのまへ、ゆのあはれ
ば京よりおりしまさん程つきてありぬ給
よといそんおりさしけるくらふこゝろよ
まへれるよりもはしれど、ぬれてのあふ
中さしんかうしつくよう姫のうちに志
く御や我まよねてうきん出でそよくあら
りつてやうらうひまふ
さしたじのつざのまゝやうじ傍のく
あけさ中とかたまつきたしてゆはいぞ
ねどりのるけしきはけるひ給うりすく

細蓋
細白のむこ
中志のめ
蓋ゆり
明果なりしよるの人
白宴
中志
細中志めのかきやう
お白志めのひか

よしせじの　細 一二の句面白
し侍人の心ハあらしぞな
げにげに往まじきこの
ま人相いとりと云中く
そうりさと絶と秘ま
ちまさゝん物まし々好
住めりて表なる有る
ふべし
けさきし想のあやめ
細 此ハあやめハ表流面
しせ
玄もつり有中物ハ
此より浪ハ名うとせま
りくし　三 白玄の流切
よのなかへし

姫されなりわきこ人のけしきつよきとこぬ
べくいひまくるげなるおもくけのすがさ
をいとくりて名残よまれられいしらり事
なども人きれど物哀なるハざれされくい
れげさぞりの　あやめともしろ有く
人ぐのぞこそこゝすら中納言殿ハなすらし
くちつしげなるさ海ぞ松ゝひまつりける
すひるしの今ひとさハめやこれは海
ハいとこよらどめで世の色くもぞう
うろぐしりつる流氣色と哀りしおつ
玄をくりるゝ日しくさ海わしさま
でゆがとしせの中しとその　ひてくろしい

よのなかへし
みしとふり　細 大君の忌
ひ給しその秋られ
つらしき世と知くに
そ中君とともやもく
あふせながらぐしとを
なり
いとく此君の物りハ志つと
大君の親く似しき志お
いそれはつけて流中
君のともひきつとなりん
をとゐし　まひて物あそ
ねきゐよりそるまし
三 然
まづりふとかをうそます
お大君の秋方よろ思ひく
そくどと流か觀まへし
玄と世の中ろし
孟 何角と白玄の流布此

絡りしよゑさやまくも思ふされなせ絡いと
流文ハあくろ日ごとよあまこくりなまし
絡そうゆはあくぬみやとおなぐらし。共か
つゐなさ日らむよのつりら絡いとくゝつらしに
じとむしりのをら弟よ海さりてならるし
くらともあひられと。姫君ハ共かしるるげなるれ
ど。いとくこの玄乃ゆりひきづく絡ろんり
よらられあそりそすてこけらしうるまへ
身絡くうらしと共りひらくへしといふくかる
くぬかなと中納言の玄とも。浮らしなりそ共かへ
をこんうしこどやかまて。よくゆのやまちなる
いとおしくそ玄よゆめく共ぐろうしつゝさうえ

と薫のこれよりおもふ所
おもうしる也

ふるの山さと　細　引哥也
くるすてり宇治とやぞ
かつよりかもしらむし
初時雨ふるの山里いかな
らんすむ人さへや袖の
ぬるらん　師　上の詞よ
時雨めきてとあれば
いふ也

ど。[illegible]気色どもよ給ふにいとゞいとほしくおぼしやられ　抄　白文の心も一段切なるところ也
[illegible]御あれば。さらにとうぢよりやうらう
なり。九月十日のほどなれば。野山のけし
きも思ひやらるゝに。時雨めきてかきくらし
空のむら雲おそろしげなる夕暮。宮いとゞ　白文の宮の御さま
なをさゝ也之
しづ心なくながめて。いかにせんと御心ひと
つをいでたちかね給ふ。をりおしはかりてまゐり　細　折おしはかりて参り給之　薫也
の給ふ也
給へり。ふるの山ざといかならんと驚かし
白の心
きこえ給ふ。いとうれしとおぼして。もろともに
ざそひ給へば。れいのひとつ御車にておはす　三　白　薫同車之
分入給ふまゝにぞ。ましてながめ給ふらんの
心のうちいとゞおしはかられ給。道のほどもたゞ

かくまでもとおもふ
三　白　薫両人の心なればさ
とひ人への志ふかゝるべし

このことの心ぐるしさを語らひきこえ給ふ
たそかれ時のいみじく心ぼそげなるに　細　九月十日之薫秋の
よ。雨はひやゝかに打そゝきて。秋はつるけし
月あれつく　三　車の内の詞也
きのすごきに。うちしめりぬれ給へる匂
ひどもは。世のものにゝずえんにて。うちつれ
給へるを。山がつどもはいかゞ心まどひ
をせざらん。女ばらは日ごろうちつぶやきつる　宇治の女房ども也
をゑみさかえて。御座ひきつくろひ
などす。京に。さるべき所々に行ちりたる　宇治の女房達のむすめやめひなどなるべし
むすめども。めひだつ人。二三人尋よせて
まいらせたり。年ごろあなづりきこえける　白　宮薫也
心あさき人々。めづらかなるまらうどと思

人の心もそれも 細 中君よ
自ののまえくなりさうするよ
りこし 師 中君の行くかに見て
大君の物を思ひのようにて
なく男女の中なるやうとさき
抱よ思ひまなく 抄 同(?)哉
うそくうらとけし 師 とそ
して薫の中とうらうけ
とへてそまかるさとし
なにゝ自まにを 細 そおして
あれい表なるべきことも
大君い中にそいつらき
かしまされるとしく之女
のたりら非深縁のるく
孟 思ふくおして我くる
根もあるまじうことく
師 表とおもふ人とハ薫の
ことをそりおよけよ人ハ
うハ地とせざりうを
只人あはせまふよるこゞて
とおもへるとあへそとけ
てなるへし
丈の心あり海なくもとひ
こらく又ハ 師 薫の大君に

（薫の詞）さぶらはれよくもあはれなくてのみやし
いみじく恨めしげに給やうくこうり思ふ（大君のこと）
給よこれど人の心もそれも掛といにし
くおぼつかなくていとゞうつくしきことゝ
のよ嬉しひきてさ思ひさうるよいそぞうく
うちとけしあはれとおもふ人の心もあし若
つらしとおもひぬべきことわざよこそあはれ我
も人もこ地さへぞゝろうつゝづくやうふ（抄 薫と大君と世上のこの事をぞうらくそしとさんの心）
ぞれとおもふろづひあくしまつりこ大の（づひるうり）
心ばへ給なれどもとひさうてしさまへいかにと思ひ（暁孟の心は流布本一にありてのハトアリ不用）
つゞれいふよ地かりくのこまへぞいとおし
くてやがしてさ御気色よたこありくやう

御君とおりうるまつしく
孟 大君の自分のおはせし
ハ中君の方も手嫁しく
おもひ給ふに薫の君のそひ
まへハなきまゝうつくしき
ことなり

ならん人いかゞ 細 大君の心
に薫の心をかるゝ人なれ
ならとこゝ 孟 自らと薫と
をさへてくてのたまふ

よしこまかるとゐの
三 薫を御方ゝちかく
らひなかなか 抄 三ち流布
本にうかゝおとゝを
てかゝるに佐さとあり

ちゞろさまらひめ君もおはしけれはくさひ
きこえ給よさりしらぬ人のそひまさへ給ふ（細 薫のこと）
ぞおぼしくもありぬべくぐる御前思ひぐへ
しうえへどこゝろざへの乃どうよ抱かく（薫の心 自どさうそく）
りのし給とげよ人へいかうハおもふ世ざなり
さりとこことあれ世給ふよまさぐくしきそいし
らうえいと耶よつけくさいとゞまうしつ（白文字給ふりて…）
き入まりて次の君いおもひゞうてようころ（細 薫ハ自ら…）
やまくゆりておほし給捕りくかまぐこまえうと（客人…）
ゐのうりそめたる方よいひしそゝそら名
いれいいとうらしらと思ひ給ひうしく給ふ（薫心）（細 大君のこと）
ましうはゆいしめしそし捕らしし對面し給

同じやうにおはす中納言の君を招ぐとふぞ姫君の…
とどまりて…
き給ひけれども…
として白菊の君の…
うちあつまりて…
きとおもひしかど…
かりそめに…
かれさへ…
つ文のかへしの…
りひて中君へ媒しまゐらすれば…
も文しかとさうべし。かの白菊…
ひしげくさじく…
まかりぬ…
おとりてさる御事…
うけて萩のつれづれと…
かの君の給くるを…
めしけるともめの…
よ萩のゆくおかし…
て京までも白の中君とて…
わがともおなじ…
うちて…
うちわかく…
から…

細 白の中君…

かくて…
うくし…
からをまかりて…
萩の君…
けど…
のし…

おやおく…
お萩の…
…をわたくし…

つくはりもわかぬけるよ
細川内八郎の…
うちとくに…
一の…
とはんと…
よそゆうて…
まさ…
うそよう…
…
人も…
師大君…
れまうとの…

つくり…
や…
おう…
うちの…
…
かやう…
めしまて…
はずれば…
よう…
よう…
なつ…
ほとくつ…

ともすればよろしくまはれん
へだてられぬは上なるべし
やしく
例のとも山寺にまで
おほ山寺のうちしてわび
る心地しける前栽など
義あつてのべたまき山よりの
し── 細 葉のくひ
とかくものさ
とりねぶりといふ句文を
細流はさるべし

京かたくろへさる
白の中君をさしたりて 孟 京
まいぶりくまほへやきんと
おしましかし

ちりて例の紙山ぢるかくゆめの文にまでも 白文の中君の事也
諸の君なりしとも物語さて中納言のある
じがごころのひとうちうちこたへそうろ
やましかれとのまへば女君あやしと文諸 細中君之 孟中君のいふと也
わりなくておそしましては諸なくとも 白文のふく
がありどころ諸はこやもふめをいふごとく
物しらば心のうち紙きり給ての君文に女 白文の此たど姫君ハ細事也
さしは文いふからん人にくへゆやともひ
なげきまへいげかたくろづくまくる 第二諸之
げかなまさかれかこゑ京はこひうくへく
わたりまづこひとつもさすずりよなし京 孟末 細夕霧之
諸よりたのゆかりのかこつこにお諸事ひて

さきこりいうぎくうしもゆがりしろ人の君乃は 夕霧の
とし紙ゆがりしのぬよう御そうめしと
さひうてし諸へぬめりもとくしきされさ 白文の御と夕霧のそう諸也
御をゆりしうくそしつかのしまてうらさ 中君へも夕霧
のやまふとく まとかをられへゆのしまへうめれどいよくゆがわく 白のふく
のおもえも事て白文の小の方にも人まうんも保ゆかりさとく 中君の母
すくてうづしもく諸なんもさうてうしとか
ゆかりかまへてよゆがりもく人のこころく文づ
へのもちかく中くこころやさけなうさ 中君
とそうり
やうのあさくゆは紙やされども世中に
つりてきうとこさいの気しやさつうまくに 孟 今どとゆる中君也
をおうし海さば人よりうちさ海よう
あさめなど今はいと花やうればしる

大のうさの 夕霧れ君をと
いふりてら白文をまつ
せんとゆかりようよ文乃
同心うさうへよ文中君を
文章院へまうしうつ夕
霧のうちとゆかりもへ
しとく 細
ゆかりしうくていざてもく
細中君のれ諸をかさの断る
ならめとそり
らへてよゆかりもく人のさつ
細大うさよゆかりもく人する
へ中文の此方にありけ諸
かべきをもつしよいい
でとゆがりもとく 師る
べきよゆかりもく人まをでま
づくへなどのごとくよを
そうしてうるやそう
べられどもと中君はそう
あたゆかりさでゆもし
くゆかりとよのかく
そし世中うつりて
細流の此諸よつる諸

てなん匂宮を東宮よりも先に此息所ふつと思ひ給へるさまにつかうまつらんとぞ
孟 さうしくさるへのとハ今上とゆふ中宮をさし東宮位につきまゐりて後は此宮ゑん東宮にと
とおもひそうきる事也匂宮をよつきまゐりて中君を后宮にもとおもひそふらふ
も今ハけしき給ふゆゑ此んのおもくしきれぞ行末の事ハ思ひしらで今えらく
しくもそなたしまつらんりとゆひのまつまいもてきこんなり

中納言ハ三条の宮つくり
つくし 三 回録の後薫
の新造なり

ようりさするまじくてすゞん方なく
つくしかりけり中納言ハ三条の宮つくりはて 細 薫ハ大君をまうけんとおもふうちに 孟 若同
てさるべきさまにてわたしたてまつらんと 薫のこゝろ匂宮の中君とおもひそさんかたにまうけそ
おぼすげにたゞ人ハこゝろやすかりけり
いとこゝろぐるしき御けしきながらやすから
ずしのびまぎれ給ふほどに思ひなやみ 細 匂宮も中君も也
給ふべかめるもこゝろぐるしくて思ひて 薫しと薫の云詞也
かよひ給ふと中宮にもほの
しらせてなどうしのさいはれにやとおほ

とく女がたのためハとがなからんと
かく夜もさりあかし給ふをぬすまげ
にいとくるしければそれせんとおも
やるとも思ひておはしますよりもうらつくろ
もりへなどさらにしくもれハある
るとかくしてさりてのたまひければ 細 壁代 至徳記壁代
三条の宮もつくりはてゝけしうのうへにかうら 又云ハ生絹 又ハ練絹を一重にそ間にかくる也
まうけよするをとりせまうる絹ぎぬさらへまゐ
うるへるゆゝいとおもひてそこへかそなれ
給さ御くろう女房のさうぞくれめのと 宣
すゞろりの給つゝわざともさせ給ひ 三条の宮のまうけの物の外に別にあつらへ
十月一日ころあじろもをかしきをいだすを 十月一日 カミナヅキ ツイタチ 拾点

紅葉ぬらんよくうき宇治山の紅葉をみんとて
去年の春ゆく月とも
かきくらし〔?〕あそびあるまじ
此御後〔?〕人とて宇治
にあれど薫の〔?〕也
まうてし。

しるなへ 細 御中宿り
は此宇治の宮をとし給
へしとぞ 師 薫より宇
治の人〔へ〕宮〔?〕ひつかはしてとい
ふ白文のおもむき也〔?〕
よおぼしまうくべきなる
とその〔?〕よ中やと
りまさ〔?〕へしとなし
所せきの事〔?〕なれば 孟 匂や
とりはかり〔?〕と薫
より宇治へ申さるゝ

とそゝのかしきこえて。紅葉御らんずべく
申さだめ給ふ。したしき宮人殿上人のむつま
しくおぼすかぎり。いとしのびてとおぼせど。
所せき御いきほひなれば。おのづからことひろごりて
左のおほいとのゝ宰相中将まゐり給
ふ。さては此中納言殿ばかりぞ上達部は
つかうまつり給ふ。たゞ人はおほかり。かしこには
ろんなく中やどりし給はんを。さるべきさまに
おぼせなど〔illegible〕
これ〔illegible〕
まぎれなく〔illegible〕
〔illegible〕

らうしこゝかしこかいはらひ。岩がくれにつもれる
紅葉のくちばすこしはるけ。やりみづの
み草はらはせなどぞし給ふ。よしあるくだもの
肴など。さるべき人などもたてまつれ給へり。
かつはゆかしげなけれど。いかゞはせん。これも
さるべきにこそはとおもひゆるして心まう
けし給へり。舟にてのぼりく
だり。面白くあそび給ふもきこゆ。ほのぼの
ありさま見ゆるを。そなたに立いでゝ。わかき人
〔々〕見たてまつる。さうじみの御ありさまは
それとも見わかねども。紅葉をふきたる舟のかざり
の。にしきと見ゆるに。こゑごゑふき出る

〔?〕川へゆかしげなけれど
細 此宮薫より御心ざし
つくしてこそあれどゆか
しげなし〔?〕 師 大君の
心は白文の心なり〔?〕
これもさるべき縁に
てこそ〔?〕

紅葉をふきたる
細 花鳥余情の例をひけり
見花見也例として七十
二代白河院承保三年中大

井川の彩雲に舟を彩楽
うてゝきう
きみつさ許りても
細 年の二ケ月の夜かう
とし／＼の 彩楽をかさ
うろしく客ろくうら宮に
紫を舟の彩紙兩所
盃うろ出し所を見えまれ
へまれまでもとをふて
此身さうしませく
晄 字浪随のうてし 此時
の宴 いまの年号流之
盃月
おもくの海 細 見つわたさ
人へ 盃 見つかるさとのい
中忌はおりぬて白文の
人しいうすれはおかくち
海そうくれてふかいと見つめ
のうてそ世ひねハ 浪標
とうきへのまむ文のおまま

のくねども風につきて志さきまで井川中世の人乃あそびさうしづきおる上海うく志のびまてうちふとひしことまひ川うしう代を結ふとげは七夕のうみくもうろ彦星(ひこぼし)のひかりをもとそ給出めみども地かくさり。ふをへくうせおもきふまうけよおくせおどもさふてひかりきうれげくよ此身さうしをてあそびて。文つくり結紙。彩楽をうもくこぐして海紀(白楽天)来とうふりのを吹く。ぞのくらろ中さ盃そしきたのよ文いおふの海乃こくう(細 中忌て)おくとうりくさへのうしくのてはしのうに法ひ

きへのつまうるうゝくゝん
續千 お 花鳥 ゟも
面白しまへよ七夕のうす
わりと又かうろ見へとへうり
人のまよひすゝしてゐめそ
おそさうく人をかまゐめそ
宰相の兒出つのうく
和白文の法然よまつれる宰
相中将の兒
うらぐしき須磨
呉一祿云 左大近衛左右
大つ兄右 若衆出仕よ八須
男と具まろえ 三 出去
出つて宰府の須男を
つかも

そうも世。時によつけしろうへ出して。(詩よく)うそふき思ずじおくりく人のまようふへもうしきめ(細 被文よ中おおへきとえ)てかゝきんと。中納言を掛りて。ぞうへき(蓋)やうまきくて結ひをよ。何まり中ぐ人のれ(三 中忌の中文さ)縁きことふく。宰相のおそよれ遠る声(のうこ)こと(細 夕霧の急て)くしき須ろ男のきこうれてくらうしも雨して素りう見へりようやうの此ありきは志のび給ともれどもそのつくしくとひろごりて。姫のしあしみをなうすささかるなをとくしきひろうぞおやうさとるくう。織(おり)よおりしもしよう代をうしめし抑くうきそ。紫ども人おもくうして素りうろり。

さふらひてと物かたりまは
御日をは遅ゐしかや
まうし
みやの御ことを聞ゐぬ殿上
人 御中宮よりまかり
しかうし
いとまめだちて物かたり
ことさら御ぐしと
すみの御書るゞのやうに
さなれく心のかるる
しけり

細 不肖の人之
権門のまじはり難也
也 孟日

孟 こゝろくるしくて中君へ出立かたきをいふ
りとふすくなりぬるを中納言もくるし
と思ひてものゝけしきすくなりぬ。けむ
のこゝろとハおもへど。思ひまぎれてあくぞにお 法性の宮之
しけふかくてとかゞやくよ。又宮の御事。 孟 明石の中宮之事
さゝぬ御かどくぢの御まへさふらひ。 后の宮
あさくしもあらで心ちなしくくり給へ
んそうあすりしとかは法文とぞなれ給。 孟 中君へ之
おりやりすりしくをあすく。いとまめだち
て。思ひさけりとくもと御てくとらさうづ 中君まづの御心づかひ之
けあつれども。けげうさはりかゆんよと
てはやあすりをするぬ宮さ御ふるくへめ
でしきれわすりよあはしらそしじりひるさき

三 白の
仏ハ宇治宮よりかへる
事あるへし
あるのひとを心にまかせて
まうかく 仰 御まへを
てべし。さ御くの進物ある
よ網代の御輿ともに白女
へなかりくく。ひとかへる
いふ 縁よ心にまかせてくく
まへりてとかくいりそ
れあしろのひをまてとくへ
ん何よかりてう我をとゝ
かねし 大和物語 水原抄
紅庵下譜よ御輿よれ
紅葉をとてしましる
ありかへるとかくへしきます
よ物りくハ 猶よさてよさ
のしきあれ下人ハ御輿

わざうれしく。いとゞ物がなしきうち給ひそ。みちく
つごもり月日ハ物がつきまさりたりしよ。 孟 二ても法師あつて云
さりとも、などるすぐさめ給へとおちゝさ、猶よ ちゝまきぬる
の、さりおりして、つれなくもいとゞ給ふんべつ
くも口惜しくも、思ひまぎれ給。宮ハまうして 白心
ぶきくまうすしと御用意して限なりおぼ ゆぎう
ろのひとをも心にまかせて御あそびの木の紫
ようさもせりてあそぶとも、さるをん人るなどハ
とおもしきことよ女へも人よまさうひつく心
ゆく御ありさまよ。つらしのなからいハむ 白心
のさ河ともさうりて宮をのこゝろゞあ給よ。
三 八宮の姫君之
心みの宮の御こゝろ思ん。いとゞこゝよおりしろく。

すく書家ならをはらし
く思ひつくゝく下の句をそ
猶よたたらひてそのしる
此よひの花あはれなるに白気
八中君へおくりそ奥に出
たるなく

さられくにる
細 初八の宮にとられて姫
君達のちゝ宮にまさりえぬ
らう思ひくよ
抄 白気の宮へおくりをか
と申すわるもあらん
旅人まちしぬも
義 白のうへふかまを
思ひのこと

とくさハ家よみひまじれり藤のうるゝまでも。抱 細 是そ
かげよりて。たゞめさ人へすさびけるなる中納
言の君をかくしそのめでたくならんにし 師姫君達へ告まゐらする事を兼ねてなり
きりざられと思ひ由。その君所とも如し 細 初秋きうくてのこと
君ぐらハ花のをきを思ひあらく。とられてこそ
よるべの猶くん。らうくをそさ秋いふなる思 義このきも
びくよりひ猶とりのさてしうもあるべ
しこゝろ忍しぬもおぼつかなく。おとさまとぞや
さらやとも人の時くへたいかなる山かくれなれども
のゞししまでもる抱なれハいとおりしげなこ
そ抱し猶るれさうの猶と上手までこそ気の
順音のさひなりし猶きれけるどもらく

いつやも 細 その事を後て
まつし 師 八の宮のうくれ
まゝりかしさま木のりく
ちうくてまとへて姫君
達のさひしうらんなるを
思ひやらくらうらく
桜こそ 細 桜をたくよ
のつひたりさをおもふ 師説
花義葉八世の君とたまふ
桜をさうしてもる中あと
桜ハ しよね花あさこなる
とくくの玄年け義ハ
おりてまゐあつしもちまよ
とふめくく能り
いつくしり 細 秋之初之
とふる鶴ま雨白し
孟是なり秋ハそこにまさ
うとさま秋くいふくり
初花とく
いう人も 細 是八の宮老
まろへまてし八宮をを見なも
つらしくへるゝしまの句
の君くよりたるまハつれなく
のちいろくと孟岩をさハ

よりふ宰相中将 細 匂宮の事也
源宰相
いつそやとも花のさかりにひとめみし木の
抄 義よまさりおもて
本さへや秋のさびしき。おなじ方にと思ひて人
義
八中納言
義
桜こそおもひしられさきにほふ花も紅
夕の二男也
ちるをつれなくぬる紅葉
右集卷
いづくより秋ハゆきけん山里の紅葉のかげへ
中君返
ききにくとるあきのさかなの花
孟 八宮のうら嘆
さしへもなきさ山里のゆくかにまよはるゝ
とちる日かりる。中よおいなくひてかするに
猶さこのうらくおかしきき世のこゝろなどの
ひ出るあかりゝ気

石と経のやうにつゞきて書く
師とあるべくともなくかくて
くるしからぬ人の詞にかれのこれ
かこしさうしき
秋はてゝ 細 此文をいひ
入させ給ふ 師此古今
の箱ハひとつにて面白く
と云に句文のうちの語
ひとしきをさるべし
教 花ハ松風の吹きたるやう
はらはらと落ぬ句のこ
と我とゝしまる

ことさらんに物わびしき語
をよろしさをあつかはね

白
秋はてゝさびしさ限りなき木の下をぞ吹き
ずしそよぎの雲風とをしくそうきところを
まゐるとて月のくまにあかう人ハげにかくはかれ 細此下第二段
もとすりなるかのさまうとるに給ひ給ふ
ぐるしさをさまかう人あれどもとくおもく
づきそふえおかしましうくんハはくつきまう 孟第二段
文どもゝのおもしろき事をしらずやましき
ことにつけて物わするれどもやうれひなるき 孟うちの時ま三条人ハ知来ぬべく
のまゝれハいかにもしてあからくおもふことしあらんやハ
きえしうれ給ひてうまをうちしくらんかして 細守治文之
よハいとゞまぬるかなひをとゞまりそへそさあらぬ 孟車
のこれとさふうまて
行のしらべくうるしかくしてかうれしかはゆく 白竹始めと下ゆしくく

月花のうちうちにはかなきうちうち
孟月花人ハこゝのゝそれ
月花のえんしくハきこと
みちく 大君のくまに句文
いろいひやさきころを
ちへやつ

さうざくしき
細下つきのくこそそう
しもれをされとそこと
あるしもすらことたり
ことに 貴人ハ人の心なく
をそひて偽ハおかましき
と云ひしうくもさもある
まうきてすく

あさめきくうつくやうよ
細前八気も句文をよくあ
よくそく此の孟まし也 日孟

ちかう人ぐしもいとはかなしとなくり。姫君も
おしてうるわしきとしまよさとく月花の名ぬるかた
ころちなりくるのまに人のいふをきけバ
物をとふりのふそらしきをとしてことよ
くちぬれどもぬ人をかへりみてとうなるをと
云のかけはからぬのとどの人々ならでぬ
女はらの着物縁よりかなくさるかなくし
きこえまるこそハめしくぬところあるを
おじまくめすまもとむらひとぬかるき八
よなかぬれバ人の心ぬふとつまりしく。あ
ものくぎりのとなしいさしとおかれじと
わざるかなりぬるに。めでまさるなしにこゝに

あやしきまでふかうつけるに
姜の白気をとんふかくお
つまりうらら[illegible]
こく

うしきをとうするれ候を
是書素　白気をせうじめ候
かろ筆らは姜八の[illegible]と
條[illegible]とうくらんをと
つまむらう[illegible]白の恩
まそたしくたまりとと
うりハうの中納言も
血中君の[illegible]白気ら
せらふうりて[illegible]
どくまうすうまふとや
あかのせ[illegible]んと姫
君のこらく

をきくつくへまひくらくやうよからから紀
猶まさくハ出がりしらくさうし　物紙あや宗
さまざくんかうけよのかひまうら宗の郊よ
中君よあわせてとと
こともうよつけくさく[illegible]のうきをせひふ
ふがあらさするくをたうれがうまとり
もうれらころと[illegible]川ハうの中納言もいうよ思
ひ給らんてみをこころよなろうしけるひ
とはららまじらるとどそのそれせふうんふく
ほくへよおとがめしきつしくせひどされ
給よららもふがくいでろやおしう
出がし給さうじこはし海さうよ対面し
[illegible]

ちぎりをまつれハさりともととこのめ[illegible]
出がりうくじとおが流らるきまうりる
ききたらりてそへ物し給ひしあとくんのう
ちよせひろずさめ給らさあかへ倒くへよなろ
ぐれのめのひつれ給ハぬふつしをあふぬよ中く
みくうらるとのひあう紙つくうとは前らり
を出かゆらよいとど物あそれるり悪びが
ききうれ気色とたうう紙人するりくまますて
して例の人めきさうすまぬるすくべらく
やくまりてるし給あじき紙るどあの宗
いつとなしくあつれとときはん　給られると
世よるづくへいがらやうなうつとこ川へとさる

わとくよかうら　白気の
ひさしくわたり給ぬら
ふうそれせぬふもあらぬ
つまき[illegible]くちうさうど
まくあうしるがしう宗よ
らくおるまあるハつて
く口あことのじ
まうときけれうしさるを
師中気の物ゆをりてき
ほれしきを姫君のみさ
まうてく
人うらくよりてるして例
の人めきさう　中君をとも人
うるよりてうし家居も
御まとかへハ白気もりく
ハあらし物さとく

らへやうきれ　こそを
あれ　業平のひのぞれ給
るすく、それをとく弁ろで
中君のまよろうずてゝり
き使くしうしろおべつ
るまハうぐとひめこゝの
そひ給く
これこそへくまく
孟八宝のうやうのまきを
おりめてそ作せられ
つんと大君のゝく
御さるゝちて世をまく
せく八ゝ成てそ月ゝし
てゝくしく縁まつき
きつてこれ独をくよ
てもらしまてとあらく
やうのまいと人すへるよ
孟一やうに親らうしらく
御るおりしあるま縁を宜

まそんあめれ。中納言のときうざ使よ
いひおりさ給も。人のゝどらんとおもろろ。
ゝ地を何よりてそゝすれて推りふとをし
らへやおうさうこそおれおろ人のこゝろを
使よりけすらのことをのというそとさひさ
めれどはうろうきはをは。つおすよりそてるすされ
ぬべうめり。これこそへくまくさうらし
て。世をとらで、そとのまひそとしかうつてく
りやあらんのいさあ数ちま、さとてそへうこさ
身どもとみくさらぐ。さんでみとをそれなは
らめやうのりみと人をくへるるにゝとまふ
みるきは使みえく。ゝるきはゆうげさゝへるやはし

られさうおりうし使るう
へまづうしの歌さハさう
物きそて万さ歌を達う
さん袖をりせたはしんそ
いそしさうけとく
つゝまてといらへらね
さきまよ　えんをまさめ
てかうの化をひとつく
そりて羅とくゝうちね
へしさそうよろくねさ
きまよるくちりしさそ

ちまんじうざら使さられしうよさら袖をひ
よもけ中すぎ。つゝるとひとらくらぬさえ
よ。いかくるくかりらんと思わしもゝむよ。
こゝろも使ことよろしうれば物を当て
うり集くそ。ざすなうん彼のかうまに
ろゝゝ君をまきり給をいとこうる
と我が業をひつけ給よ袖らさうざそく
しう我よき人をとられまそ。いまいとざうる
ぐきむろゝうらん。わろうしくおりしき
ゝ使と明くれのゝ袖みるく。いぞ人でゝ
うもこまうちさんと。おりひまうふとまと
そ。人こゝれとゆくされのさの。みとをひつま。

ぐりすきたる人にも抽し給
ふこと　細　白氏文集をひて
このまさりよりうち掟給ひ
ていろくし
道心の人ながらもすゑ〳〵給
はん　卿中心に句のまゝに
さくまでゆふ〳〵いつまでの
心ちもやうにいへとし給ひは
いふうきんとし給中君
のことも同じもあさるを
と大君の上にいつのまこと
へやうなりける例の心に
三此さびしき事をいひてや
がて宇治へ此かしこん
とせし

山さとのゆかりさも
細　源氏物語紫式部ゆゑ
かれたる此姫君ゆゑくに

れの給はむ　この君の事を
三　夕霧の六の君の事ゝ句宮
八宮同心なされとも押立
てゆかしく思ほしもし也
ほうしろきさ句宮を
のとくしさいふもあ
るとものまゝし

ぐりすきさ人のよまの給ふとこそかりける人
もとよりかたきこのさん人の世中にまじり
なる例の人ざまに侍りつゝ給ひくこゝろを
くらすこゝろさんなど心がけてやうれ
いふうひかりすく此世のはいさゝかひるうさ　孟
むかしうてぞめくさ身にとゞろかすらい　字
のまことの事
げにくえんぞやいからくり例のさうよ　白氏文
お内裡のゝ
むびてこいつくさら給へるをぐらうし　古来物語人六
おほんとびうまちゆ山ざとのゆかりさも
ゆかりなき所(?)かりがりくかさう
三夕霧の一男宰相人の道の事かし人
はまろ御と世人も志るまそしつさよわり
し源中将のわりいふ給へれは中君なるらし
ちかしきものけさやかんていとゆかりてあ源
しきふうかくまろうをよまゝせまゝうは
宮ずうのおしさ如くりとゞさびしきこ
とゞといそえくいろよつとさなりいを　内裏よりのこと
なり給。左の大殿の六の君をとりひかし　孟　句宮の御門な
くまいらうて　右にいよの
此かりしろいれどもそしちて来ませ
給べくことれさゞめくら中納言殿こそすて　薫之
あいらく御ともひあいさ給ひよくあまりこ　世上に
ともろうやゝまみくへきとの御こひむ
ぼくすの事かくて
のうえうめうしと此かりしさ海とし
義よわそれぐくらの心ばせのたゝ掟け　孟八宮之
ひもてなしけるすてぶよ此うるべ

わがなきあとまでとかゝるにや
孟 薫ハ大君を思ふ心中
君とゆづりますを思ふ
心やうに思ひて白氏ハ何
合せる事を今ハくやし也

はかなくのおしくゝに故宮ゆかりあるまゝよ。
人くしくりてうさびやしあやしき
まぐりそあかるくよ。え心にあやみく
かくまりらてきあ御しるべ。我がおもふさ
いくしおるよ。ゆづるまきさ宮もあい
うすくてうくりそすてしとおもへばくやしく
をきあるれ。いづれをわかりれみてくまは
らんよ。とかむべきさ人ありまりぞ
物うし。どうにとかしうらひとつよとひ
ぞれは。えハわしてはらよくらねおもふ
くらひもうろめくしとかわきてはら

孟 白氏之
妹とも姉ともに
もどうやせの
細 白宮之
孟 とりくへとも物よ

はんなつきて物おもと
細 物名中宮の御おぼえ
ありそんおもしろうて
もうくるよおひらき人
まゐるよ 細 此段の意
など思りて白氏とばかり
りひそてまりまゐる
わざし

又此はおりさ宮よ
孟 女一宮を白氏のいづれ
とおもうしおふ人もあり
とおもひまうて

まよりてえんとも人おもしるへばかうよまゐしきを
てまいぶ宮よのどやうよりそおもしろき
どうよとひかくさ宮つきよりうびさう
やうよ人のこうさまべあらとはいとおかしく
ちらしうして物わかやそ明うれかしく御時
宮いうくしてのどやかなる見女一宮の御
しくよ気りまてれば。お前よ人ゆかくも
さふうらど。思めやるよ。御心経るとはらん
むる指るり。御こてきうりへずそくれりの
浅かし経ぐみりますくあそよなさこうさき
りのくるよびうよおかりしほは御けるひとの御
此かく川なる物よとひかしまて。又この
はまき宮よるかくよ人世よありるん

物名中宮之
細 十月之
孟 白氏の言うりまで
急
女一宮の御宮之
かう
ぞう
かう白氏の宮よ世よそくひあらしとおもふ之

逢せん事の姫君かたり
三こきでんの女御そ
らなり
さらばこそとしもかく出ゆ
まさるよ　冷泉院の姫
ますを白文の出ぬひ出んをも
ふかうのきみの上
ふくんまのえ　あかりまさ
ふまよく

山里のおしき哉ゐ
孟中君のなまに似たるを
俗にあつしく

や、冷泉院(ぜいらん)の姫君がたりてそ出づかしの絵
さらくの法げをひもろこよくてこそ
れど、きらいでんのきもつく出がりてる
くれ山ざとしく（中君をさして）へてらうしげまおそてう
のやそう出すまじきぞうしらど、しえをひ出
なまいぐしさ出さるるむかよ出ぬ（くて、なすくあるは出家）（女一宮の）
とこのあきうきろうしう（出おの絵を白文の見たまふて）
しげるる女房どものこひ（孟　仕の物ろうもえまて）　かれ
ゐるすしうろくまよのまへ　かんかく
山中ゐるすしらきさせ、山里の出づし
まへらりししとて、はじめとしまふ給（細報 冷泉のえんは何ろうと）
へげむうしへしげしへしらひらん（女一宮よ伏老をかくとやうけてしく）

とはかりむかし（細 伊勢物語）
しるへはしくろへし（細 伏絵）

の絵なるへし琴のこと
伝海よ立文和物語ごとく
絵え流布の大和物語
よへ帝紀てこと、ゆかり
伽いりうしまうんでと
へしけ伏源氏物語より
ふくんへ伊勢物語よ名や
うちま天帝ありと今へ
へしゆきこれいせ物語の兵
帝さ画く世よおろ物く
人のむかしばん、伊勢物語
むかし男ありとのいかか
くけるるを見えとりて
うつりそねらげまるろ
出事を人のむまうんあ
とそるも　在り
物事の事めづしきこ
とのそうちらまく物と
ひるある
まこしも物へたいさる
細 別腹なとひつけう
へし見も人の兵の外

とはかなきむかしの物語をとりてそへいりうこと
よきんとしへうる雨の人のむきうんとい
ひろうとこそ、いかが出がりそんるのらら
くまりうりまて、いかへの人へもとう〈さ（白文の左れまぬ何く）（女房うし）
ゆとへつぞそあつくてそおうつてゆかれ（子えき中のみそ）
いてうらくたつのそりくくおすきせ絵そそ
とむかしくゆのしまへ、いいうるたまうくとかがわを（女一宮のえ）
まおきしまうきそて、かお前よさしいおれまる（細 白のおそ老絵）
とうかきうくはらんおう、はげうのくちる（女二宮のえき）
びきそらかれ出うちうそぞぞらうの（さそずれがうのまし）
うよささうそまうろ絵が、おりさそめぐてうく
まこしりくの人へぞそちう人とむかひゆかしま

人の朝ごとにおもひなさるれ
花毛詩云蟋蟀詩ふかし見ず文字
なまられとなう 師 見ず
あまでござよあはれげくのなく
にもあまれ 細 なのべききとよく
へといぶらとく 孟 一服一生
の見ずなれば寝ざらん者
はさなれどもうるはしく
ましませばいかゞくとぞ
さらえすく物也 細 住蘇物
絶の心は味をつけて
てうつらしきまゐるこ
文味の心と殺して総切
なとひ給ふなる雑き
とく家よせてえんなりは
心かはれりしくあすくと
ぞうかくさるをぞ
く師こふそく世物さ
宮の心さす物とこぞ
もねなのうなはうち
まろく白文がしかれ女
の人は殺んよあはせてさ
物がいはじ白白さこさ
此心けんらむいやしさ
細 白の此心く女一の御方
の女房達之 師 此心は
つらきさ白文はとの
心とあるる者世られ
はかくておかしかりけり
あらじき女一宮の女房達
おどるよう人付なし
まふとく
何からすりなんくと
きりともと思ひつれど何
ともそすりとおもく白文
の此心かりうちとてみ
思ひ給也

しらぐくもゆるまよさのびにくくて
白
なる草のねざんりのとはたてもぬとむすぶ
女一宮の女房達なるべし
ゆれさらむららこそすれおまへなりつゝくゞ
はこの文をとばへとまはさらぬまてりゆくう
細 白文之
ちろまうくれさりしくしとこそおもはるゝ
細 女一宮の此心く
てあやしくゆがみせはりおのの絶なろず
こともりふくうしうすくありなともいひさ
白文の心之 細 女一宮のことわりなる
な姫君もされてよくてゆがみさら紫のよ
れとりあて此ふこ市代はおかりつこくて
絶しくはおまさこの世中よ満るく此 ひら
細 此下草子地也
りしことしまへり世よなくりしづきゆえて
うはしきのやんでらのうかるは
女房達之
うぬ為あり心こしさうげうら御覧じて
き人の此頃なんどをいとゆがみら此心のう
つらひやすさへかづしきんでよぐくすく
うらしはひつきらざを絶つゝの
宇治の事也
あ名りとを
おわしきりて物りしとしづれ絶
すぞ日ごくね 絶 ゆるく絶ところへとま
細 宇治之
どとさ心ちえて何かくるあかりと心満そ
孟 宇治は薫の之
うちずめ絶よ中納言おかしさうなやまし
細 大君之
げよしまふとゆえてはとみしひあすりうか。
いとゆらまなく斗の方すやとみもおくね
孟 大君なれまとつけて
薫の頼と絶るまじ
どこしつけく新面し絶そず比ころさ
すぐくなりけさ頃どを奈りきつらを。

文の御つとしゆかく 細 薫の
御心大君をなくさめ給へ
人に見せけるよしをいふ 孟 紅
御後人のつらさにとも行
なひしとく 孟 白文の紅
なるは後人の時これへ御出る
こともはなやかなる薫
の御事に
なるさ人の御かたあ 細 故宮の
白文をとぞ見ゆ しるまで
の給ふこゝろに あはれ
こそよの給ひしにおかへ
ぞうくしし 孟 八宮の御流し
うちもかくの御ことなる乃

なにかのなやミ給ふらん御ありさまともおもほえぬ
に御つミふかうこそおもひまいらすべうもあらず
まゐりきたるこのころとめまいらせ給へど
くらしつゝさすらひくるしうおほしける
よろしうおほしてはづかしけれいとあ
はれなるやの給ふことゆかしくおぼし
しみ給へるにもあるなるまでのびらか
なりもえやはらかにもあらぬに侍
そゝのかしきこえてへまゐりいらせ給
ところ給ふぞなかりけるゆきさま人のはいる
侍ことよつてとおもふつゝかなるやうく
りりけるそれかし給さは侍りぬれども

世の中はかなくもてなしても
[illegible]

ましてくちをしひなよりの
孟 大君の御形見をまひよ
気の毒にさしんなり

なにはなれさへかくしもあらはして世中は
とてもかくてもひとつ御ありさまに
こともなくうちとけいふるかたう御こと
じめしるなにごとも思はぬひとへよう
めでたきやうにもあはれをあるこそお
ぼしのとめよういろめくかたはまあらし
とうん聞りひ給るども人の御うへいとう
ふかき河をあやしく思ひゆづりく
ていとうしげにも給ふれべうともさ
けちひのちかきも中の君の御らうしけなお
ぼしけれはこの御例のあるさまにくゞす
れど ましてくちをしひ給ひ限りの御心つ

てあつかひきこえつる
と薫の詞也

さひぐまほしく 師 薫の
く行しくわるくも侍
るよわが身のいとゞ
きよ侍るにさひぐま
ほくの家人もちて
あれびとしさひぐまる
しとへさふひなきん
く

きこえところもあらじ
細 薫の詞也 師説
とこそ[illegible]の給ふ也
限の別のおもひとあまりひ
給ふ人なるべし
わりしよりは[illegible]花鳥
是 孟 薫くもりもいかゞ
しうせられくも哀ゆゑ
あんと薫の思ひやり

わさくり給ふ 細 此つゞき
こよなう御ふかさんとて
師説の給ふとかくとそ言
まじきのことをなどあれ
はとへて思ひなくりう
うけてまうしくけりえ
と思ふかくよのおほ御誦経

あさゆふのまかによりまさりて、いとゞしかん 細 薫の詞也
なりさまなれば、いとゞしかるべくなん。かゝれ
ばこのよはかりそめのことゝいはれ、かなしく
いろいろむしゆるにも、おもひうき世ぞ
まことにさとりぬべきことにて、さしまもなれ 細 大君の心也
いとゞおもふゆゑにもいとふたゞおもひつゞき 雖も死なんとおもふとて人もあるにといふ
身をもちて、まへども、さひぐまほしくの絵はしも
くるしあればさするにしよかくいはんへとさひのあ 孟 薫のこゝろ
へ身ゆゑなんへも哀なる父のおもひてかなしく 大君へおもひとなりてもとて哀とちぎりけん 一説薫の詞
しるしうも仏さまや心々給へまへ 細 その女のおもひなく
ぞよきこしとせんしまれば、月にかれはべらや 大君の詞也

くるわいひとかくいはんにもかくいはれいるしかし
いひ出しかつかなし。哀なるよりいたく絶しかなべくもあるに
うあらんあらしよりはるかにしきにさ[illegible]
おもふを胸つぶれて、薫あればいかゞすべきそ
しる川のうへとゆきて給ふかうしもそえ[illegible]
えんとすらしあるかりなん給ふよとて、いまう 大君の詞也
そうも哀なるけそひよ、うかひうらう、ちゞく 薫の心也
おもしろそうげさかまかくすりもよつれど 細 薫の思ひ給ふ也
ところておもひどされいいとう薫のおもひけ 薫の詞也
などうしろ給ひらう法をまもるはるかうつろし
おりかうとこそさかり給ふまことしきたく。
さるべき所によりいろいろしまらんかずしやすし
よそに、阿闍梨にも法行ふをもなりるべく

此君のいとしもなき人
三 薫の詞也人の心のうちの
女房よりつらくはつらき
事なりけり
うちの渡り事ひかたきせ
ば有らん　三 白文乃
ありさまよりとて也

文ハかくよ　抄 白文
此の君の御事を世
られける
くちをしき事もそへを
きこえける　抄 白文
御ものまうて

の御ためこそ世のおぼえの程よりもいと（細 薫の院の御事也）
人のいつくしき人かしづかれたるへく
ひとへにいかなることのかしこきによりて
の宮の御おぼえめでたきぞと思はれて
ことはりにもかなしきもの（三 夕霧の左の大臣）
殿の姫君をとらんなとにおもふべかる（細 此君の人の家… 師 夕霧の大臣…）
と女宮は年月の頃いそがれ給へばそこ（年内に玄君…）
ゆるされてそのにかなはめもなく
なり又ハおほかたに思ひ給へる（白文之）
みとうちすまさりけるほどにといふ（内裏）
あさくもみじきいのちはまたあり河（細 薫 孟 薫の君の右具）
せ給ふべくもあらずなりけり殿

うちよりくりかへしのゝ
抄 薫の此の御心ひとのかず
と人に聞こえとく　細
めともあやよ
人の御はうく　孟 かと也
なのらく　師 此人の心く
かりつらも姫君の不
運まかれるかへし世
おのが姫君説云々
こそいひつれ　細 名によ
給つとて給ふ宮の人給
く師 彼薫の御の人の
こよ女房の又人とり
さりしく

中納言あるの御方を
三 薫ふ情りあひてかば
うらもとかくかく笑
のゝよし云薫の心のまゝ
をもり病のそりしく

あやしき人は似給はぬ心ばへなりおほへ
しをしてみそめやすけれのへだてよ
うちとけ給のさまいみじくおもほすにかける
けにまめやかなる人のおなしことをそさ
こそひゝつれ人どの中なてなるを（師 姫君の心の給ふ也）
きこえふみもいとゞむまうくて今宵
またことあるれやひとしおすさまじさ
なり給ひぬ程のなさけの心すさびより
くまて御覧じらんをさすかに中納言あやし
の御とも所願ありてことのはしなくさり
かゝるすかりと思ひわすれよさきらく（孟 白文のつゝきなりしとをさそく）
と人の心つらきはことにいてゞ身

きさらぎや御わかれそねなきかな
御大君の人々のあかん
ほども(?)あはれとてきこえねなき
海まそしねまへてく
姫君御とかの物かなし
細 とかくふ山の御やかれい
さわらにて物ても御覧
けの君さいなかり
あかりこそ末人世の人こと
世やのつらうしとのもこと
御くや出ひ出して道給
師 上の細まうて山の法
さは海しうつり御秋を
よくいそり八宮のところ
うかんとりそてあとく
わたりまふらしの道之
とおひ御まて 三月前

孟 八宮ハ悪居ふて御かさゆ
しにとく参り給こと
三 大君のかうを大君の
御りにこしさうしも佛法は
へいら後世をおひたひ
しんまれたし

のやう前なるこゝろなつておもはれかしまへ人
孟 执の中よりやうのうちとうてあ君の心く
つましさはいかにいとゞ世よりもまさりて海
彼老房のかうすんと出そて人々と大君の心く
おべしと見えてぞりしけるかくぞまへ
あしれど出りつゝんところゝゝしきれば
孟 中君の心く 嘆同
きぬやうにかくねまへると姫君物を時々
わびしく出しうちね海のうちらう
さげそてもひる法まらしきふくねまゝるま
法ぞしのさまりさり給なとおもかゞきまる
孟 大君の中君のねまふとらん心りのあく
うげうる法にもやうつく出やのうさめしま
のそうもなくとひ出されなそくうしされば
つきふうちうそことまへまとおもつゝと給ひ
ゆづるかもしくおさしんゝきよしんへまそ
よふうしうそじく物おもふ男どもとそこらう
まそ
接ゆそて菜みづまさえ給あぬうとおひ
つげすみ人笛の君の気とかとやそく
時々くまの名さ吹たまふ風法音法と
さくらんうらくうしさひさ紀御ひつ
三 大君の心も之
なられとおひかある海おそて限あまし
給ひあらさ法そよりいけつらしとも之給き
ひ明ども人かれど海よふとちらすくうちや
それく明けよともかそこまゝも
られゝ明けふとてかそこまゝも
う御めしさ海まりてなすかつてしまへ
孟 大君のさ御之
分まゝひさいつさの明じとさうしらん人
細 中君之
よさせりほしひなねのさふ風のひとわ

らきよぞろつきれて、おほさあがひなしや
まづきうしを文るし花やうるさ
孟中表の寝殿のさま之
よ。れいうれんしゝきうりつそ給へ
らんやうよ。いとしおりしもれぐらうして。
いくく物おもへこそ[illegible]をもたまへらんと
細 中表の哀之
の哀はこし[illegible]まつる。いとし物思[illegible]
てんわくりまさも月のめくさまてれとも
つましまくれバいてしもく物[illegible]
細 太液の詞之
せまそ後ハそで哀子をもはすらんと
さしまてそもきねそておそ所なき
いとじうあさき給。此明書をいひたまれバ
太液のなし
月のめさしわやゆかしんバいそでかつそ

雨に霧あらんつゝかげわたりつゝ給ひて
とのられ世をまへおひやるを給ふ人の[illegible]
あり人ある香の煙ぞいとえまゆかりし
細 あせさきのこと
おいしくらうけに給はこゝやうそれ、彼あり、
細 河海にもちらなる意之
おりハすうし物おもひすぐさく
孟 白文より
てくとみとこ給へずる代の心と
細 太液の古訓なる哀之
みいふるさ海にゆかしき人へうでもしる
かうしも所のみえ、これはうち給ひしかつ
孟 白氏文より
まりそあしゆらん人りやもらんとう人
めくる代まれみも没人のおひもらてし給
白氏文集
りんよさゆかりあかまうしさんつ人へ
えあしともへバつりきさみかしさへの

つかつけうつゝなくとも
孟 なくらはおもひやりてん
後世もおもひやりてこそ
人の魂をかへすはんごんかうの煙ぞ
細 反魂香の事也 河花
帳深夜悄々反魂香 反魂
夫人之魂ハ夫人之魂在何
許 香煙引到焚香処
白氏文集 此詩ハ李夫人ゟ也
てのち漢武帝甘泉殿
のうちにみすをたれて香をたきと書之
く方士ヲシテ霊薬ヲ合
せしめて金炉にたきけるに
ハ香の煙のうちに夫人の姿
見えしとなり 十洲記云
聚窟洲在西海中申未
地上有大樹与楓木相
似花葉香聞数百里
名為反魂樹死者在
地聞香気乃活
まぼろしのありかをまどはしき
細 玉のありかを白氏の李夫人の
かるとの人のまぼろしはまことに
との人のまぼろしくらう

らう人は君あかしくく
うきうりあれて片時もさ
まうしと
孟 八文のうくれあひ給
をくやうまゆりひつれを
すとくし
あもとうつね 細 文君のま
〻中君ゆへこそ命をを
しくれとも河さわたまう
ねまうまむしとくれぬ
ゆりのかふ八人こそうま
うわくれ
よう〻あゆしさ 晃 中君
ゆへてしとおしくれとまり
河岩くて今山井のあを
ひまくひあかざくずてあ
ゆーさいのらととしー
そに不初相武七引さ之品祖
しあとげり之
さうもりハ 細 今日けは時あ
そいうきれてやくくさ
へかうさまく系つ弦え
師りむひれまか八中君も

出仕りとゆのしまへハどくしさんと絵行しうう
こそいとうじう行れといつくく月をひきい
出絵くぐうりあれバ片時をしとまくじと言ひ
しうどなげくうつわざ故なりしと言ひ給ふ
そやおもきつねよのさすがなるげりしこさ
を雅りしわゆしさ 命はよろへしてそ悲わとられ
かくまりらせて絵れいのこ角やうりう
さまそ
孟 白君 なずむしろハ悲みじ雲ゐといふされども悲しかう
なき絵をあつ時あぞう〻袖ひつうなりといふをと
りやありきんうしるれかうさう絵ありうじく

ゆくそうくうはは何しそうくしなけつうさう〻さの時あそうくく
く袖ひつう 細 川分絵けへり花弥生月いつも時あそ猿しりじく神ひつう訪へ
さうりさ
絵あくじこくえうつよ
らんしれにそ支あよわざそそのこと
三 白 さうり世まよきうてき
細 白文まよ八人のたびひるや
まうさこするへしまえ
さえくんノ悲さ
へさうえし悲わき之人ハ
まもおもへ さうとく
細 中君
ゆえうこまひまうりうえ
新 白文の佃俄のと夜
ゆえ系つしんとくし

孟 晃 うぶおんようハまのうえ 師 さして恋はなきま〻ぐるさうぶあ
三 白のまし好色とそのうへよぶそ命ふとりふまり
絵ざんうり世まよあうでてさけ名之猿りうら
とどいうくそ人へよめでられんとこのまし
くえんよめてすしまのうれバ 中君 まいうさく 見うさ人のこ
あつうをせなまり絵えんをことつりまり 中心 猿ふ
ありまつげそをてひしうさえうり系を詔まよ
でなともさあしとさうるもいてうくてうや
まじとぞひるまそえぞつるのよそひうる
之う
佃あと夜系りるんとこそあれバこれうれ
そぐのりこそ母れだとうてひとこえるん

あられふる　細 郭ふりハ
時節をいふ山里ハ冬深
きゆゑといふ深山ゟハ
霰ふるといふ山ゟ海
よ紀のきる夕めつけにかり
のものあり　孟 秋よまさそ
おもしろきなどと云やれど
え　花 霰ふるミ山の里
の儀しきさハ ―
きうりぬわくなるのをとるよ
細 大君の大忌よりせさく
うけり　奥入 湊ゟのあゝ
小舟さりぬわきまりねふ
人よわかるにつれ　花 ぬかきと
八十一月 新嘗會 祭に大忌
小忌と家々よつきそい
ふるまつりぞそ大君の亭と
まさす。帝より大君ハ中
の世九日よ帰るさき年八
十三日の世九日之 新嘗会
八中卯の日之
みるるう人とと見ゆるかて
ても　三 かゝることの人とて
ひまあるしき　細 山里人を
くるまさ法のかすゞきち
ゆうつく
秋さゝのへんやそなたにたらし
と　三 大の君ゆかぬかりの
中もくしき流ろしかき
さめられてそのかよ出親せ
ゆかれ 北人のへいわれとそ
ぬもくしもそうのまかう
ろく是く少君をとりの給
食事の沙汰しめし
いとかへくみかしゆかえつ
おきく書きう給かん
孟 薫の曲るくゆぬひて自へ
不言之　帥 薫の中より
ゆ今されて親みくしあい
るく中将と給ゝく日文
へもまかり給へゝでき
三 薫の服立んして
自へ此事あり

逝中君

あられふる深山の里ハ朝夕にながむる
空もかきくらしつゝ。かくいふて神無月のご
ろなりける。月なくしぐらぬめれ（白の紀之 孟 夕まぐれと云ひて月へだつさ）
あはれなるかずかずれてと夜くらもが
つきせずつくとながめて大君に
くいぞもうの年のくらしゝも
めりしくまじれどもふかくけざしきとも
れども宮人（宇治よ之）おさへらしたまへど
ある人と云ふにつけても物へ
まかる事しおりあれの大臣殿のかくる（夕霧左大臣のよし）
（細 匂宮中君之）こと本文も秋さるのどやうなる事にうつ

以ゆるけ給て。その後うちの絡みのうち
がさりし人おほくものへまかりていとおし（白文の御之志のく）
すそいすしまうへくなしまんへ。人しさかりくらす
すこつやらるぞ中をし（細中の君之）あらすすて。中もしかり
（子細侍らんと）せすみつきめはいいかくりきさんなすまし。かく
つうさめはいいかくりきさんなすまし。中将ぞと
（浦石と宇治よへ志らむるよし）かへとおき給ひすへ月日よそくて物をかく
（細 薫も白文と見ゆ）中将そ。中納言をとまし給ゆりいからびえ
はかり。親さうとときいひやりくしけるもいるれ
しかしかくつゝ（細 薫より宇治へ同給之帥 大君の物ひとし）つきもくまれり給て
びし山ごとしみけいうるくとうちくひやうて給
（北十二月なるへし）この月となりてはぞとものしたるすそおそれ
（義ゐ家の服はかるへし）とまる給ゆるよ物月やけまさるつ。そのさへうし
さうらまそむる日人をさそまり給わね

まわつへをとさとりつて
吉子出まて
孟辛儀わつまでせをる
んと蕪くかまひしを
よるり

そこそうとりてさ玄をと
ある
三 弁ゟ素句大
素の形ひまふさ海をぅ
ちゝへりし

よいろすんとらち地どろわれてよりるさ
こらの志げら紙しらこてしおらで絵出法（おかたまげらちて素の字浩（又すひすっ））
いをとちうとそ絵までとの絵ひ孟ろうをよ
ろえて婦よけりとそ。おさりをまし絵は
れバげし人むくあすふく。例のおいゞ人いそこそ（弁し）
法ゟ絵の面。そこりうしいつきとろわする（弁句）
おどろくしつしね法すやをよ。拙とるん文
まうらしめさぬ。もとろ人み絵いぞ。わ
えうよおり、まするよこの文は法くお（細白のいよひまる）
来みしのち。りてぐ拙み行しうさ歯まてなり
すさ法そで拙ぞをまはらんじいれさりし絵
里あわいのきさかりしてさくあうちそ

あまらかくるるつけるえ
きらはら 孟 あどらこ
れらどの法形しまるせる
そぬとえ 三 蕪つ地ど
ろさての句と

よさのしべくつもえて絵とをずす。世まへう
給ろう身の余れるぞくさみくいろ事をと
なれバ先へゆくぐさ紀ぞらさてるんと心（まろ）
まへいりて給とひひをやらどとすく雨と
りわりおどりかくとも告絵ぞうせ（蕪の句と）
流みも固みをおさまうら筆志げきこ（つけ）
まそ。月ぢもえ楽のしざりつつ地用つろるさ（細井よ入絵て面と）
とそおりしうさよ入絵。法桃りもちろくて（大君のよりまつるのまく）
拙まつてしまへど法し点とるすをやうまて（おゝ君のよろさき向く）
えいくへ絵そひぐくとりくるり絵まそ形（三 蕪の句と）
もく告て酒つぞりろうぐつくうをふはり（つけ）
ひるさてしくうさて。例のすぞり地（孟宇浩の河因紀かく）

まいのわたさみしゆかし
いつと慈を思さすまつてを
るさま、おりしかせとのしく
慈は湯つけなとしまは
らせんとすれと大君の
御あつらひくてとそく
慈のそはまうおつそとく

此所なるくと 孟 大君と慈
八宮中はかりそなすれまさ
まりじきてこゝみ抄りしり

うき世にとまりしありと心とめたる人のうさあり、あ
まさそうじ経は仏法僧経おのく円より
うじめさせ給ふとて、よのつねのあさし系 慈の系乃法ながの人々く
まつどひあへるの人々さらさるゝれば心
がそさの名残おほくゝのりしげなる鶯ぬれ
ば、山のおもさむしゝくて、はゆづけなど おお じくとおのけさるゝらんし
ゐのきみなども、れどもちりそしけるにはなん
とて南のひさしは僧の座なれば、むかし地も
ての今とくしげうさうくて、屏風などそ 孟 慈く
さそへてゐりある経中の君くるしとおぼ 孟 慈の近うさあるとく
しくれどはながきをりとそなるれ給
りたるさりなりし、これなのひてくらくとなるそ

こゝやりたるしめく
細 心細よおもふ月よりと
給ひしまるへしとて
たえかくいつり

まるしまてうりいって
拾 大君のね覚えるの恨の
ゆへく

ありかちくて足元くそさ
やと 孟 慈は中心系
ことてうくておかうるかと

おしつゞてなめるぞ、そやまりさじめて、給
花経と不断にまかせ給ふ声ふりとうとうさく行り 細 山入からて
十二人ありくいとうとうし。夜へはすさの南れ
ぬ、のとりしておらへてくさま。承了して 慈の大君は九丁をとく
さあげくさてしまひり入くさこそまつり
まへはおいどもとも二三人ぞしさくぬ。夜の気
いよとうされ給めれど、いとくもへなすま。 太君のく
にばそくそまるをとるどもり念ぞ
まさう世給をぬことはなきとくして地ど 拾 慈の御
ふしきそしまへばいらのに覚えてならうを 細 大君の御
ののふかいとこうしくてゝ夜んもじ高つれ給え
ざりつれば地伺つゝくてもおもりぬへさに

もひさうとは君のかゝる
師 雅意の口まことのまへ
のをぢはさ窓かゝく
かうしらく
さらりもよくことは 弄さく
まろうにこよくとかもる
く歌之師さらすめでとし
何のことまうほんちかゝ
ようぬでうるとあり
て人の歌をきたる男
こそやうの紙もあゝ
何のことそしくるまる
ほんちぞやとく花にて
りの外よられへてやて
しが言ひてあらぬ何乃
ことそも

やどらうおもしろく侍られどいときの志ごさ
よのすくいくまゝれおすらう結まく主り（細 薫の心へ 孟 薫の御心）
こさりけりてさくらもうくとるまさ給（細 温之 師 大君の熱気のさ病く）
ふはかりするともあはくぞおりしはらず
よのつとるすはてうらよ人のおもげさせて（細 薫の詞也）
こそうくいおんるれとはこくまさしあて
物などおりくさこへまへばうさうもおはし（大君の心）
うとおりしてかやせよくさへきまてうにもぞ
あよくとおもうあもしまゐるとも（孟 薫心）
しうをおしていうるすうろきんと胸に
ひきさくおほせ御ゆめ山とすうまへてんれ（つくわきくるろ也）（細 中君へ薫の御詞）
しやそうしんぐおりされつらんと

やそうしくておりきれつらん
此は大君の依り中君
八薫の居給してをきさ
んはつらとおせるてなく

うくつやましくくらやましとおもせまへとのおん人さ
かくなべしとやしそへばうむうめきなれ（中君の心）
どさうやうこそりておりしてむらし志ぞ（細 薫のかくいへる）
さまつらひさおりて小はあしるどいへよ
つらつことなりすへばいとうろしくえぞし（三 大君の心）
それどうらべき歎きしてはおりうあとれ（薫のるすをおりとく）
おしくごてよるのゝのどやうまうしうやまと（細 白文よそひくるくかれぞし）
さはなきどのうさつさの人よさうくへさ
てまへばおそれととひきくれよさう世
すしく恨るん泪のさひ出あとうらへごえ（薫の詠うてそひるすきやうよいおもしてと）
くさひぐ海ありしとつくしをそてり
まへとえとしそあら給ひて奥りもと（薫の今よおりせ）

るかりくるあらひとゝ
とゝこよ　俳　法華経を十
二人ていて一時よかり
よりもむ之君うる為の
くすやうすうをとうと
きとうて

日は大君は西湯ちてまゝりて世給く
がしんせそでのしゝく。法ゆるがしきりて世ゆ
まよへど。露給で　いう気多色まれし。い　差
の心ゆう
こゞのまぶや。いふかして久りけゝしむべきとて。
いかんとさるく見ひおなつり。不断経のあう
月ごろのおもかりいふこゝ恋のいとくらう見る
夜居の僧とそうる作そ行念あどすると
よ。あさりをしまゐよさうふくして　ねよりさう。
花さきて立色のうれさうえ
ずかゞろうきそしぶくしよましむ。おいかれなうくれ
細功の文なうえ
あさらの色之
ど。いとしらうづらそしよのすしゆすの。いうゞ
と秋を　おりしましつうんあでゞとてゆらつい
細あさうなり
ぐよ。あなめの消しもとなごゆらし出くぶれを
八字生所とこし
ぶくうらうとして。いうるゆえしろよおもし
信ありも仏居よ入まへ六経ふあおしせよとし
まけし人かりしとと　添しきりとしまれしとふ

ぞへくたれきてゞひて
おかまりの分際まきてとう
ひさうまうとき傷うるに唇
ひくなり
見ひるへえてうるす作りて
此八字の吊に常不軽の徳
給へしと見ひゆうゝ所の
ことゝなるべし
常不軽をとつゝせし
細つゝせと、へ礼拝のこと
丞額はくとゝふんなり

やりまりうどさつくろの為のゆるんちしおりし
ヌ世中とよ八字の始めひしまり
あしぞくの吹いうらかく。世中をしふかり
と寂の給
いふへんそそれししば。こゝろとゆかりとあかり
郷君達のうゆよまとひまふとうや
しいど。いうさくゆずきひいしまよゝぶれてゐん。
うご志かし　ねがひのそこりをんぶうれうな
ゆすふるん。うとくや志　さぞくしりわざせよ
といとしさびうよ地獄きくれしどうらすら
よつくろまろでさこの光て待くねでゝく
細弥陀の称名念仏のこと
さうよ志てさうびて。そとゝるひし待ろ。法しもん
ちる六人しく　るゆりしの念仏あんつくしま
おかうふとあう
つくせもへるぞそへあひまへえてらつし待て。
三宝のこと
常不軽をとるんつゝせ待らるとやすまよ宗

法華経不軽品云 我深敬汝等不敢軽慢所以者何 汝等皆行菩薩道当得作仏 只此因位に常不軽菩薩の時に此二十四字の偈をとなへて四衆を礼給し事なり 是ハ一切衆生の仏性ある故に如此する事なるにや 師 勝尾の勝如上人無言をおこなひ給ふ二十年 又常不軽を行ひ十六万七千六百家へ至る 家ことに必男女を拝しておはしけるとかや をうじふに法師だつを前にまして出給とぞせし

もいみじうなき給ふ。かの世にさへさまたげ

三 是より大君の心中也

きこゆらん罪のほどを、くるしき心ちにも

いとゞきえ入ぬばかりおぼえ給ふ。いかで、かのまだ

さだまり給はざらんさきにまうでゝ、おなじ所に

お 大君也

もときゝふし給へり。あざりはことずくなに

てたちぬ。この常不軽、そのわたりの

里〳〵京までありきけるを、暁の嵐

にわびて、あざりのさぶらふあたりをたづね

て、中門のもとにゐて、いとたふとくつく

みちにて全まり給ひてんなき〳〵ん 細 中陰よりは浄土に往生とし 是三有と云ハ本有中有生有とて中有と云ハ中有のあひだをいふなり 孟 中有に迷ひて日本より往生の事大君のみまかりし この常不軽のとまりの里 お 此をとゝむとてなしの里く 不軽菩薩の事なり 二十四字の文を唱て

回向のすゑつかたの心ばへいとあはれ

細 我深敬汝等不敢軽慢等の文なるべし 回向

なり。まらうども、こなたにすゝみたる御心にて

細 薫の仏法に心ざし深き事

あはれしのばれ給はず。中の宮をおもひやら

[illegible]

[illegible]

[illegible]

細 薫中君をも思し給へし

給ひつや。おもゝしき道にはおこなは

ぬことなれど、たふとくこそありけれとて

薫

しもさゆる汀のちどりうちわびてなく

ねかなしきあさぼらけかな

細 白楽天に薫を似せて云 孟 中君の心也

きこえ給ふ。つれなき人の御けはひにかよひて

思ひよそへらるれど、いらへにくゝて弁して

三 中君の大君を思ひかへりみ給ふ事なり

細 師 其中君の声 不軽の声を聞てなき給ふ事 法の声の如く聞ゆる事の…

新之師といふ字は被暁のおもしに仿てとあり洞をたがひてさく〳〵しるし乗の三夜川
先生のみ宮のすしらずを見あらせそく寺の所に不悟の了念とよみるまゝえて〳〵あり
あるさの　紅梅ぞ八分ばえ
中君といふらのことは日暗
これハうらぬれハうつり
細斎が勝しうるゝ孟斎が
よりつえて中君の名し
をよしを似付なるつるを
おかしきしくゆるみそを
細故文のあし。孟八文あ

くぞきこえ〳〵けふ

中

あり月の霜としえ〳〵ひすくみる独ぞふ
人のこゝろをやまさぞ。ゆうつりうるあのれいつり
細中君大君の事を
なれどゆへすらしばさえてしるれうかやこつるゝる
そう師　薫の大君のことをおもひそめ八月
はすしともづまるしげるゝりのうしろるもるひし
うりひあらこ梅よとりるしし縮りのをや生ほ
とそ別るゝハいるゝらゝをんとをひゆうどもひ
細　薫のことは
姉君なるのすゑ
縮えのの蒙よさ縮りんと夜ぶりしめそむる
まゝうんぐるし說れはる積ださとをあきまかけ
つるくもいてよさ縮人とはそれくれく
甲のこゝし
おりしまのしぐてしゆるいは涌泡とこうさ縮

治ひ身のうし　細薫之明多
うかつのしあふく
をつくして宝よみるもえ
明著八何が日よりふ職文を
養宝なる定よるてをせ。
孟職文とそあり
先親近
職文
詩職若干箇月
願依其意一要請般若
災難治病之人者
年月日　官位　名姓
然のつきめさしうるやかまひ
悪神のとがあるぞといふも
あくのやまひをわでも祭
て後るゞの志るしらきさ
とのるゝ
えづりしと　孟　大君も亡後
あくんをとく念しおくそで
くうかつあぞよ何ともし
てをくうせるんとこそふとえ
いかはかそえるれへうさすり
おるゝたちりてうむ後
なぬらで薫を八宵さあらん

薫も八姉君の針く
所ぞよるいのりれつひ出しるそてさせらる
おるやけよもとをしらみをれいで夜のまの
しゆあそてもりつくいまろ何よいてゝぬ
しるすくまおへぞとりのつとめきさうゆや
まひなもあくぞりえれバあすまの志るしをこ
えぞ。こずりくるもらひてよあるんとおく
孟　薫のおもひ出ましまよ嘆
けとと念じ縮こそあるめ。石すなりう
やまひのまゝの事
こりそよいそてせるんこの君のくるひゐ
て。おるゝたりぬるとうまはりてこるゝれむ
さきずさりそてりうをろすしばこそめる
つるぞへのこくさとりしてもれも人まこ
えんぐるやまるしずうりるへきこしし命

るゝうらしく大君のみや
まうゐり
そのこゝろそるゝうさんと
もとくるまゑんくらべさ
まほねうどの志てしさえ
とのづくしくしくなり
手とありさんわくで
出家あでしてしゆそゑ
らくんぐしどりくもれ
てこそうかひよ絶ぬん
どもえゑろいかれとく
いふるんいとまうしあり
てハのうのつう
孟宿ひのとりさ附出家
されば令のづるおう
こ之花いむるハ受戒之
女の戒とうらいさいふひ
きゐの髪とえやしてさ
げ尻とうふ袖よあるどい
よそ

孟大君
志あてとまうしバやまひよこしとつけて。うこ
出家とやもせんとと
ら紙もへてんぞそのことしそるうさんとよう
うとゝまゝるゝ川べきりざるれどいひえてとゆそ。
細おやうのみ
とありまでとららめくまいりぞこの名ふして
へ1とと
志さんと覚もと紙さ海でさうしとてしへらん
大君の御こと
うち出給ぞて中のまうよららのいよくさ。
けりしげるくゞ母ゆる紙いむこるんいと
中君をとゞめ
志りしまぞて。令のふづらとく哭しくさやう
まあざりよのてさまんと哭しまんぞこれる
弁をうとうへし
ときはぞそて。いとあわまじさはすたり。
りうちゆかしまよふめる中納言殿もいっ
ぐあんるすさやうゐよいふひゆのし給ひんと。ゆげ

とこのえんく 細 辰の日之
河上月始の辰此日あり。苗
去く辰の二ツある時ハ中の
辰よあり。師 今年の稲
と神まさし世まて君
もこふ嘗呂群臣ゆヒ
あふせらるく

と云しそも催すり
多して 孟大君と中将
と世うしてさとくでこう

細 薫
るまさしくよいふひて。よのりしんへみえともつゞ。
大君の御こと
薫のこと
くらおしうゆかぞて。りくこめりねまうれバさく
おやつのえさと
つさ川くれとふつゝひよふりらへ袖し給ん
どあり。どろうるよ母されぬこくことなれば。
よのんへ志てし花けいしるまどいとのくするあ
のけいかうとをさせ欲ゆの色。とどのあるりハ
ゆぞうして。京ゆりひやつと給風いてうり吹て。雪
孟君の
のふうさ海あてしくうらあれゆよとぞやこゝよ
いのとうらしまあくしりうしと。へやつきすく
薫と大君の中の
どん渕そうてうとらそてやゝあへさうやと
そう髪いつくかれどうしびへうとあくむどきる
つしうらうさげるまいけすそてすしや。ゞ。志で

を例に違ふところ之所
ささかり　細　五節の節
會なれど、あさゆふのかづら
をかけたるなれどもかくる
孟　文治に餝りおかるゝん
之日蔭の糸にそへて
花　新嘗會豊明節會
に小忌をきたる人日かげの
かづらといふ物を冠り
くろき日蔭（ヒカゲ）鬘（カツラ）とぞいさ
ぐりこはけともいふ糸ぞそ
しもとひてかくるへ日かげ
あまにくずかのこ日かげ
をとりてかくるとも之日
幸紀第一にありこれ
にある事をとれり

しるそもれいかりなりしそれよりひかりこ
とだにうつくしげやかなるをひつけてあがら
めあか、ひかりもあすくてくれなそぬ〔細 夕霧のよみて〕
〔箋〕うささかり日かげをとこぬおく山よいとと
ちうをかくもちもしたるくもでなめれ、心もなくておとしむると〔葉の〕
そのことよきれおひさそくうり。例のちさき〔箋〕〔ふのきさ〕
方にねのまうるよき來するなど風のあくるに
かきるるをば中の君おくまいり給ひかくし
げなる人ども、うやまくられある絹よいと〔細 葉大君へ歌〕
ちからうりて、いかぬかえてうらよひひ〔孟 葉之〕
跡をとしらすく。字じ少の雨かりひるすく、清少と
じならられ物よるれば、いしてもそ憶しかれ

たえいてをよくうつり
あり　女のかたなどおも
いはんずるに西ましさと
とおぼえし　細
うつしき　ことある
きこまでにそれとなる
と太君の詞也

どうりしゆくかしこうしろしんどうすく
なくきこえ給ふ。あの君くとなりよりうさ御み〔細 大君へ〕
れと、母をばいとおぼくうちまかりいろなき
隣あるべきなしと御ぞまさりも侍れどいぐ
きこ入やうよの事なりゆくはかなさあるさま
ずまこそといひ衰しといひしまん孟氣色
なるよいかいくをささとくかくさへそゆくし〔晩 葉のかく〕
うらくろろかけけにおぼふとはえずじと
つつ給へど、息をあしあれど、いうるも癸
みぐくうりなくおひそそしあふくしうつくさ
こそかうで別なるべきさよめ、すくしくさ〔大君の容貌に雛あり〕
〔西とぞなる入世ありぐとぞ〕
さ御をとずるこせ給ふてるんかりひき御そふ

さんき地にもおくさめり
所存今あるさまにみゆ
きこえゆかしき
かうらひくしくるやうそて
おほくの見えし給ひて
くらひうちつかひて
うへにまをれかとし

しみきこえんとまゐれど いよいよ哀げなり（らうえいの心也）
うしろのかたはあゆき海のとみ[illegible]
あはれと思ふ給てかげのやうにはげ
なり物くるしきあひぬべく見ゆるかなし
げにおよびてたるきはぞどもとの[illegible]（やうやう）
ひかなきまよふとまでしやりてうち[illegible]（かうさ也）
を事さひわたる所をうんらしてはた
ぐしいひとりつもとおくぬ思ひよさん
やられさい、枕よりゆかうきへのつやしと（細 寺物みつからさま也）
めぐらうかりけなき いかに物語る人と
もろぞりとまいて物上に わりにありとこそ
かかしきうづひきうちさらひぎにくるみ

ひくんさせまてまうく人々そ
うの所るうと　孟 大ぞうなうら
へさせ下るんとぞ 薫の中
君のやうとおもし

やうそひさうとつくりぬけるひのなかとけ
むとうつしげに涙なりつうてうち海（りうか）
入ひとゆかりせきうて所海くのこころまく（薫の詞也 大ぞ）
よむ見るかと見川ありんをみし つるり（孟 薫の心）
のさまさ ぐうりあり薫をとうわかぎさとく
しら枕あてし世まこゝろをとをかべきふと（孟 薫の心）
おしなど 命もし涙ありてそれなべうとさしに（細 中君也 孟中）
くさ山よさすへすんとぞうづいとうろく
あらうそとゆう給へん所ぐ拾うれありひ[illegible]（君の御方と薫の詞也）
ゆうとつうへをさせまんとそのほとしとう
げすへ給く見らし給は袖ともりしひきう枕（大君の事也）（細 大君の御所 大君のえらうのうとの[illegible]）
しくうられうりう物給ひびう海なる
やうよゆかされうりつるもひなきれべこゝろ

まんまえくえしくは
薫の君の大君の中の君を嫁して
大君の事をとぞ思へ
しのびての事

きより給はんとかるがしくもひきこえて
まえしほのめしきこえしはよろしん給ちさ
らせしかぐらきろやをとしかしとこれのと
なんらめしきふりて、とまりめぐくれ
かしらずるとのまえくいづし給ちべさ
男女やおりろんいふもくこまは海まこの世
とおもひつゝふるさの給しぐらりれば此世も
ひけみおさうひきてもをすらむ今なん
なやおきらんぐらしとみがゆるされどとう
あのめくなるひさて給そるどうらん
ていとらまけむふてさえいは法のあらう
どしめしかれまむせさ海じはげんあつぞうし
てかね、ましむ世給紙もし仏をなる世給
しもくぶりなし世中よとし女はいつひ
くるれねにぞめ給仏なるとのいとうく
いろじさりのへおもを給もやあらんて
なまてよ梅のれゆくやりてい消つく
給ぬらへいうじきわざれひときいべきさ
方なくおしもあらもさ何べくへのるく
なしらんしも覚てぞぐらしりとこそ
つまひて中の君乃どそれどとありひま
どひまゆる海もこしうりるり、おりみも
おしぞこし給それいのやうし花女いづ今
そいとゆくえさゝくひきらけすら中納

まうれかしらかまみ
薫は世をいとひへくるれ
よしをくめすみ仏の方
役して熱くし熱しさ
ものこなりせまんやと薫
のらく
ぐらゆく花梅のかれゆく
やうして　君名てまあつ
いきあとと思ひく宮を地を
しあさく
かしそうもとろへく
歌の心の細なりと思ひなり
中の世梅もうりにみそ
らし女もなしわぶり
とうらおけるもらひ
なしさく行
今かいとゆくしきるをひ
こそけりて秋まろ
細中君と遊するる君中
君と二ふよりそりけ
よく

その君をうらみきこゆべくもあらず。
薫もさすがにたちとまりうけ
てすゞろによからぬ事とふかくねえん
あやしかりつるまろうとのけしきに
げにあやしうてまた。後くやしうけしいと
しものやうなるもことわざなりしうべ
ともかゝりし事どもいひまれてしもかう。
ぬぐひをしきやうにしてかきつゞきつかさ
ちかつしるしのうちにひとつよろしうか
うらしうことわりがたきまさりして
かの人どもゝしとなのあるまじきとゝもなりへさ
まさん。事こゝろを世中となどひしをうしろに

まことに世の中をとひ
たらんうゝ　師　かゝる世
の中をいとはしう思ひしも
ものゝうれはしくおもひなり

まこともとより世中と
いひ捨果て、執着をも
やすらかにしたる事
仏の方便なりと大君乃
死顔も見えそめ給ひける
事ゆへともみえそめて
くはしうまつりのおもよう

湖畔のさま御らんへし
さらば人々うちさて
師　さき六宮の御ゆくへのやう
まてもこゝろわざなるうし
めでとものいひしも念を
ひきうつにきこえんとの心の
あはれの御くさ山のけ
しきをうしみ川内の御
の前尾かりしのいうや
まつもとかひのまのれ給
ひを如何にも見えす
師　名のをみてもえさへ
そう煙のはかなきとき
へ煙のゆくへの行先の物語
は大君の御衣の中にうしろ
くりうへとふ給へり

あはれなるもいはむかたなきこのかみ
さもしきものぞかしとよろづにけさせまへ
しれと念じまへどいとゞ思ひのごめやさる
くのそあはれなりにひまなくてひきうるほ煙よ
かなしうてんとひ寄りてよく御
のきみのもとゝもふるそあさましうりけるを
わかなきにもうつらひしくぞうちしのびつゝ
湯をうけみて煙あまりなくもせを限
れ給ひけり如何にもあらざりしわざとなれて
あの給ぬなどにおりたり人ひとしかなりて
このみまさは世のうちまされなきれ中
の君は人のなかさへうれしくもはらさき身

大君の果
ちかう
の上く
送られ蓬莱のありさまもはかなき事
細　蓬の葉しるし人々
大君の元服のゆへ

まゐりしとそのかれハ煩ひの始なれバかくいふ也
人のうへをきゝし事をもかくいふ也
さひ雅てうらくせさせ給へ
みなさまへよそへていふ
細中君もかくのおもひより
なきさ人のやうにもそへていふ
しく
さもあはれなりし
さの給ふ事ハ中君に白き
のうへしひのそふ人によそへて
なげられしハ大君のつらしと
さひのうしろの給ふにたとへ
こゝろさしのほどもあひて大君
のくせさるゝやうに中君
の御ありさま

そのかたみにし給ふ
三大君の今はての時乃
ありしさま
ちゝの宮ハ身をとまり大君の
ハ中君のうへをすまひも人
しられハ薫のいハ大君の
ゆかりのかたみに思ひしとぞ
白き衣の藤のころもやひさ
ぜんぢ紙りのそてうら
ひさしく心ちとしと

濃きハあはれにそのとの
細薫と姫君とハ一夜の
契りとさだめし服衣と
夢路かぬとく孟本書よ
てあはれハ薫の服衣とき
ゆかりなく
紅は　細本書ふかくなき
あくまてふかく乃
きよらなるを御覧し

のみうさとおもひつゞくるに　中君の白き衣に又給へれなるに中なるに大君の
給ふまりも御とくらひにそのにもあらぬ給
ものをはりとおもひなしきこえつゝ　中君の　白き衣　細中君の
さらにおもひゆへしもて　飛　ある君のすく
をもわりなとおもひもすゝめ心地にかなしき
うき人のれゆゑかくも世のはかなき　のほどとけて
くさゆゑつゝくるに思ひしほどもあはれなれど　孟　薫の人をせんとおもひまよふ
三条の宮乃御はさんとすまらむとおほしたる薫の　三　中君の
とものかたらふにさひをそふれバ御あの　薫の母女三宮のこと
給しかさくわくしるしてまうでぐるなむ御ひとすぢな　大君の事に中君とも
そなたのことハ身をもさまをもいひふかくべく　飛　ある君の下心
ハ出むかしひとり給ふなり
わびしきはてもしらでつゝましきをかなし
よるのまゐりてあるをしりのとなりけるを
うちそれにまかせ給なむこゝろざしさ
ひとすぢにこまかなるに我世の人にもを
かなしれもひのまゝるにたとえもなき
ものまうでしたがひてひとりなるにて
て思ひても見るに七日の夜のこともあるに
ぐらくさせ給へるかなしき給はれけり　孟　本書の心にも
のべとほりかれハ心その色にそめて　宮をとむ
のみのかくしかせめてさしまつりの　大君の右につきて
みのさこのほかにかなしかり
いとかなきかな　薫
紅にうつろひたるもいとかなき給ふたる

あかつきけぬる
細 花鳥餘情下総 孟日
花 紅のきぬをうちかく
さうの事のやうにまぎる
るを下細よりしぬる
しるしとあやしう侍めす
とあつ畢竟して三なけ
ぬるをとけぬるといふ余
ありぬるを下総とけぬ
るもいまのとけてぬれ
くれなゐしぼれん
ぬらしたるといふ
こゞまをむかせ
中 君の句意にまかるあひ
人君いかゞよませ玉ひ
ぬれぬも涙あるかな
と思しめして

とそめぬるかりそらゆるしいろのこかりもけ
ぬるとこゆるといひぬるしそへつるゆゑ
給ふ御いひしか御かはしりきこげなりけりいへりの
ぞきこえつるすかりそいふかひなきこれいと侍べき
りのみくこのとおもくうくこゝろすくひとすらく。
世にましてよなひやうしんしそおもくしし
うち折しきれはずしひのかくるゝゆらくせんも
おもひかられかくかうさゞれくろの猪をとゞめさ
びくよそむりをきくるうしとするさおかつこれ
れうしふかは夢のなかくるを今いふまでことを
きえてうけ給つしんとあんまりいひまかりし
くちくゆかしへでかしなるしゆのしまへでじわ

こゝめきたとりつくおもひものを
孟 中君大やうなる辞へ
おもひなるらんのふそや
うすうらへ大君まで及へ
ぬてし
あたその月夜 おも注
孟 うらやの細流よなり
こゝろ
ましれまきあけて
河 遺愛寺鐘欹枕
聽 香爐峰雪撥簾
看 樂天
ひとりのたちの 河 山ちの入
れのうまれとてんとふ
もられぬてしらくぞある
しき 細 和歌ふまへりて

つのくしらきぬなりもりもしむ袖のこつゆし
くそでおぞ對面して袖さへもやつし給
ぞこの君いけざやうるちくくるよ今とし
こゆき。そくおもかへそりのしくあり
うかりひあららかさ夜ぞとぞりまへつと
ろくとまよあれく殊更雪のきさらし
あるじのぬのをもよぬるかくしして世の人の
をきた御おもさとまいあかあひをさの月夜
のくすりなくさしつざくうちかくされさあわ
げくきまへいびうひ君等の涛乃御なるへ
らかそぞしそく出めてもられぬしとされ
なとこてて

いつも面白し今日もとられ又今日もとられやむ心あるべし 花鳥説にいはく 孟日
師 夕月夜よみてとられやむ銘にかく姫君の世にそへつれづれとこもり給ふのあはれをおも
ひつけ給ふ。上旬よりひるよりまろくめぐらしくくき
どれほどと雪の月を
孟 蕉の前く自面にて
きこえたり 師 大君と月
よそへて秋もどれほど
と云ふ心なく下句へと
てとゞまるべき此世
かくれて月のさむ縁語
しそらかん
うきの山はくらきとらんあり
孟 此辺面白しや字治に二
人有そうり其季に四暑
山の後とらん月影に
汀のおいてしうりしろ
さく夜深しられても志
とゞめかうさぬさきれり
く又別の方よりみ雪
丸 師 風のそくさるよ
志らくゆかさせありくれ
あさくひらく四方山汀など
えまみさ留りや

蕉
どれほどと雪の月見あかれ給はすむ
べき此の世なるらむ。風のいとしくげしきくれ
だにしとゞまるさせ給ふ。四方の山乃らじらみ
とゞゆる汀の氷。月うげまいでおりぬ
蕉ん
京の家乃うぐりすくとどくもえうら
いあしたもやと思月ゆかづるいつき出て
りのを給いまゐらば。ゆゑとよきて、ま
しとそひつらむぞ。胸より あまりなく
らもる
蕉一
哀とびくかあらくさらのの序しさまま

孟日
あるべき偈 細 諸行無常
の偈のうへ、意のをしへ此
世は給とよみ給へる縁と
云阿含経 又涅槃経ニ説ス
是の因位ニ雪山童子と
いひし時、まさに又法に
法を求めけるに諸行無常
常是生滅法といふ半偈
の二句ハ鬼ひて
かくといふハ童子何
とか食せんと問に血肉を
食せんといふ。童子我身を
あたへんまの二句をきくの
生滅滅已寂滅為
楽と唱へけり。童子石
壁に書付て谷に身を投
のうく鬼の口より蓮
華を出して童子をう
けのせけり。鬼は帝釈
天なり 師
むまくてゆき

雪の山にや給をけるよし。あるべきの偈をも
へん鬼もがれ。こしはけて身をもなげん
と思ひそぞ心ぐるしきことひだりうてあるり
ひろんくぢもう呼出まで法物終るまでをさせ
給けるひるまでのいとあはれ月しうの
やうよ心あるさとゞこもりんぐ。わかきいとろ
細 老如みるいつも
よきあて思ひくうしとおぼすめ。おいつろへく
老人となるのを
らいしといつさらし我いとび知らしとれこう
君のうちと按给
細 白
ちのむりくうせ給こともも。さむ此ふ乃
ゆとは古するよ我くもろりてる面ひ
くい人りくりいつらしと思覚えありし

こゝろうけ道八飛法よこゝろけく身をうけたるやしはつかなれは[illegible]
れくさうすさたん[illegible]そ[illegible] 細 [illegible]
[illegible]
[illegible]のおち方
細 中君は此事を[illegible]
[illegible]せをもらしとて大
君の[illegible] 孟 大君の
中君に[illegible]のひめひしと

とゞすゞりよりの[illegible]れ
なくしとうで[illegible]世を[illegible]
給ひりし[illegible]物とも
さうしかしいれど。しづ[illegible]せ
給ひりしげ[illegible]
物がらげよそなさせ 給[illegible]
んのまぎらすなりよ[illegible]
まこ文の法いましめ[illegible] 孟 中文のすと大君の[illegible]
■おはする人の[illegible]
せしなりとゆめて。おりくよの[illegible]
しるべくりいで給ひ[illegible]

何人[illegible]
[illegible]山[illegible]
[illegible]
[illegible]

こしつさきずゞげ[illegible]
こゝ[illegible]
おもくらぶくの世をつくさ[illegible]
と義よ[illegible]
よ。まぐ[illegible]の雲れ[illegible]
げすゞよ。人[illegible]
と[illegible]人々[illegible]中よ[illegible]
[illegible]
法[illegible]
[illegible]
ひく中納言[illegible]
びく[illegible]

日比のつきさも中々ぞかれぬ
つきさ　抄　白の法事語切乃
法ふ之の日比の法住き
の根元と見め人へうく
やぞくえさぎされあそす
抄　大君ねせの法よ白氏の出
細の絶切るしるを又世之
ぶじしと曲し と中君の本之
今より後の　細　白氏の心
後あくとし根あるも
しく見え白氏の今よ
日後をひ見とものふとも
故姫君の御のよへさあう
わそくひうもくへ中君
たもひ給し

どれの事より折々とき
こゆる法げりひ　中君かよへ
おぼりけれひの白氏乃
わしらへさらえしんらし
しく白氏の出る

さふは法めともそて
抄　内裏よりくせきえ
んかすとしてき

絳なく見えて遠一夜一夜ゆきさよめかしい
されにくぞおぼしけり。白氏のつくりさせる詩
ぎれぬべき頃すれど、對面も語るべきにしら
ときにぞ思しうかけさせしかうの世のつらうし（細　大君の法事のとくほかごをゆひしきこと）
うりしを。やがてくてあるばされ給へどもきりに
しも今より後のあはれさわかしくさまりあんいへ
うれしかるべくぞひきそて物きらくれど、御前を（女房達）
くいてしもきりゆうしきりとえてしもせて（毎くして物ごしよ中君對面ありぬべし）
物ごしかくぞ日比のとくいくりつきせしむ乃（白氏の詩すこし）
語どつくしとゆるまつるにれどいとあるる（中君の哭居の如く　孟　中君の御く）
みをさうかしくとられ給ふしらずやときさし
ゆかりけげもひのんぐろしさえんめぐく

ころすくさきせうなろ
抄　白氏の心深さきうし
中君へ入して見えし
すか紙も
かうく　細　勤番之表九紹
第本巻す根とふ宮き
るすとなし年く見へ細ま
あつ孟問師なくうるね
さ御よしそ根語ゆめと
のうへの宗室よらう
むかりんかし座もふく
うしねさ御よりきめる
さとりふてよぞにけるうり
ふうあうことまくえらぬ

いとゞしく見えまさりしきりかおは八月のもよほして（白く）
くちをしきこと多物ぞこてもとつくくま（抄　白氏と）
びたりど今もうし物見ゆる頃まで給ふべ（中君の御くとか物覚えて對面せんとく）
とのみ覚しまでづれなき御中納言もまけ（細　若の頃へ師）
しきてしまてさるべき人めしておこなはせ（今して中君へ給し）
さ御よしなんとひくうらわさとはとれなから法（白氏の法ありまむよきびひて）
りくなしの昔も今をもかくうかる月ご（師　大君の生きしの世く世まつ後の人をとうり）
ろのうつをさをひきてまひあるべきことあ
れどかくうつしぬさ御よりそ。かうつく人々
語もあうかたらしとなくとまるこそしぬれ
かくそでうへしうきびはしくおもじ。妹びく（さうしくあつひきまきと）
さしかまへぐ。ほかく此君の法もまた門（細　中君の心く　細　著之　孟　中君の著の中に）

細「ぐん/\は後ろからうす
手ぶら。白文は[illegible]ご智
もさらんへ多かも七と音
此方らしま[illegible]
細 白文のらく拗り来
うらひしとく。自然のとぶ
えとへんまはけのまじれ
しいらく拗り絹しと
人やりまりしれ[illegible]けきう
まうるもさそそうして
白文れかうき面と中君のさ
もぶれ衰と[illegible]のそ[illegible]
うしにてとし
細 ちうひつる
うくのやーろ
てのおやさまか[illegible]
ふくのやーろもみずされ
ねへん
粉中君の白とおひまう
えうとえん[illegible]
れぬへし

付そ れかろうしとえ
しうそ。え呼く絹とす。おさおしうらろ
うくおりやら呼くしさ面ともしけまわ
もれ絹ろうこく。どうつうすしもですげさく
うしまへりがうの気色いとどえげしさ風
のまよ。人やらまうしれなずげき。わーよへるも
さすうふく。例の物へですそうて絹らがろ
やぶろとひきうけくもりきれなかやくて銭数
きそて絹もいうぶくくらるれ絹れんとん
うきんどしてそそつれなき経のうとすさ
いら。衰よ。人のんとさとやぶるべきほさ面
銭ひとくるもえうととくもつまじうも
ゆるしとそでくぐしと呼す絹く

うらへしうそ[illegible]
るふし方まそ[illegible]さの
うまえなうろとえ師い
まで[illegible]
[illegible]
中くらふせう [illegible]
[illegible]
けれどれへれりやせ[illegible]
[illegible]

きしりくうそとおひ出りもちろるき銭引まう
けてまるよのむらんど絹のまよの絹中ら下
せうりくろいりるるて
り来銭らじうぐき拗ともひるすばりのまへまよ
ぶるをそむうぐしくろん[illegible]
ほどるき世とつさふうく[illegible]
まろけまうしらん[illegible]
くらんとそどり絹よなら。人のまらんまい
とへまらくそてなすげさあてし絹らしとへも
とうろろうほどなれどあまりまへまくて
りとつてくき深の[illegible]つれいまして[illegible]
つへんとふ[illegible]

しかしていたづら女乃
みなひとつらんと中君の
こゝろとゞめつらんまでも
中納言のおもしろさにも
白菊の心とおほよ中納言も
さしも哭かれてきみへさき
人めも出でまゐらせし
何よりも出来まゐらせし

言のおもしろさにもまれて人々や世を
らうよびつゝ人にもあまさしてぞりの
身ひとせる迄も給ひしとあもれなるとおもしろう
を惜しんでいとゞいとうやとあはさされど
細 菫の言ちとさまざく枕をともひされどもいづくしとも給ひ 白の守
細 白の守ひまつて 孟 白菊の君の心をさく まやうよとつくひ給ひおもしろさ海などいひ
白菊よ　てそ心さあそと きこしすれどもの言よてそいはしめとも
打ぞんよつけてもいとこころまゐくらる
しくさなまんよそぐりてしてくらく
白む 望ねとのさるさそ目もき無よ言れば目 孟 菫之
かきりの言てろもこゞりしくいあうでは
いよりのさうげよろのまめつてうかとや女ら

女ろうさ 細 白菊身勿
めうのたぐひもとなきまぐしきく中君の心と
うらめしくも思ふまでく
孟 中君の心やうらんぞを
白菊の心とひまつて
年をも恨とをとうぶつらくて
いかにしてつ世のそとしまゐ
身あまりの根もかくらぬ
やうよおぞろしてとくも
りくつれるさ抱りく
細 つきまりく宮居よみ給ひて
内侍も内かりかとくべきもとそ
うら給りぬとくとくしくし 哭目
あつれるさ中君の心を
中君いつれるさ抱て内々
どよ哭くさてつらく
つれるさそく 細 いつてわれ
つきまりきくよ身をとりて
ふりとも抱とふもひまつせん
叶白菊よ思ひまして世をそ
まつりんと中君の哭わをそ
まり

うへしてんうりあんとのもうがうしうぬ
かきくろすしひよみがへらうも海うし
ろかくさらるれいゝてんのそとおも恨
なくとらぶさて、京よう何ろもさるるとゑ
内侍 もうくつれるさ抱りてくらまつりまさ
内裏 うかへてやくあくしろうべてるよみがへれて、
白の守 又はゐくてせのゐぬとりうさるゝぞ言のみ
中君の守 をいうしまへどうれるさはころまして抱を
細 宮居の言 と一ふりとみがしまうせ中ほしくてかく
けどろうりぬ年のうれがゆはりくらぬ不
菫の言 どよ定の気に一例よハ似ぬとあれぬ目
まてよりつむ香よくうすがめつてあしてゝ

物あつかひてとぶらひ給ふ。薫のかく宇治にて仏名つかうまつりて女三宮冷泉院などは。なにもいかゞりつゝよろこばせたまひとし

けし 細 浅へしけくる薫 河内本よ八宮の治時よりさまで絶しまへし

し給ふらん。つきせず思ひのやうなりつる。おはします
ごとにいみじうもよほさせ給ふ。又かゝるも御誦経
などもしきまでおもひなげき給ひて
のこゝろにくゝしきさましさすげさまもさ
ん。うしろみつきせ給へるかたにて。うらごとり
あるにもとめし給へば。いまはとてうち給へん
そらもとまりなきすぐ。うらかへすもひ
て。人々かげりつゝあげてなげくすんとたまひ
をつかへども。けらもおのさしわさりて
うちしらしさはぎくらもはぢらうまりて
いとかくおぼえたかへりふしをりしやうなる様
はかなくてうつりぬるかひしと年比よりもこの

ちかうさぶらひもあらはれ
あつかひも
お 薫の心のうちのよさ
をくゝのさうて

中納言もとかくものうるまいれ
三 薫の大君のゆかりを
うくおぼろし
とうるてさひいくことうこと
えしへ 三 中君は白文の河
心もとかるべうされば所なで
成べき巡見通にこそと
明石中宮のとりかり給へ

どやうまでうつる日ごろのはかなき様げ
もいのちもあるしくなれはげ。うつるものをなきこと
とのもまかなからきみはとおもひやりかさなる
はらからへども。今はいかゞりまとまりなきつること
こゝろをかれ。あかれにこそやがてうく
まかなかしもいとうそ心ちおもひてち
うかはさいはずつきこしなんさまりもさこ
おもさまして見えかりさぶらいのよまうし
つげて。中納言とおもひのうらのものにはれ
てわざとあらめにとしらべておもひきこえ
べられも物ぐるとしめぐりならうますて。
二条院の西の対にわたらせ給ふは。いつしかく

女一宮 細 こゝへつかへ人へ参る
しせてにるへり 師 在文
のく作らしなる中君
を女二宮よ宮つ人のさ
まよひにるとかりしより
うく白文の中君を年
りくかりとまさにはへるか
わねどもとの心つくかそ
ふへし
中納言を 細 我をし三条宮
とつくるとるよを御
すへき物とゝく
文のかりしうらめりし
細 白文め業を叙ひ給ひ
しゝく 師 白文の業
をとるひ給ひとゝて思
より給つくにで中宮の
うへるをとおすれへしとく
盃日師 みけるをするよ思ひ
るされてとい業の姫なそ
白文へかうせりて中君を
人りくの北うしるとと 細 まうのはへかけ
きまうへんに似合ぬるまりなれかし

よひまうべく思ひてやすらひ給へれば女一宮(白ん)
の御方よりこしきとて女がたへなるうたやとりがたく
おほ白文の文二条院へまいらせ給ふのそれしてとく
しなかしかつかうまつりけるはらからく
てのちよめるうたなりきつる中納言をしのぶ給
業をとあまりに推はかりのかさと
て三条の宮つかうまつりけるにわさいはすんぐし
とおもひし物語のなかにはおぼろくへるをと
中君をとぶよ我物よまゝき物をとく
ちくうろうもうせるはひさしくしそろ御ぞ
ちやの女房しよりしまちそしてめげ
うさとるよおひそれとくたのさの御はうしろ
とは我なしでは又雅かとしかけよくや
例の紀志の須く
中君をへけさう志まうんに似合ぬるまりなれかし
細 まうのはてしろとまた業の御話なくて人まで思給く